

乙女ゲームに登場する  
文学少女である伯爵令  
嬢に転生していた.....

Brahma

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前世カタリナの親友佐々木敦子ことあつちゃんはソフィア・アスカルトに転生した。  
ソフィア本人に自覚はないものの、本能的にカタリナ・クラエスが野猿と呼ばれた前世  
の親友だと感じ取っていた。カタリナが闇の魔法で眠らされた時、前世の人格が活動し  
はじめる。

原作に書かれたソフィアとあつちゃんの謎、「野猿」との出会いが気になつて衝動的に  
自分なりの解釈で再構成してみました。

ソフィアとあつちゃん視点なので原作であつちゃんまたはソフィアのいらない部分は  
原則書かれません。ぜひ原作と合わせてお楽しみください。

## 追記

33話まではほぼ原作沿いですが、原作10巻以降が待てないので…原作10巻ではサラ净化フラグが立っていますが本作では浄化されません。また36話からオリキャラが実際に登場します。

# 目

# 次

第1話	出会い	over	7	1	第11話	生徒会劇と脅迫状	74	67
第2話	おせわがかり		80		第12話	カタリナ誘拐		
第3話	高校生活とFortune				第13話	キース・クラエス誘拐事件		
第4話	転生				第14話	卒業式		
第5話	再会				第15話	卒業パーティ	86	
第6話	魔法学園にて		93		第16話	パジヤマパーティ		
第7話	続くカタリナの危機				第17話	Fortune Lover	100	
第8話	救出（前編）	II			第18話	カタリナ様の初出張		
第9話	救出（後編）と卒業パーティ				第19話	契約の書（前編）		
第20話	契約の書（後編）							
60	46 40 33 26 20 13 L							

第21話	お城での合宿講義	—	133
第22話	大浴場とダンスのレッスン	—	139
第23話	朝のお茶会（前編）	—	146
第24話	朝のお茶会（後編）	—	153
第25話	近隣5か国会合	—	146
第26話	会合お疲れ様お茶会（前編）	—	160
第27話	会合お疲れ様お茶会（後編）、 オセアンへの出張（前編）	—	167
第28話	オセアンへの出張（後編）	—	174
第30話	アラン様の演奏会の準備 が叫ぶ	—	193
第31話	孤児院に野菜を届けに（前編）	—	200
第32話	馬車の中のガールズトーク 孤児院に野菜を届けに（後編）	—	200
第33話	お手伝い	—	207
第34話	カタリナ様、再び孤児院へ 異変	—	214
第35話	魔法省での騒動	—	225
第36話	御前会議と魔法省での戦い	—	219

232

第37話

黒幕の正体

第38話

ポチの活躍再び

最終話 いつもそばにいるから

—

253 246 238

## 第1話 出会い

もし生まれ変わることができるものならもう一度あの子と友達になりたい……

私は佐々木敦子。小学校のころから、私は友達作りが苦手だった。家では、アニメを見たりまんがや本を読んでいるのが好きだつたし、学校でもそれは同じ。運動が得意ではないし、将棋や囲碁にも関心がない。音楽が得意でもなく好きでもないから吹奏楽部にももちろんはいらない。結局クラブ活動はどこにもはいらなかつた。その代わり学校図書館はわたしの楽園だつた。

何時間でも誰もいない図書館で読書していられた。

読書に夢中になつていて気が付いたら橙色の西日が窓から差し込んできているなんてふつうにあつた。

見回りの先生が

「佐々木さん、まだ図書館にいたの？ 下校時刻はとつぐに過ぎてるわよ」

といわれて追い出されるのが珍しくなかつた。

本の世界は素晴らしい。さまざまの物語、世界の様々な面白いもの、多くの偉人……わたしをいろんな場所へつれていつてくれる。

読書のおかげで、成績はトップになることはなかつたものの、5位～10位以内にははいるほどには、そそこそよかつた。

しかし小学校のスクールカーストではとりたてて得意なものがわたりは、下位だつた。わたしは変り者あつかいで、気持ち悪いとか言われ続けた。

靴を隠されたり、笛やハーモニカ、はみがきセットなどいろんなものをいじわるで隠されたりした。ひどいときは好きでもない男の子の口にわたしの歯ブラシをつつこまれたことがある。

そういうことが繰り返され、わたしは、ますますだれとも話せなくなつた。

そうして迎えた小学校の卒業式。下級生の

「もうすぐ中学、いいですね。6年生のお姉さん…。」

という送る歌を聴いていたときのわたしの気持ちはようやく終わつたという安堵だつた。

もしかしたら小学校区を超えた中学校ならわたしのような変り者がいて、気の合う友人ができるかも知れないとかすかな期待をいだいていた。

しかし、いよいよ中学校。1年3組になつた。クラスメイトの自己紹介。覚える気がないからうわのそらで自分の番が終わると図書館に行くことや自宅に帰つてアニメやまんが、ゲームをやることばかり考えていてた。

中学に入つて数週間が過ぎる。ホームルームが終わると図書館に行く。小学校の時よりも高度な内容の、市立図書館にならぶような内容の本が並ぶ。

読書好きなわたしにとつては小学校の延長でむしろ喜ばしいくらいだ。

図書館から本を借りて玄関で靴を履き替える。

吹奏楽部の楽器の音が聞こえる。

（あ～この曲聞いたことがある。アニメの曲かな……演奏できたら面白いだろうけど……）

「何某中、ファイト……ファイト……」

運動部の掛け声が聞こえる。

ポコーン、ポコーン

ラケットにはじかれるテニスボールの音。

それを聞き流して横目に見ながら校門へ向かう。

本当は部活に入つたほうが友人ができるのかもしれない。文学部、囲碁部、科学部などわたしが入つてもおかしくない文化部があつても、そもそも部室をたずねる勇気や気力がない。

帰宅部であつても放課後にファミレスや喫茶店に行こう、クレープ買いに行こうといふ女の子たちの声を聴きながら、いいなあ……楽しそうだな……と思っていた。

そんなときだつた。

「うわあああああ……」

女の子の声だつた。その次の瞬間重いけどやわらかいものが体全体にぶつかる衝撃が走つた。

一瞬意識が飛んだ。

気が付くと必死に

「ううう……ごめんなさい、本当にごめんなさい。死なないでえ、お尻で人を殺しちゃうなんて！」

涙と鼻水でぐちやぐちやな表情をした顔があつた。

ぼさぼさなくせつ毛だが、どうやら女の子のようだつた。

「だいじょうぶです……」

「ごめんなさい。」

少女は深々と頭を下げる。

「あなたは……どうしたの??」

少女は恥ずかし気にもじもじしながら横向きにほおにゆびをあてて

「わたし、木の魅力に誘われてつい登りたくなっちゃつて……はじめはうまく登れてたんだけど調子に乗つて登つてたら……足を踏み外して……やっぱり靴をはいたまま

「じゃ……じゃなかつた……貴方を下敷きにしちやつて……本当にごめんなさい。」

「……わざとじゃないのだし……私は大丈夫なので……。」

よく見ると制服とスカートが汚れている。木から落ちた時にこすつたんだろう、擦れた痕がある。

「あなたにけがは？」

と問い合わせ返す。

「ありがとう。佐々木さんは優しいんだね。」

ぐちやぐちやな顔がようやく笑顔になる。

「え……どうして私の名前を知ってるの？」

「え……知ってるよ。だつてわたしたちクラスメイトじゃない。」

「……!?」

「わたし……同じクラスの子の顔も名前もあまり覚えていないの。ごめんなさい。」

「そうなんだ。わたしは同じ1年3組の内野真樹子。はじめはマツキーというあだ名だつたけどいつのまにかモンキーになつたりしてた。失礼しちやう。確かにわたし木登りはすきだけどは猿じやないのに……。」

すこし口をとがらせ、かすかにほおをふくらませる。なんとも憎めない雰囲気だ。

その様子が愉快で、わたしは、おもわずほほえんでしまう。

「これからもよろしくね！」

笑顔で差し出された手を握り返すと、そのざらついた手はなんとも暖かく感じた。

## 第2話 おせわがかり

それからわたし、佐々木敦子の一人ぼっちの学校生活は翌日から一変した。

「これからもよろしく」

という言葉通りになにくれとこのモンキー、内野さんはわたしにかまつてくるようになつた。

一ヶ月後、わたしは、彼女にいつのまにか「あつちゃん」と呼ばれるようになつていた。

「あつちゃん」

「なあに」

「数学の宿題、わたしのあたるところが分からなくて……この問題教えて！」

「ん、本当にやつてきたの？」

「実は半分やつたら挫折して……」

「しようがないわねえ。見せて。」

「うんw」

たしかに半分までやつて挫折したノートだった。しかし彼女にしてはまだいいほう

だ。

一週間前なんでもつとたいへんだった。

「あっちゃん、助けて！」

と言つて背後からだいきついてくるから

「なあに？ どうしたの？」

つて聞いたら

「英語の訳があたるんだけどすっかり忘れてて…」

すっかり忘れて全然やつてこなかつたのだといふ。 そういえば罰掃除をさせるとい  
われてることだけ思い出して泣き出しそうな顔だ。

「しようがないなあ。 これノート。 英語の授業の前には返してね。」

「ありがとう。 あっちゃん様」

彼女は猛ダッシュで自席にもどると、カリカリと必死にノートを写し始める。

「佐々木さんはすっかり野猿のお世話係になつてるね。」

彼女、内野さんとのやりとりを見ていたクラスメイトの女子が苦笑しながら話しかけ  
てくる。

「野猿？」

「そ、内野さんのこと。 真樹子は最初マツキーだったのが木登りするからモンキーに

なつて苗字の野をつけて野猿。さすがに本人の前では言わないけど……わたし小学校のころいつしょだつたの。」

わたしの疑問に彼女はそう答えて再び苦笑する。

「休み時間に校庭の木に登つては飛び移つて、近くの野山でも同じように飛び移つて遊んでいたものだから、マッキーがモンキーになつて、あの山には巨大な猿がいるなんてうわさが流れたくらいなの。それでうちわでついたあだ名が野猿。」

「それはすごいね。」

「しかもあの通り課題、宿題はことごとく忘れてくるし。先生に叱られてその場はしょんぼりしてゐるんだけど、翌日にはけろつとして忘れてくるの。」

「それは周りはたいへんだつたね。」

「うん。でも悪意とかまったくなくて素直だからだまされて痛い目にあつてもけろつとしているの。いじわるで間違いだらけの課題を丸写しさせた人がいて彼女先生に叱られて、丸写しさせた人がさすがに悪いと思つてたら彼女、私が宿題忘れたからいけない、ありがとうとお礼を言つたことがあるの。それにほかの人が気が付かないようなアイディアを出して難題が解決したり。木に登つて子供の風船をとつたり、電柱にひつかつたたこをとつたりとか。だからあれはあれはあれで一緒にいるとなんか楽しいんだよね。」

にやりと微笑む彼女につられてわたしもわらつてしまつた。

そのほか彼女に遠足の途中で衝動的に花やキノコをみつけて走り出してたいへんないことになつたとか川でおぼれそうになつたり、川でおぼれかかった友人を助けたりとかそのたるもの内野さんの小学生時代の武勇伝を聞かされて盛り上がり、3か月後にはたくさんの方人ができていた。その後長い人生の中で野猿こと内野さんのそれが発達障害の一種だということを知ることになるのはかなり後である。

「あつちやん。それなあに？」

表紙は紫髪のツインテールの女の子がコントローラーを持つているラノベだった。

「あ、『ビバ！ゲーム』の小説版。子どものころやつたゲームが面白くて、ゲーム会社にはいるために努力する女の子の話。読んでみる？」

「うん、貸して。」

「あつちやん、それは？」

『デザリアム』つていつて、SFなんだけど未来の地球が敵国デザリアムに侵略されて、そののイケメン少佐に地球の少女が惹かれるんだけど、地球の元恋人のことが忘れられなくてなやむの。」

「面白そうだね。」

「来月、映画封切でイベントあるんだ行く？」

「うん、いくいく」

「あつちやん、そのラノベは？表紙の黒いコートの男の子と白地に赤ラインのコートにミニスカの女の子かっこいいね。」

「これは、『アート・レイピア・オンライン』。主人公の女の子がゲーム世界に閉じ込められてしまうの。そこで黒い剣士の彼に出会つて……」

「あつちやん、それ面白そう」

「『リトル・ラブ・ラプソディ』って言つて……」

その後、「めぐりめぐる物語」「恋する振り子時計（オシスラトリ）」「純真ミリバール」など同じラノベとコラボゲームにはまつていき二人してすっかりオタクとして出来上がつていつた。

内野さんのご両親ともすっかり仲良くなり、野山を飛び回つて何をするか分からないと不安になつていたご両親からは、

「佐々木さん、猿みたいに飛び回つていた娘を人間にしてくれてありがとう、もうあの子も野猿なんて呼ばれないですむようになつた。」

と意味不明なお礼を言われ

「はい……いえ、そんなことは……明るい真樹子さんのおかげでたくさん友人ができましたので。こちらのほうが感謝したいくらいで……」

とお札を返したこともあつた。

そしていよいよ中3になり、高校受験をひかえることとなつた。

### 第3話 高校生活とFortune Lover

内野さんとわたしは、近隣の高校へ一緒に行こうということになつたのだが、体育は5である内野さんは、わたしの影響でボキヤブライターと漢字は覚えて、多少国語の成績は改善したものの、本来あきっぽくて勉強はからつきしと言つていいくらいダメだつた。興味がもてないことには打ち込めない性格のようだつた。

「あつちやん、もうだめだあとのことはまかせた！」

私は内野さんのあたまをまるめたプリントのつでぽこんと軽くたたく。

「何言つてるの……まだはじめてから10分経つてないじやない。そんなんだと高校浪人になつちやうよ。」

「だつてこの分厚い参考書を見ていると、ヒューポノスがあ……きつとこの参考書には呪いがかけられているのにちがいないわ。」

「そのデイスペルはちょっと難しいよ。」

二人にしかわからないゲーム用語で返しながら、わたしは、どうしたら内野さんがやる気を出すのか考え込んだ。

彼女は、こづかいなんか渡そうものなら考えなしにぱつぱと使うだろうと両親からみ

なされて、お年玉は強制的に貯金、ふだんのこづかいも必死に言い訳を考えてようやく学用品くらいしか買ったことがなくクラスメイトでおこづかい金額最下位をほこるほどで自分の意志で数千円単位の中学生にとつては高価な買い物ができない。ときどきわたしの家でゲームをしているといった感じだ。

「よし！じやあこの受験を突破したら、わたし秘蔵の乙女ゲームをおもうぞんぶんやらせてあげる。」

「でも、あっちゃん、わたしがゲーム機もつてないよ。」

「貸すわ！試験にちゃんと合格出来たらゲーム機ごとレンタルしてあげる！」

「ありがとう！あっちゃん様。あたし、乙女ゲームのために必ず高校に合格するよ。」

それからというもの、内野さんは、乙女ゲーというにんじんにくらいつく馬のようにそれこそ馬車馬のように受験勉強にいそしんだ。

わたしも、受験勉強中、ポイントと思われることを把握したら彼女に教えて彼女の受験勉強がすこしでも効率的に進むよう協力した。

そのかいあつて、合格発表の当日、高校の掲示板に張り出された自分たちの番号をみつけると、ふたりでハイタツチをして喜びをわかちあつた。

高校合格後、内野さんの部屋に目新しいゲーム機があることに気が付く。

「あれ？ゲーム機あつたの？」

「ううん。驚け。高校合格祝いにゲーム機買つてもらつたの。」

「あら、佐々木さん、いらつしやい。ごめんね。この子のためにいろいろと…」

「いいえ。」

わたしは苦笑しながら答える。

彼女のお母さんがいなくなつたときに訊いてみる。

「高校に合格したらわたしからゲームソフトをゲーム機ごとレンタルするつて約束しあつて話して、そんなことまで友達にさせてはいけません、買ってあげるから借りるのはやめなさいといわれたんでしよう？」

「あはは…。そのとおり。あっちゃんにはバレバレだね。でももともとわたしのお年玉なのに…。」

「じゃあさつそくやろう。」

高校では、友人たちもお小遣いをある程度もらえるようになつており、さらなるオタク友達ができた。漫画、アニメ設定本、DVD、ゲームソフトを買うためにバイトにいそしむようになつた。ファミレス、メイド喫茶のウエイトレス、それがない日はゲームをやつていた。

Fortune Loverが発売されたのは高校1年の秋。

発売日の夜はなぜか星がよく見えた。普段見られない雲のようなものがぼんやり見

えた。たまたまあつた星座早見でみたらアンドロメダ銀河と書いてあつた。

「内野さん、新作ゲーム出たよ、Fortune Loverっていうの。」

「あつちやん、知つてるよ。とある国の魔法学園を舞台にした中世風のゲーム。面白そ  
うだよね。」

「早速買つて始めたんだ。」

「ふむふむ、主人公のマリア・キャンベルは、幼いころ光の魔力を発動。平民にもかかわ  
らず魔法学園へ入学。成績優秀でいきなり学年2位になつて生徒会へはいる。人柄も  
すごくいい子みたいだね。あくこんな美少女に生まれ変わりたい。何でもうまくいき  
そうなのに……こんな狸顔じやあ……」

私は苦笑する。

「ゲームやつてる時だけは、内野さんもマリアに変身できるんじやない。思いつきり楽  
しみなよ」

「そうだね。まずは悪役令嬢の弟のチャラ男くんからいこうかな。」

その日から内野さんはスマホのアイコンをゲームのキャンペーンのLineスタン  
プのマリアに変えてきていた。何種類かありマリアのスタンプをその時の気持ちに合  
わせて送つてくれる。

チャラ男ことキース・クラエスは、クラエス家の親戚筋コールマン子爵家の妾の子で

いじめられてきたものが、カタリナが第3王子ジオルドの婚約者になつたためにクラ工ス家を継ぐために養子に入つたのだが、義母になつたミリディアナとその娘カタリナに妻の子といじめられる。

その結果、ひねくれたイケメンとして多くの女性と浮名をながす。

ある日、キースは魔法学園で出会つた主人公である金髪美少女マリアを口説こうとして断られ、偶然彼女のハンカチを拾う。

「これ、君のハンカチじゃない?」

「は、はい……ありがとうございます。」

「かえしてほしかつたらぼくと付き合つてよ。」

「はい……」

金髪の美少女マリアはハンカチを返してほしくてあいまいな返事をする。

マリアはその生来の人のよさでなんとなくキースともつきあうことになり、キースの良い面もみることになる。

キースは気位ばかり高い貴族令嬢と、さりげない心遣いのできるマリアとの差にひかれしていく。

一方で、カタリナ・クラエスのいやがらせがはじまる。

「いやらしいねずみが! キースに近づいて公爵家の財産をねらつてるんでしよう? そんな

の許さないわ！」

「この泥棒猫！ キースから離れなさい！」

「いやしい身分で、どこの種ともわからぬいくせに魔法学園にはいつたからといって公爵家の跡継ぎをねらうつもり？ そんなの許さないわ。」

ある日、中庭のベンチで昼食をとろうとしているマリアをカタリナと手下の令嬢たちがみつける。

「ゴキブリにも金色がいるなんて初めてだわ。あなた、火の魔力でこのゴキブリを焼き払っておしまい。」

「はい、カタリナ様。」

黒いワンピースの令嬢はサディスティックな笑みを浮かべ、手から火を出してマリアを襲おうとする。

(いでよ！・アーセン・ゴーレム)

そのときキースが手を伸ばして念じると、土人形が現れる。

令嬢たちはおどろく。土人形はマリアをかばってのしのしと歩いていき安全な場所までつれていく。

「キース様？」

「マリア、無事でよかつた……。」

キースは不器用にマリアを抱きしめる。

「君は光の魔力を持つているだけの特別な子じやなくて、すぐ優しい子だつてわかつたよ。僕は君を守つていきたい。」

「チャラ男つて実はピュアだよね。」

「うん、彼は、繼母やカタリナにいじめられてきたけど陰で公爵家を継げるよう努力もしてきていたこと、本音を話せるマリアに惹かれたんだなあつて思うよね。」  
そんなふうに感想を言い合つたのだった。

## 第4話 転生

高2になつてまもなくのある日、昼休みが半分終わつたころ、わたしのクラスに内野さんがやつてきた。今日はきゅうりだけを食べてきて、遅刻して呼び出されたのだとう。

「また遅刻して呼び出されたつてクラスの子に聞いたよ。どうせ、ゲームにのめりこんで夜更かししたんだしよう。」

えへへ……と内野さんは苦笑して見せる。

「で、Fortune Loverはどこまで進んだの？」

「いま俺様王子のアランを攻略できそう。」

「なんだ。」

「メアリって素敵だよね。すぐ気が付いて、なかなか主人公にアランを渡さないの。」

「たしかにあそこまで気が付くのは本当にアランを愛しているからだよね。」

「でもなんとか糸口がつかめたから。苦労した。あと今朝はきゅうりしか食べてないからおなかペニペニ。」

「じゃあわたしの卵焼きあげる。」

「ありがとうあつちゃん様」

そんな風にその日も楽しく過ごした。

それから一週間後、今から思えば内野さんが事故に遭う2日前だつた。

「Fortune Loverは、どこまで進んだの？」

「俺様王子とキャラ男は攻略できただけど、腹黒ドS王子がなかなか攻略できなくて……ライバルキャラの悪役令嬢カタリナのじやまがすぐくて。」

「カタリナは婚約者だからね。必死だよ。」

わたしはへへんと笑みを浮かべながら

「わたしは全部クリアしちゃったよ。」

とドヤ顔をする。内野さんはおどろいて

「えっ!?、もうクリアしちゃったの？」

「攻略キャラ4人はもちろん、隠しキャラも全員攻略しちゃった。」

「さすが。あっちゃん、早いね、やっぱり隠しキャラもいたんだ。」

「うん、攻略キャラを全員クリアすると攻略できるキャラとして出てくるわよ。ちなみにどのキャラだつたか知りたい？」

「ちよつと～やめて～聞きたくない～～ネタばれ禁止～」

内野さんは耳をふさぐが、わたしはちよつと意地悪い笑みをうかべて

「隠しキャラの攻略はけつこうたいへんでね、闇の魔力を持つ危険人物なんだよね。攻略が成功すれば主人公と甘々なハッピーエンドなんだけど、攻略が失敗したら主人公とその友人の生徒会メンバーが彼に殺されてしまつてひどいバットエンドなんだよ。ちなみにそのキャラは赤い髪に灰色の瞳をもつてゐる童顔のキャラなんだ。」  
「このことが実は役に立つことになるとは夢にも思わない。」

帰路彼女と一緒に変える帰り道

「どう、今日うちへ寄つてく？」

「ううん、帰るよ、なんとか腹黒ドＳ王子を攻略したいし。」

それが彼女に会う最後になるとは思いもよらなかつた。

その翌日の明け方突然目が覚めた。春なのに冷え込んで星がよく見えた。

なぜかぼんやり小さな雲のようなものが見えたような気がした。それが高校1年の秋に夜空で見たものとおなじアンドロメダ銀河だと知ることになる。230万光年離れ、光速ロケットで往復56年で到達するという。窓をしめた直後にひときわ明るい赤みを帯びた流れ星があつたことにも気が付かなかつた。

わたしは、内野さんとのにぎやかで楽しい日々がずっと続くと思つていたが、その終わりは突然やつてきた。

その日は、偶然スマホを自宅に忘れてきたこともあって、内野さんが登校していないことに気が付かなかつた。

(今日は内野さん、遊びに来ないなくかぜでもひいたかな)と思つていた。

放課後に担任の教師がわたしを見て

「佐々木、4組の内野真樹子さんが登校中に交通事故に遭つたつて聞いていないか?」  
「え?」

「そうか。実はな、ここ)の交差点で自転車で飛び出して事故にあつたんだ。あわてものだからいつかこんなことにならなければと思つていたのだが……」

わたしは一瞬固まつてしまい、突然のことで信じきれなかつた。

お通夜でもお葬式でも実感がなく泣くことができなかつた。

また数日後ひよつこり昼休みにくるのではないかという感覚が残つていた。

お葬式が終わつて数日後、スマホに未読メッセージがあることに気が付く。

時刻は、事故の前日の深夜。困り顔のマリアのアイコンに吹き出しがあり

「あつちやん、腹黒ドS王子が攻略できない」

と書かれていた。

最後のメッセージがこれつて……わたしは、あの子らしいメッセージに思わず噴き出して涙が出るほどだつたが、それが引き金になつて悲しい気持ちが怒涛の津波のよう

に襲ってきた。あの子がもう二度ともどつてこない……そのことがその時になつて心に突き刺さる痛覚、喪失感となり、津波におぼれたような息苦しさを覚えしやくりあげた。

これからわたしはあの子のいない日常を生きていく。

あの子は、あの子以外の友人をはじめわたしにかけがえのないものをくれた。  
しかし、わたしのその後の人生は、結婚し主婦兼限りなくフルタイムに近いパートとなつて必死に家計と夫を支え、子どもを育てたが、子どもの就職、夫の退職を目の当たりにしたときにはほつとした。もう私は楽になると感じて過労で死亡した。

享年60歳。

もしこの世界で命が尽きて、新しく生まれ変わることができるならもう一度あの子と友達になりたい……

と願つたようにそのようになつた。

さて、わたしは、ソルシエ王国のアスカルト伯爵家に生まれ、ソフィアと名付けられた。父も母も聰明で美しく優しく、兄のニコルも同様だった。父は、領主としての経営手腕に優れていて、領地の商工業、鉱山開発で発展していた。それゆえに王様に媚びる輩に評判がよくなくて誹謗中傷されていた。現在のソルシエ王は、評判のいいはずの貴族の領地は治まつておらず、父の領地が治まつてることで宰相に抜擢した。そういう

事情もあつて家は裕福であり、父ダン・アスカルトは30台という若さでソルシエ王国を切り盛りする宰相になつた。父は単純に優秀だつたから宰相になつたのだが、政争で宰相になれなかつた貴族たちからはねたみも多く、わたしの容姿はかつこうの標的となつて気持ち悪がられた。4歳の時にお披露目のお茶会の時に老人のように白い髪、血のように赤い瞳ということで呪われた子として、アスカルト伯爵は不正をしたからその呪いだと敵方の貴族たちからは陰口をたたかれた。

そのため、外へ出ることを避けるようになつた。まるで小学校時代の佐々木敦子そのものだつた。

わたしは、奇しくも前世と同じように自宅の中で本ばかり読む少女になつていた。

本の世界、ロマンス小説の世界ではわたしは自由になれた。活躍することもあれば、エスコートされる姫にもなつた。ときには王子になることもできた。

お兄様はお父様やわたしを貶めようとする貴族たちの不正の情報を集めているようだつた。

## 第5話 再会

ジオルド様とアラン様のお茶会が9歳のときについた。

辛いのは、会場の外側の大木の下で運悪くアスカルト家の親戚筋なお父様と私を嫌う人々やお父様をねたむ貴族の令息や令嬢にかこまれて「呪われた娘、縁起が悪い、気持ちが悪い、なんでお前がお茶会に参加するんだ」、とののしられることで、予想通りわたしは会場の大木の隅によびだされた。

また不愉快な思いをするのかとおもつたらその木の上から降りてきた人がいる。びっくりして貴族の令息や令嬢たちは逃げるようになつていく。

そして思いがけなく私を助けてくれた紺のワンピースを着た令嬢?は、

「お花を摘みに……」と立ち去つていくが、お茶会の終わりに再会する。

彼女は私の髪を「絹のようなきれいな髪ね、一度さわらせてもらつてもいいかしら」とつぶやいた。

「エメラルド王女とソフィア」の一節だ。

エメラルド王女は、平民の娘ソフィアに出会い、楽しく町の中で休日をすごし、別れ際にソフィアの髪を「絹のようないいな髪ね。一度触らせてもらつてもいいかしら」

ソフィアに話しかけるのだ。

わたしは、再会したその人に

『エメラルド王女とソフィア』ですか?」

と尋ねた。その人は

「あなたは、『エメラルド王女とソフィア』をご存じなのですか?」

問い合わせてきた。わたしは、

「はい、好きな作品のひとつです。」

と応えるとその人は目を輝かせ大いに喜んでくれた。

その人は、

「カタリナ・クラエスと申します。」

と名乗った。公爵家の令嬢ではないか…

私は一瞬おどろいたが、

「ぜひ、うちへ遊びに来てください。」と手を握つて懇願された。

「はい、わかりました。お伺いします。」

と答えた。それが運命を大きく変えるカタリナ様との出会いだつた。

お茶会が閉会寸前であつたこともあり、カタリナ様は、幼いながらも赤い髪をもつ気品のある令嬢や弟をなのつた少年に連れ去られていかれた。

帰りの馬車の中でお兄様に友人ができる、それがクラエス公爵家の令嬢カタリナ様だと伝えると、魔性の美顔と呼ばれる顔の表情を緩めて「よかつたな」と言つてくださった。

その日の夢は、ソフィア本人は記憶から飛んでいるが、もう一人のソフィアである私佐々木敦子は知つてゐる。木から降りてきたくせつ毛の少女がカタリナに変身して友人になつた夢だ。すなわちカタリナこそ前世の友人内野真樹子であることを潜在意識に語りかける。

わたし、ソフィアは、その日から数日後、『エメラルド王女とソフィア』を読み返していたら、王女がソフィアにお忍びで会いに来る場面になつて、わたしは、なぜか窓を開け、バルコニーから外を見たくなつた。

そうしたら窓の正面にちかい木に登つたカタリナ様がなにやら合図をしてくるではないか。しばらくすると土人形が現れ、野菜を持つたカタリナ様が土人形に抱きかかえられて私の所へ來た。

「はい、ソフィア、うちの畑でとれた野菜よ。新鮮なうちに食べて」

野菜束を受け取る。

「あ、ありがとうございます。カタリナ様」「うん、また約束の日に。」

メイドが野菜束をみてたずねる。

「お嬢様、その野菜束は？」

「エメラルド王女があらわれてプレゼントしてくださつたの。」と答えた。

その後、わたしとお兄様は、何度かクラエス家へ行き、楽しい時間を過ごした。

アスカルト家の蔵書を見たいというカタリナ様の要望で、カタリナ様がアスカルト家にいらつしやることになった。

両親がカタリナ様にソフィアと友人になつてくれて感謝します、とお礼を言つているようだつた。両親のあいさつが終わつたタイミングをみはからい、わたしはカタリナ様に会いたい一心で駆け出していたようで息切れしていた。

「ようこそおいでくださいました。」とあいさつしたときになぜか顔が少々ほてつていたようだ。

そろそろ帰宅する時間になつたということで、玄関口であいさつしているときに、わたしは思い出した。

「先ほどお話しした本を部屋に置いてしまいましたわ。」「ああ、さつき話していた本ね。」

「そうです。すぐにとりに行つてきます。」

「ソフィア、また次の時でもいいわよ。」

「いえ、本当に素晴らしい本なのでぜひとも早く読んでいただきたいのです。待つていていただけますか？」

わたしは、ドレスをみつともなくない程度にたくし上げて早足でかけのぼる。

そのときに私自身であるソフィアとともにカタリナの心の中にわたし佐々木敦子のフラクトライトを感じた。彼女のなかにわたしがいる……

カタリナがソフィアとわたしを重ねていることが感じ取れたのだ。

わたしが戻ってきたときに、カタリナ様は兄の魔性の魅力にやられてているようだつた。

(お兄様は本当に「魔性の伯爵」みたいだわ……)という思いがかすかに頭をかすめるが、それどころではない。

「カタリナ様、この本です。」

「ありがとうございます、ソフィア」

カタリナ様はお兄様の笑顔の呪縛から解放されたようだつた。

その後、わたしはクラエス家にお兄様となんどかお伺いし、カタリナ様もキース様と一緒にアスカルト家にいらつしやることが魔法学園時代まで続いた。

クラエス家には、ジオルド王子、アラン王子、メアリ・ハント様もいらつしやることもあつてすぐに親しくなつた。

とくにメアリ様は四女で後妻の子であることから、先妻の娘である姉たちにいじめられていたという。

「わたしも、この茶色の髪も瞳は、姉たちに身分の卑しさが出ているとけなされてきてあまり好きではなかつたのです。でも、カタリナ様がそんな私の髪も瞳もことを素敵だと、可愛いとほめてくださいました。それからハント家の庭園の花を絶賛してください、烟を手伝つてほしいとおつしやつたのでお手伝いに行きました。そしてみごとに野菜がいきいきとよみがえると、「メアリは『緑の手』をもつ素晴らしい存在だ」おつしやつてくれました。だから、きっとソフィア様も大丈夫ですわ」

メアリ様はそう言つて私に微笑んだ。

私はとても驚いた。

「堂々として、とても立派な令嬢にしかみえないメアリ様がご自分を嫌いだと思つていたなんて……」

こうしてメアリ様とも大親友になつて本の話をするようになると興味をお持ちになられた。

そして本をお貸ししたら感想を聞かせてください、カタリナ様とともに読書の楽しみ

を分かち合う友人をさらに得ることができた。

カタリナ様の15歳の誕生日パーティも招待された。パーティの終わりがけにメアリ様と一緒に「カタリナ様と踊るのが殿方ばかりで悲しい。」と話したら踊つてくれた。

## 第6話 魔法学園にて

魔法学園に入学して最初の試験は、アラン様に次いで4位でメアリ様は5位だった。

魔法の成績はメアリ様のほうがよく、学問のほうは、読書の蓄積がモノを言つてジオルド様に次いで2位だったが、お兄様のように魔法をうまく使えないこともあるって魔法の成績がいまひとつだったのでもう4位になつた。平民で光の魔力をもつマリア・キヤンベルさんは総合2位、そしてメアリ様、キース様とともに生徒会に入ることになつた。

マリアさんが、光の魔力を持つたがために貴族の隠し子と誤解され、努力に努力を重ねてきたという境遇をお聞きしたとき、メアリ様も私に話したように末の四女で母親が貴族でないことで卑しい身分の血が流れているとけなされ。つらい目にあつてきただが努力してきたんですけど話され、皆さんは、お互に深く同情された。

さてある日カタリナ様から提案があつた。

「みんなに話があるんだけど。」

が頻繁にあるようなの。」

「僕もそういえば見たことがあります。とめたんですけどね。困ったことです。」

会長が話をあわせてくる。

「そうでしたか、目が行き届かずすみませんでした。王族として責任を感じます。」

「そんなことがあつたのか。気が付かないですまなかつた。俺も王族だ。責任を感じる。しかしどんでもないことだな。」

アラン様が憤慨しメアリ様がかすかに顔をしかめてうなづく。

「身分差があるとはいえ、それをむやみに振りかざすことが許されるのなら国の法が成り立たない。」

二コル様が言うとジオルド様がうなづき、

「まつたくそのとおりですね。」

と付け加える。

「義姉さんにも話したのですが、キャンベルさんを一人にしないほうがいいと思います。」

「そうですね。なるべくだれか一緒に行動しましよう。なにかあるときはキャンベルさんとペアになるとか……私たち全員がそろわないことはあつてもキャンベルさんを一人にしないようにしましょう。」

「とくに昼食の時間は一人にしないほうがいいとおもうの。キャンベルさんが中庭で一人で昼食をとつてているときにそのようなことがあつたので。」

カタリナ様の発言をききながらわたしといつしょにメアリ様もうなづいている。

「マリアさん、私たちと一緒に食堂でめいしあがりませんか？」

メアリ様が提案し、わたしも  
と付け加え、メアリ様もうなづく。  
「はい、ありがとうございます。」

「そうですね。メアリとソフィアが一緒に安心です。」

「ん？ジオルドさまあ、なぜ私の名前がないのですか？」

「えっと、カタリナは私の婚約者ですから二人で食事する機会がもつとあつたほうがいいのではということです。」

「いーえ、義姉さんのことは義弟のわたしに任せてください。王族に輿入れするにもま  
ずマナーです。食事のマナーの練習もしないといけないので。」

なぜか話がそれで、わたしもマリアさんもメアリ様も苦笑してしまう。  
夏休み。

わたしは、自宅に本を持つて帰りたいので早々と夏休みの課題を片付けた。

このことを休み明けに話したら、夏休みの終わりごになつてキース様にも手伝つてもらつたというカタリナ様だけではなく早々と夏休みの課題をかたずけたというメアリ様にも苦笑いされた。

わたし佐々木敦子は、今の私であるソフィアの意識に語りかける。

内野さんとTUTAYAなどで本やゲームやDVDを買つたり、喫茶店やファミレスで楽しく過ごした思い出だ。

Fortune Loverや乙女ゲーム以外にも、『アート・レイピア・オンライン』、刀のイケメン擬人化の『剣舞刀舞』、『天の川星雲英雄伝説』のラインホルト・フオン・エパミノンダスと親友ペロピダス・キルヒイース、そして彼らが率いる天の川星雲帝国軍には腐女子が夢中になるBL仕立ての「神聖槍騎兵」という勇猛なイケメン軍団をはじめとするハンサムな提督たちがいて人気があつた。こうした好きな作品について話したり、グッズを集めたり、時にはグッズを買いすぎてクレープを半分こして食べたり、高校生なのでコラボカフェで一、二品しか頼めなくとも楽しくすごした思い出だ。そうしているうちに「魔性の伯爵」シリーズの新刊の発売予定日になつた。

今日はカタリナ様といつしょに会うことになつている。

わたしは、目立たないよう長い髪をまとめて結び帽子のなかにしまい、しまいきれ

なかつた髪はポニーテール状にして背中にたらす。

お兄様も一緒だ。

カタリナ様が、

「ソフィア、あのお店はなんだろう。いつてみようよ。」

というので入つたら素敵なアクセアリー店だつた。

「これ、ソフィアに似合うんじゃない？」

カタリナ様がすすめてくれたのは、黄色い雄蕊をあしらつた白い花のついたヘアピンで帽子にもつけられるものだ。非常に上品なもので私も気に入つてしまつた。そして購入して帽子につける。

「カタリナ様にはこれがお似合いです。」

赤やピンクの小さな花をあしらつたヘアピンだ。カタリナ様も気に入つたようで髪につける。上品なうえにアクセントになつてゐる。それから目的の本屋を見つけると、お目あての「魔性の伯爵」シリーズ以外にも気にある本がいくつもあつた。王子と敵国の王子の恋物語とか。

「なかなかディープね。」とカタリナ様は苦笑いをしていた。

お菓子屋さんもいろいろな種類があつてわたしもカタリナ様も夢中になつて何種類

も購入した。

「はあ、今日は本当に楽しかったわ。」

カタリナ様が満足そうに話す。

本、お菓子、雑貨……

「はい、町へ出てこんな楽しく感じたのは初めてです。」

「さあ、帰りましょうか。」

と声がかかったとき、私は買い忘れがあつたことと、昔カタリナ様と買い物に行つた  
ような気がすることと、お兄様がもつとカタリナ様と親しくなつて私の義姉になつてほ  
しいということを同時におもいだした。

「そういうえば、なにかカタリナ様とはるか昔にこのように買い物したりしたような気が  
します。」

「え、町へ買い物にきたのははじめてだけど……」

「そうですね、夢に見たのでしょうか。ていうか、あまりのも楽しくてもうひとつ目的を  
わすれていたようです。」

「どうしたの？ ソフィア？」

「買い物があつたので、もういちど買い物にもどります。」

「え、それならわたしも一緒に行くわよ。」

「いえ、使用人について行つてもらうので大丈夫です。カタリナ様はここでお兄様とお待ちになつていてください。」

それからお兄様に小声で耳打ちする。

「お兄様、頑張つてください。」

わたしは買い物にいつてもどつてみると、カタリナ様はお兄様の魅力にすっかりめろめろになつている様子だった。馬車に乗つているうちに正気にもどつたようで私は複雑な気持ちだった。

## 第7話 続くカタリナの危機

期末試験の前日だつた。

わたし佐々木敦子は、転生したわたしてあるソフィアにカタリナに危機が迫つていてることを自分の思い出を通して語りかける。

カタリナの前世である内野真樹子は母親にたたき起こされる。

ゲームに夢中になつていたカタリナの前世内野真樹子は、遅刻すれすれの時間に自転車で登校することが続いていた。夜遅くまで俺様王子（アラン）、腹黒ドS王子（ジオルド）攻略に励んでいたようだ。選択肢を選ぶと好感度が上がるのだが、好感度の組み合せがよくてもそれぞれの選択肢による好感度の上がり方がランダムなためになかなかクリアにならなかつたりする。その日は、腹黒ドS王子（ジオルド）攻略が中途であつたにもかかわらず、見通しの悪い通りで運悪く出会い頭にトラックにはねられたのだった。

お葬式が終わつて数日後、スマホに未読メッセージがあることに気が付く。

時刻は、事故の前日の深夜。困り顔のマリアのアイコンに吹き出しがあり  
「あつちやん、腹黒ドS王子が攻略できない~」

と書かれていた。わたしは、吹き出すほどお笑いした後にその10倍以上の時間をしゃくりあげて泣いた。

わたしソフィアは非常に悲しい夢を見た。

その夢をみたとき、ふと夜空を見たくなった。空には三つの「かすみ」のようなものが見えた。一番大きな「かすみ」は、光の速さで230万年かかるという「マゼラン棒渦巻銀河」、そのちかくにみえるものの、光の速度で16万8千年かかる距離に隣り合っている「大マゼラン雲」と「小マゼラン雲」。「マゼラン棒渦巻銀河」を見ていると、子どものころよりもずっと昔にあそこにいたような気がした。星までの距離は、風の魔力で空気の揺らぎを抑える望遠鏡と巨大なお椀状の電波を発する魔法装置でその大きさや距離がわかると授業で習つたことを思い出していた。

一方で夢の内容はほとんど覚えていないのに大切な人力タリナ様にかかわる夢のようないい胸騒ぎを覚えて、学園の畠で作業しているカタリナ様に会いに行つた。試験が近いから緊張しているのよ、とカタリナ様はおっしゃつたが、トゲのように心に引っかかる不安はぬぐい切れない。

期末試験は、主に魔法の習熟度を見るものだつた。大魔法使いが魔法道具を盗まれないようにトラップを仕掛けたダンジョンで魔法の石を見つけるものであつた。3～4人のグループで協力し合いながら進むようにといふ試験だつた。

凍り付くような回廊をジオルド様の火属性魔法ファイア・ボルテックスでぐり抜け、巨大な主のいる幅20mはあるだろう地下水路をキース様の土属性魔法アーセン・ブリッジとアーセン・ポストで渡る。

矢が襲ってきたときだつた。ジオルド様がハンド・フレイムで矢を焼き払い、キース様がアーセン・ゴーレムでわたしたちの盾になつてくれたほんの少しの間に、カタリナ様が行方不明になつた。あとでわかつたことだが隠し扉で別の通路に滑つて投げ出されたこと明らかになつた。お兄様とわたしは、風の魔力でカタリナ様の声を拾い、「キノコ」という言葉を拾つて、その声の方角を目指してすすんだ。

最初にカタリナ様を発見したのは私だつた。

カタリナ様は、崖から足を踏み外して落ちようとしている瞬間だつた。

カタリナ様を救いたくない私は必死だつた。全身全霊でカタリナ様の腕をつかんだ。もう限界かと思つたときに下から竜巻のような風が起こつてわたしたちを包み込んでくれた。

後でわかつたことだが、ラファエル様（その時点では事情があつてシリウス・デイーク様と名乗つていた）が救つてくれたのだつた。

カタリナ様の危機はさらに繰り返して訪れる。その日はお昼休みの直前に生徒会役員が全員学内の困りごとの相談に駆り出されていた。

それを解決して、さて昼食と食堂へ行くと、そこは異様な雰囲気につつまれていた。カタリナ様を普段から煙たがっていた令嬢たちがカタリナ様を取り囲んでいた。激しい口調からなにやら糾弾しているようだつた。

ジオルド様が「こんな状況証拠で…。」、キース様が、「あなたたちは、本当に義姉さんがこんなことしているのを見たのか」と二人ともそろつて令嬢たちを目の笑つていな笑顔で見すえた。マリアさんがカタリナ様をかばうように令嬢たちの前に割つて入つて「こんなのはすべてでたらめです。カタリナ様は何度もわたしをかばつてくださいました。わたしの大切な方を侮辱しないでください。」と肩を震わせて憤慨していた。証拠書類は、根拠から状況の描写など非常に具体的で、そのまま訴訟文書に使えるほど完成度だつたが、事実からはあまりにもかけ離れた描写にマリアさんが感じたのと同様な怒りを覚えた。「カタリナ様にこのような器用さや狡猾さはありません。」とわたしは証言した。

これでカタリナ様の危機は去つたのかと思つていたところ、マリアさんが用事があるといつたので、あわてて皆でこんなことがあつた後だからと止めたものの、たいしたことありませんからとおっしゃつてたので止めずにそのまま行かせてしまつた。

わたしたちは、このときにマリアさんと一緒に行動しなかつたことを非常に後悔することになる。

マリアさんが行方不明になつて4日後今度はカタリナ様が中庭のベンチで倒れた状態で発見され、身体に異常はないもののいくら音を立てても搖さぶつても起きない状態になつていた。

わたしソフィア・アスカルトは、ベッドでカタリナ様が目を覚まさない悲しみに打ちひしがれていた。

「絹のような美しい髪ね。さわつてもいいかしら」

あのエメラルド王女とソフィアに出てきた名セリフ。

「ソフィア様の絹のような美しい髪もルビーのような瞳もすてきだとおもいますよ。」

「私とお友達になつてくれませんか？」

明るい太陽のもとへ連れて行つてもらえたあの楽しい日々を、カタリナ様を喪う…  
耐えられないと思つた。そのとき

「そうよ、もう一度失うなんて耐えられない」

と聞いたことのあるような少女の声が脳裏に響いた。

ソフィアのなかにいる私佐々木敦子は叫ぶ。

「せつかく出会えたのにまた失うなんて絶対に嫌」

「こんなところでめそめそしていないでわたしをあの子のところへ連れて行つて  
ソフィアに脳内会議があるならわたしはその一員だ。

大人しくて弱気な彼女、まさしく前世のわたしの生き写しのような彼女に行動を起させるのはわたし佐々木敦子だ。ソフィアは決心してくれたようでカタリナのベッドのもとへ向かっていった。

## 第8話 救出（前編）

「ソフィア様、こんな時間に??」

カタリナ様のメイドであるアン・シェリーは驚いて息を切らしているわたしを見る。

「カタリナ様が目を覚ますまで呼びかけます。」

ジオルド様、お兄様、メアリ様、アラン様、キース様がやつてくる。

行方不明なマリアさんを除く全員がカタリナ様を呼びかける。

「どうか、助けてください。」

ソフィアをはじめ皆の祈りを私は受け止めて、ソフィアの心に呼びかける。

「任せておいて、必ず連れ戻してくるから。あなたたちは、カタリナをここで呼び続けて…。」

前世で、路傍礫という方が書いたアート・レイピア・オンラインというラノベがあつた。世界で1500万部を売り上げ、全25巻が出て第20巻までアニメ化もされ、まだ続いているヒット作。

わたしは、カタリナの意識が内野さんになつてそのラノベと酷似した仮想的なVRM MO世界に閉じ込められていることを知っていた。

シリウス・ディーク、本名ラファエル・ウォルトが本気でカタリナを殺す気がないために闇魔法で永遠の眠りにつかせるためには、カタリナの意識をどこかへ閉じ込めないといけない。それは奇しくもアート・レイピア・オンラインのナーブ・ヘッドギアが着脱不能な場合に酷似した状態、すなわち1～2巻のベルクラツド編と同じ状態を生理的に生み出すものだつたのだ。闇魔法なので装置のようにオン・オフ、ログイン・ログアウトできないという大きな違いはあつたが。わたしは、その仮想VRMMOが作り出した世界でカタリナの意識である内野さんに会うことができる。

夕暮れ時に、内野さんはわたしの教室にやつてくる。

「あつちゃん、おまたせ。」

「Fortune Loverはどこまで進んだ？」

わたしは、内野さんに話しかける。

「うん、いま腹黒ドS王子を攻略中。」

わたしは少し困った顔を彼女に見せてから

「学校はどう？ 楽しい？」

内野さんはとまどつたように

「あ…え…うん、楽しいよ」

と答える。

その後だつた。内野さんは、驚いたように目をこすりはじめる。

「ああ、彼女に今のソフィアの姿が見えたんだなとわたしは悟つた。

「私はつても楽しいよ。あなたにあえて、こうやつて過ごすことができて。

だけど、あなたの世界はもうここじゃないでしよう。」

内野さんの表情は驚きと疑問符をないまぜにした表情になる。

「あなたの世界は別にあるでしよう。そこにはあなたを待つている人たちがたくさんい

る。」

「あつちやん？ 何のこと？」

「ほら、ねえ、聞いて。みんながあなたを呼んでいるから。」

「カタリナ、起きてください！ もう君のいない人生は考えられない。」

「起きてよ。義姉さん！ ズッと一緒にいてくれるつて約束しただろう。」

「カタリナ様、起きてください。あなたがいないと私は頑張れないのです。

「起きろ！ いつまでそうやって寝ているつもりだ。このアホ令嬢！」

「カタリナ、目を覚ましてくれ」

「カタリナ様、起きてください。」

そのとき内野さんの姿が細面で長髪、切れ長の目、青と白が組み合わされた幾何学文様のワンピース、ゲームで見慣れた悪役令嬢カタリナの姿に変わつた。

そして教室の壁と床が崩れ始めた。

「元の世界へ戻らないと……あつちやん、実はマリアが行方不明なの。もしかしたらどこにいるか知っている？」

「マリアは無事よ。学園の敷地内にある昔デイーク侯爵家が建てた倉庫があるの。」

私の脳内の記憶が空中に立体画像となり、魔法学園と魔法省の敷地が映し出された。

倉庫の平面図と断面図が映し出される。

「この地下一階の隠し部屋にマリアは閉じ込められているわ。そしてここに地下室をあけるボタンがある。」

倉庫の奥の棚のわきにあるボタンが映し出される。

「それから、生徒会長は……凄く悲しそうな眼をしていた。どうして……あああっ……。」

カタリナになつた内野さんの立つている床が細かいダイスのようになつて崩れ落ちかける。

必死に彼女は手を伸ばす。

「あなたは、わたしたちを救つてくれたように、きっと会長のことも救うことができるわ。シリウスを救うのに光の魔力はいらないの。」

「光の魔力がいらぬいってどういうこと？」

わたしは、カタリナの意識に語りかける。

カタリナの脳裏にシリウスルートの画面を映し出す。

「あれ？ あつちやん、これは？」

「シリウスルートだよ。」

「シリウスが母親との思い出を語っているでしょ、それがヒントになるんだよ。」

母親との思い出、彼の本当の名前を呼ぶことで彼を救うことになる。彼の本当の名は、ラファエル・ウォルト」

「救うつて？ 本当の名がラファエル??」

「そう。ラファエルだよ。覚えておいて。きっと役に立つから。」

わたしの言葉は疑問に思つたことだろう。

カタリナである内野さんは崩れた床の下からまばゆい光の穴にすいこまれていく。

彼女の瞳からは大粒の涙が流れている。

「あつちやん、久しぶりに会えてうれしかったよ。事故で何も言えなくてごめん。さようなら。本当にありがとう。」

彼女が光の穴に完全に吸い込まれて消えようとしたときには

「わたしあとでもうれしかった。今度はソフィアとしてずっとそばにいるから。さようなら、ありがとう。私の大切な親友。」

とつぶやいた。叫びたかったのに叫び声にならなかつた。

彼女はあの世界にもどつたのだろう。ソフィアのいる世界に。ソフィアは、カタリナの枕もとで泣いていた。

カタリナは目を覚まし、

「泣かないでソフィア。おはよう」と笑顔でつぶやき、起きあがつた。

「カタリナ様」

ソフィアが抱き着いたのに続き、普段令嬢中の令嬢と評されるほど堂々としているメアリが涙を流して

「カタリナ様、とても心配したのですよ」

だきついていた。

ディーケ家の倉庫へ向かう道中でソフィアとしては思わず「お優しい方だと思つていたのに。」とつぶやいてしまうが、ソフィアの脳裏に佐々木敦子としては、闇の魔力も持つ存在だと警鐘を鳴らしていた。

前世のわたしがゲームで知つてゐる記憶の通りディーケ家の倉庫地下の隠し部屋にマリアがいた。その先の奥の部屋に会長シリウスがいるのだろう。

マリアの繋がれた鎖を断ち切つて、シリウスがどこにいるか尋ねる。

「この部屋のある廊下の突き当りに黒い扉があります。そこに会長はいます。わたしも

行きます。」

皆危険だからと止めたが、マリアは、「会長の持っている不思議な力は闇の魔力です。光の魔力をもつてているわたしも行つたほうがいいですね。」

と強い意志の瞳で皆をみつめたので一緒に行こうという空気になつた。

皆警戒をしながらその扉を開けた。

そのときだつた。わたしソフィアですらもどす黒い雰囲気を感じたがマリアさんはいつそう敏感に感じているようで顔色が悪い。

部屋の壁には呪文のようなまがまがしい文字がぎつしり書かれ、紫色のろうそくが無数ともつていた。

## 第9話 救出（後編）と卒業パーティ

会長は、部屋の真ん中にいらっしゃった。

さて Fortune Lover のシリウスルートでは、ハッピーエンドに至るまでいくつかの分岐がある。

生徒会室で、会長の入れた紅茶は優しい味がする、と言っていたのは、Fortune Lover ではマリアだつた。シリウスの気持ちはそれで揺れ動いて、マリアが倉庫の地下室にとじこめられずにハッピーエンドになる分岐もあつたのだが、シリウスルートを初めてクリアしたときには、ディーク家の倉庫地下室に閉じ込められる展開になつた。そこで光の魔力を直接使おうとするのは愚策だつた。

「この偽善者が：それで他の他の奴らのように僕のこと救ってくれるというのか？」

聖女カタリナ・クラエス様」

ゲームで、シリウスのこのセリフの末尾は、「光の聖女マリア・キャンベル様」だつたのだが、なぜかカタリナになつてゐる。

ちなみに、シリウスルートでのマリアのセリフは、

手を合わせて、「わたしは普通の平民の少女にすぎません。光の魔力も傷をいやすこ

とはできますが、『伝説の光の契約の書』を習得しなければ人を救うことはできない、と聞いています。』

「だから私のできることは、あなたが苦しんでいるときに救つてあげることはできませんけどそばにいることはできます。」

「そばにいて、悲しいとき辛いときに話を聞いて、元気が出るまでいつしょにいますから。」

だから、泣かないで、ラファエル』

という感じになる。カタリナはそれをうまくやつてのけ、闇の魔力は消えていった。わたしソフィアは、呆然とその場の成り行きの一部始終をみていたが、なぜか不思議ななつかしさを感じた。あたかもその場面に居合わせたかのように。そのときわたしはソフィアではなく、透明な衝立の向こうに私の分身がカタリナ様のように会長によりそい、話しかけていたように感じていた。

この不思議な感覚はなんなのだろう。

ラファエル様については、闇の魔法が使われた事情で魔法省の捜査が入った。魔法省は魔法に関して犯罪が行われた場合は警察権がある。『デイーク侯爵家一族に捜査の手が入り、デイーク侯爵夫人をはじめ闇魔法にかた首謀者たちがラファエル様の証言によって逮捕され、ラファエル様は魔法学園を退学になつた。しかしラファエル様自身は

基本的には親族を殺された被害者である事情から、その身分は魔法省預かりとなつた。

二コルの学年の卒業パーティーの日がやつてきた。

わたし佐々木敦子の意識はカタリナに向いているが、破滅エンドは回避しているという見立てだ。

しかし、カタリナは何となく落ち着かない様子だ。

二コルに「渾身の野菜束」をわたし、アランが爆笑している。  
なにやらマリアのほうに意識が向いている。

たくさんケーキを食べているところもいつもどおりだ。

わたしソフィアは、カタリナ様がたくさんケーキを食べ、キース様に食べすぎを注意  
されているところをみたが、なにかまだ食べ足りなそうだ。

メリヤ様が、「私のケーキも召し上がりなさい。」

と話しかけられているので、わたしも

「私のケーキも召し上がってください。」

とカタリナ様に話しかけた。

「ありがとう、飲み物をとつてくれるわね。」

と言つてなぜかマリアさんのほうへ向かつていて。

カタリナはしごれをきらしてマリアのところへいったようだ。

「マリア、好きな人はいないの？」

マリアはかすかにほおをあからめて

「わたしは、カタリナ様をお慕いております。」

と答える。

「それはうれしいのだけれど、そうじやなくて気になる男性はいないの？」  
カタリナの問いにマリアは思案顔になつて

「気になる男性……」

とつぶやくものの、結局1分もたたないうちに

「いませんね。」

と言い切り、「私が気になるのも、お慕いしているのもカタリナ様なのです。これから  
もずっとおそばにいさせてください。」

とほんのりほおをあからめて微笑みながら

カタリナの質問に答えている。

(よかつたね、カタリナ、破滅工ンドを回避できて)

さて、マリアさんとカタリナ様の会話が聞こえ

メアリ様がふたりに近づいていく。

「マリアさん、ぬけがけはいけませんわ。わたしもカタリナ様とずっとおそばにいさせ

「ください。」

そしてわたしも、

「わたしもですわ。カタリナ様、ずっとずつとおそばにいさせてください。」

そうしたらアラン様、お兄様、ジオルド様、キース様もいらつしやった。

「大切な義姉をジオルド様だけに独占させるわけにはいきません。義姉に王子様のお妃がつとまるとはおもえませんし、必ず婚約は解消させていただきます。」

「キース様、このメリ・ハントも協力させていただきますわ。」

わたしもカタリナ様が独占されてしまうのはつらい。ロマンス小説を語り合える大親友。

大昔から友人だつたような人をだれかに独占されるのは耐えられない。

「そうですわね。メリ様わたしにもお手伝いさせてください。お兄様もカタリナ様を独占されたくないですよね。」

お兄様は無言でうなづいた。

アラン様や、マリアさんもわれこそと加わり、いつのまにか生徒会メンバーで雑談の輪ができていた。

卒業パーティが終わって、生徒会室でささやかなお茶会をする。お兄様のお別れ会を兼ねている。

マリアさんの新作お菓子のお目見えだ。お母様と一緒に新しいレシピをつくったのだという。カタリナ様は大喜びで、マリアさんのお母様にもぜひお礼をお伝えして。と話していた。

「カタリナ様、お茶もいかがですか。」

メアリ様が微笑んで紅茶をさしだす。

カタリナ様は、それを口にすると、はつとしたようだ。

そのときドアが開いてラファエル様があらわれる。

カタリナ様は一瞬驚いたようだが、笑顔になる。

メアリ様とアラン様がカタリナ様をサプライズで喜ばせようとだまっていたようだ。これからもいっしょにいさせていただけますか、とおつしやるラファエル様に

カタリナ様はもちろんですわと言つて手をとる。

またライバルが増えましたわ、何人たらしこんだら気が済むんだ、婚約者の前でどうどうと・・といつた小声が聞こえたような気がするが気のせいだろう。

わたしは、「カタリナ様、最近新しくおもしろい小説のシリーズを見つけました。いかがですか?」

とお見せする。

目次をごらんになつて

「おもしろそうね。ソフィア」

「どつてもいいお話なので。おすすめです。ぜひまた一緒に読みましょう。1巻をもつてきたのでお貸ししますわ。」

「ありがとう、ソフィア」

「しばらく会えなくなるが妹をたのむ。」

「いえいえ、こちらこそよろしく頼みます。」

お兄様が笑みをうかべる。

「お兄様、いつでもたずねてきてください。また1年も蚊帳の外では、ほかの方におくれをとつてしましますから。」

わたしは、お兄様がご自分の気持ちに正直になつて、カタリナ様とむすばれ、わたしは義妹になつていつでもいつしょにいたいのだ。

そうわたし佐々木敦子もカタリナである内野さんと同じ時間を過ごしたい。

「さあ、皆さんめしあがりましよう。」

マリアさんの合図で、カタリナ様以外もお茶とお菓子に手を伸ばす。  
楽しい時間が過ぎていった。

# 第10話 学園祭

2年に一度の学園祭の季節が来た。

生徒会メンバーは美男美女が多いこともあつて人気があるので、演劇をしてほしいと  
いう署名がかなりあつまつてゐる。

「これは、無視できる数じやないですね。やるしかないですか……」

ジオルド様は思案顔だ。貴族の生徒でも平民であるはずのマリアさんを疎ましく考  
える人ばかりではなく、美人で優秀だからと潜在的に敬意や好意をもつてゐる人はかな  
い多い。ときどき男性に口説かれることもあるらしく、カタリナ様が追い払つてゐるそ  
うだ。またカタリナ様のクラスメートでマリアさんにも好意を持つてゐる人は普通に  
いる。またカタリナ様が生徒会室に出入りすることについて、疎ましく思つてゐる人以  
上にその人柄から聖女として慕つてゐるファンも多いので出演することを期待されて  
いるのは間違いない。

だから無視できない数の署名があつまるのは自然なことだつた。

私は手を擧げる。

「わたしが、シナリオを考えます。カタリナ様も参加しませんか？」

「そうです。ぜひ一緒にやりませんか?」

わたしとメアリ様は目を輝かしてしまった。

「え、私はセリフ覚えられないから、木か石の役とかないかなあ……。」

「え、そんなあ」

「舞台にあがるカタリナ様を見てみたいです。」

「じゃあ、いつも入り浸つているから裏方ならやるわ。畠仕事で鍛えてるし、大道具係とか、掃除とか黒子とか。」

「そうですか……。」

「生徒会メンバーは人気があるので分散配置しましょう。」

わたしは、ジオルド様の指示でお兄様といっしょにあるイベントの呼び込み要員としていったのだが……。

(あれ……。皆さんお兄様しかみていない??)

「すみません。皆さんニコル様しか見ていないのでこちらへいらっしゃいません。」

もつともな苦情が来た。

「お兄様、すみません、場所移したほうが良いようです。」

「そうだな……何かかえつて迷惑かけるようだし……。」

わたしたちは、なるべく人目のつかない場所に移動した。

しばらくするとカタリナ様が生徒会メンバーの次に仲の良いクラスメートたちとやつてきた。

「ソフィア～ソフィア～どこ～」

わたしを探しているようだ。

「こちらです、カタリナ様。来てくださったのですね。」

「久しぶりだな、カタリナ。」

気のせいかカタリナ様の視線がなんとなく明後日の方向、お兄様をさけるように泳いだ感じになっている。

「どうしてこんなところにいたの？」

実は…とお兄様の魅力でお客様がお兄様しかみなくなるので…と説明するとカ

タリナ様は苦笑する。

「なんだ、ソフィア。おなかすいてない？ 差し入れ持つてきたわよ。けつこうおいしいお店でているから。」

そう、魔法学園の学園祭は、サンドイッチ、パン、お菓子、軽食の一流店が廉価で新作を出す場所になつてているのだ。今後の売り上げにつなげるために各店自信作をだしていて、食の祭典ともいわれている。

「ありがとうございます。でもカタリナ様。どうしても演劇はでていただけないのです

か？」

わたしは、ほんのりほおをふくらませる。

「わたしは、生徒会メンバーじゃないし……」

と判で押したような言い訳がかえつてくる。

「舞台でのカタリナ様を見たいです。」

「カタリナは出ないのか……。」

お兄様の美しさにカタリナ様はよろけているようだ。

「ニコル様が出た方がお客様が喜ぶと思いますよ。」

とおっしゃるけど致命的な問題がある。

それはその表情の変化が微妙すぎて家族ごく一部の人間、たとえばラファエル様くらいしかお兄様の表情の変化を読み取れないということだ。

「俺には、演技ができない。」

「お兄様は身内からのひいき目を差し引いても魔性の伯爵といつていいほどの魅力をおもちですけれど……顔の表情が誰にでもわかるように動かせないので。カタリナ様が1年生の夏休みのボート遊びの時、皆様がお兄様の表情がわからなかつたので、あれ皆様は分からぬんだということがわかりました。」

「でも相手がカタリナ様なら笑顔を浮かべることができるかもしません。」

「え～ソフィアが出ればいいじゃない。ニコル様は、시스コン級と言つていいほどの妹想いだし…。」

「たしかにそうですけど、カタリナ様だけは特別なのです。そうだ！お兄様にあの劇のせりふを言つてもらいましょう。」

わたしは台本を取り出す。

「相手役がカタリナ様なら、お兄様も笑顔でせりふを言えるはずです！」

「お兄様、台本はこちらです。」

カタリナ様はなにやら覚悟を決めたようだ。嬉しいことに顔に（ソフィアは、大好きなお兄様の演技が見たいのね。わたし親友の願いを叶えられるよう頑張るから。）と書いてある。

お兄様は

「ソフィア、やはりまずくないか？カタリナはジオルド王子の婚約者だし。」

「形だけの婚約ですし、お兄様は卒業してしまって不利なのですからこんなときこそアプローチしないと！」

お兄様は覚悟を決めたようで、台本を手に取ると

「それでは…。」

と演技をはじめる。

「貴女を愛している。」

それはそれは素晴らしい魔性の笑みを浮かべて、カタリナ様がふらついている。

「わっ、私もです。ニコル様」

これは頭からせりふがとんでいるやつだ。

お兄様もかたまつていてる。

カタリナ様はようやくせりふの誤りにきがついたようだが、お兄様は王子様の演技を続けてカタリナ様をだきしめる。

この場面を一瞬を絵にできないだろうかと一瞬考える。  
むかしそんな道具があつたような…

魔法省だろうか…

わたし佐々木敦子はこの場面をスチールにしたいと思つた。F o r t u n e L o v e rにはなかつた画面だ。内野さんが幸せそうな様子を見たいのだ。しかしこの世界にはカメラはない。ただもしかしたら魔法省で開発されるのではないか…そんなことを考えた。

「カタリナ… たとえあなたが別の人るものになつても、俺はきっと…」

(お兄様、やりましたね。)

わたしはうれしくなつて思わず満面の笑みをうかべてしまう。

クラスメートの皆さんもお兄様が微笑んだときにその美しさにくらくらしたようで、瞳がうつろで顔を桃色に染めて千鳥足になつていて。

ようやく正気に戻ると、カタリナ様は、マリアさんのお店にいくけどと話している。クラスメートの皆さんは刺繡の展示を見に行きたいようだ。

しばらくして生徒会劇の時間が近づいてきたので、わたしは、舞台のある場所へ移動した。

「義姉役の人が腹痛と頭痛でとてもやれないということです。ジオルド様どうしましょう。」

という声が聞こえた。

# 第11話 生徒会劇と脅迫状

カタリナ様のクラスメートたちや裏方をする令嬢は「カタリナ様がいいと思います。」「カタリナ様がするのあれば皆納得すると思います。」と口々にカタリナ様の名を挙げる。しかも善意でカタリナ様の演技が見たいと推薦しているのだ。ジオルド様は笑みを浮かべ、カタリナ様に台本をわたしている。

「せりふはそんなに多くないです……たとえば最初の出番のせりふをカンペに書いておけばどうですか？ テストじゃないんだからだいじょうぶですよ。」

（そんな…： 優秀なあなたといつしょにしないでよ。）

そんなふうに言いたげなカタリナ様は少々蒼くなっている。

学園祭には、小さい子もいっぱいいくるので誰でも知っているお話をした。

大昔同じような話を読んだことがある気がする。時々見る悲しい夢とワンセットだ。わたし佐々木敦子は、知っている。継母と義姉にいじめられる女の子の話。シンデレラと酷似した話だ。魔法使いとガラスの靴は出てこないが。ピンチヒッターはカタリナだが破滅フラグを回避したのに、ここへきてマリアをいじめる役。なんとも皮肉だが中身は内野さんだ。せりふとか覚えられるのだろうか…：

王子様役はもちろんジオルド様、主人公役はマリアさんだ。この二人は本当に絵になる。カタリナ様も時々マリアはすてきだ、ジオルド様とくつつけばいいのにとつぶやいていたのを聞いたことがある。メリ様も同意見だ。魔法学園でメリ様をはじめ貴族で比較的好意を持つている人がいろいろ教えているおかげでマリアさんは普通に貴族令嬢といつていよいほど振る舞いが板につくようになつた。それに美人で優秀で光の魔力保持者である上に人柄も申し分ない。ジオルド様はさほど身分差を気になさる方ではないから王子のお相手にふさわしいと思うのだが。

それはさておき配役はいじわるな義母がメリ様、そして義姉役が代役でカタリナ様だ。義母であるメリ様が、いじわるな義姉を呼ぶ場面になつた。カタリナ様がいそいそと現れるが、一瞬様子がおかしい。何かを忘れてしまつた？という顔をして手をドレスの腰ポケットにつつこんでいて、きよろきよろしひじめた。

メリ様とマリアさんもなにやら異変があつたことに気付いたようだ。  
その瞬間カタリナ様の態度が変わつた。何か決意したような顔だ。

それからの演技は凄かつた。

「本当に身の程知らずですこと。あなたなんかがこの家にいさせてもらえるだけありがたくおもいなさい。」

「そこで床にはいつくばつていなさい。」

メアリ様とマリアさんは、せりふが違うことに気が付いてほんの一瞬顔を見合わせる。

しかしあしたち4人は親友同士。二人は、何が起こったか瞬時に悟つたのだろう。言葉にするなら

(カタリナ様……これは全部せりふがぬけちゃつたつてやつですわね。)  
(メアリ様、私もそう思います)

といったところだろうか。

二人のフォローもみごとだつた。

「ほくんとそのとおりね。虫のくせに金色してるとか。その髪をそつてしまつたほうがいいのでは?」

「そのとおりですわ。お母様」

「な、なんてひどい。」

カタリナ様は舞台でにもどりほつとしているようだが見事な演技に拍手がパラパラ起つていた。

その後の演技はせりふも完璧だつた。後で聞くとどうやら手にせりふを書いてのりきつたらしい。

「カタリナ様お疲れ様です。」

「見事な演技でしたわ。」

「メアリ様もそう思いますか？わたしもです。」

マリアさんが同意を示す。

「？え、そうなの？」

「わたしもそう思います。見事な演技でした。」

「主人公をいじめる演技に鬼気迫るものがありました。」

「まるで別人でしたわ。」

「カタリナ様には演技の才能もおありなのですね。」

しばらくしてカタリナ様は楽屋にこもっていた。

舞踏会がはじまるとマリアさんが呼びにいつたようだ。

「まだ片づけをしている子がいるのであとでいつしょにいらしてください。」

と伝えたが、わたしはその時近くで待たなかつたことを後悔する。

これを最後にカタリナ様は誘拐されて行方不明になつてしまふのだ。

しかし、そんなことを思いもよらないわたしたちは舞踏会会場でカタリナ様の演技がすばらしかつたので感想を言い合つていた。

キース様が

「義姉さんの演技にはおどろかされたよ。」

「本当ですわ。いつものお優しくて朗らかな雰囲気とは別人のようで。」

「あいつにあんな演技の才能があつたとはな……」

「カタリナ様は、多才な方ですわ。」

「それについても……すこし遅すぎる気もするのですが……。」

ジオルド様が異常を感じたようだ。

「そういえば、遅すぎますね。義姉さんどうしたんだろう……。」

「後片付けをしている方もいますから一緒に行きますと言っていたのですけれど……。」

カタリナ様は行方不明のままみつからない。

数日後、ジオルド様のところに脅迫状が届いた。

「カタリナ・クラエスの身柄は預かった。無事に返してほしくば王位継承権を放棄せよ。」と書かれていた。

翌日の生徒会室は重苦しい雰囲気でのカタリナ様救出作戦会議が行われることになつた。

「カタリナが無事に戻つてくるなら王位継承権などいくらでも放棄するのですが……。」

「ただ、ジオルドが王位継承権を放棄したからと言つて人質になつたカタリナが無事に戻つて来るとは限らない。顔を見られたからと口封じに殺されてもおかしくない。」

「そ、そんな……勝手にさらつておいて顔を見られたから殺すなんて……。」

わたしは思わず叫んでしまう。

「しかし脅迫状でかなり首謀者が絞られましたわね。」

メアリ様がつぶやく。

「王族若しくはその支持者つてことだろう。」

「そういうことだとアラン様も候補になりかねませんが……。」

「冗談いうな。俺はそんな方法で王位を狙おうなんて考えないぞ。そもそも俺自身がが王を継ぐにふさわしいのかどうか考えないといけないのに……。」

「あ、あの……」

マリアさんがいささか遠慮がちながらやむにやまれぬという感じで議論にはいつてくる。

あからさまに（カタリナ様がとても心配です）と顔に書いてある。

「事件には闇の魔力がかかわっているのですよね？もし、闇の魔力がつかわれているならわたしが怪しげな人を探つていつたらわかるかもしません。」

「大変残念で悔しい話なのですが、事が起こつてから半日経っています。数時間以内ならともかく、さすがにこれだけ時間が経つていたらわからなくなつてしまつているのは？」

「そうですね……。」

マリアさんは顔を曇らせた。

## 第12話 力タリナ誘拐

「そうなるとジェフリー王子かイアン王子ということになるが……どうも本人たちとは考えにくいな。」お兄様のおっしゃるようにジェフリー様は本気で王になるつもりがあるとは思えないという評判で、相当な弟大好きと聞いている。宰相家だからこそ情報だ。そういう状況でイアン様本人ががつがつ王位を狙う工作をするとは考えにくい。

「とりまきとか支持者でしようか……。」

「どちらかに王位を継いでもらつて権勢を得たいと思う人物ということだろうな。」

「そうなると……怪しい人物や施設を片つ端から洗うしかないってことですわね。」

メアリ様の笑みがどんどん黒くなっているとかんじるのはわたしだけだろうか……

「メアリ、落ち着け」

アラン様が制止しようとするが、メアリ様は立ち上がり出でていこうとする。するとその前の扉が開いた。

入ってきたのはラファエル様だ。

「？メアリ様、どこへいらっしゃるのですか？」

「カタリナ様をさがしにいくつもりですわ」

「あてはあるんですか?」

「怪しげな人や場所を片端から洗うつもりです。」

ラファエル様はため息をつかれ

「それはさすがに無謀でしょう」

「でも、こうしている間にカタリナ様に危険が迫っているのですよ。どうしろとおつしやるのですか?」

貴族令嬢の鏡、社交界の華ともうたわれるメアリ様が感情的になられ目に涙を浮かべている。強気みせていて実は不安だったのだろう。

「大丈夫ですよ。カタリナ様に危害が及ぶことはありません。」

「どういうことですか?」

「カタリナ様には最強の護衛がついています。ここには盗聴用の魔法道具が仕掛けられていないから話しますが、魔法省では直接の犯人を現時点では把握していませんが、すでに犯人の足元を捕まえ始めているということです。だから危害が及ぶことはありませんのでもう少しお待ちください。カタリナ様は必ず助け出します。」

わたし佐々木敦子は思い出す。ジオルドルート達成後の外伝ストーリーでよく似た話がある。マリアが誘拐され、闇の魔力で操られるのはイアン王子の婚約者セリーナ・バーグだが、セリーナに闇魔法をかけた執事風の好青年である闇の魔力保持者を裏から

操っているのは貴族だ。誰なのか正確に思い出せない。しかし選択肢を選んでいくと大切な光の魔力保持者を守るために魔法省が動いて解決していく話になっていた気がする。まもなく魔法省のガサ入れがその貴族のところに入るはずだ。

カタリナ様の誘拐事件は、魔法省の捜査が進み、デイビッド・メイスンというジエフリー派の貴族に対して行われた。魔法省は魔法に絡んだ犯罪が行われた場合は、通常の警察の捜査では魔法が使われるために捜査が混乱させられたり、相手は貴族であることが多い、誇り高い彼らは捜査員、警察官に逮捕される屈辱に耐えられず、魔法を使つて抵抗し、殺害する危険性があるという事情から警察権を付与されている。したがつて容疑者を逮捕する場合は、サイレンスを唱えて抵抗を抑えるため、複数の捜査員が逮捕に携わる。

今回の誘拐事件は、デイビッド・メイスン主犯がほぼ確定だということで、魔法省のラーナ・スマス様がやつてきた。

「これで安全が確保されたからカタリナのところへ行くぞ。皆準備はできたか?」

そしてデイビッド・メイスンがカタリナ様を幽閉していた部屋の前まできた。ドアが開かれると、執事のような姿をした青年とカタリナ様がいた。

カタリナ様は不思議そうな顔をしてラーナ様を

「もしかしてラナ?」  
と尋ねていた。

「確かに先ほどまでそう名乗っていたが、魔法省魔法道具研究室部署長のラーナ・スマスだ。ラファエルの上司にあたる。以後よろしく頼む。」

「さてルーファス・ブロードとやら、こうなつた以上は覺悟出来ているんだろうな。ただお前にはやむない事情があつたこともわかつていて。ただし、けじめはつけなければならぬ。」

ラーナ様の部下たちはサイレンスの呪文を唱え始めた。

「わかりました。あなた方にすべてを話しましょう。」

執事風の青年がそう答えると、ラーナ様は、サイレンスを詠唱し始めた部下たちを制止する。

「魔法を使つて抵抗しないのだな。いい心がけだ。手間が省ける。さて、カタリナ・クラース誘拐の実行犯として逮捕する。これから魔法省へ来てもらおう。」  
ラーナ様は部下たちに命じる。

「連れていけ。」

ルーファス・ブロードという執事風の青年は魔法省に連行されていった。  
さて、誘拐事件が解決してから、わたしやマリアさん、メアリ様、キース様、アラン

様は、カタリナ様が危ないことをしたり、ヘンな場所にいかないよう見張つていくことにした。カタリナ様が生徒会の仕事は大丈夫なのかお聞きになるが皆「もうかたづけましたから。」「もうかたづけましたわ。」「カタリナ様、ご心配いりません。」という感じでお返事している。実際もうこの時期になると1年生に引き継がなければいけないし、何から何までやらない方がいいというのもある。例外的に誘拐事件以来姿を見せていないかつたのはジオルド様だ。

ある日の夕方、カタリナ様がいなくなつた。きっと畠だらうということになつた。するとジオルド様がカタリナ様の肩をだいて顔を近づけている。

最初に声をかけたのはキース様だ。

「これ以上義姉さんに近づかないでいただけますか？」

「どいてください。キース様、私が魔法で……」

「ち、ちよつとまで、メアリ何するつもりだ！」

「メアリ様、ここはわたしが……」

わたしが叫んだところ、マリアさんが

「ソ、ソフィア様まで……そんなものを投げつけたら危険です。せめてけがが私の魔法で治せる程度になるようにしてください。」

マリアさん、投げることと、けがさせること自体は阻止しないんだ……

カタリナ様を皆でジオルド様からひきはがしたとき、わたしの脳裏に

「ジオルド王子攻略おめでとう。」

という声が響いてきた気がした。同じ声がカタリナ様にも聞こえているような不思議な感覚だつた。

わたし佐々木敦子は内野さんを祝福する。やつとジオルドを攻略したね。おめでとうと私自身であるソフィアとカタリナの脳裏にささやいた。

さて魔法学園の授業も残り少なくなってきたある早朝、学舎へ向かう王族・貴族寮の廊下で、メアリ様とジオルド様が含みのある笑みを浮かべながら話しているところへ出くわした。

# 第13話 キース・クラエス誘拐事件

ジオルド様とメアリ様の周囲には腹黒い空気がただよっている、カタリナ様とキース様、アラン様は所在なきげに歩いている。

わたしは、そんなことにかまつていられないでので5人に声をかける。

「おはようございます。皆様そろそろ学舎へ行きましょう。遅刻していませんわ。」

「ソフィア、ずいぶんゆつくりね。」

「実は、昨日読んでいたロマンス小説がおもしろくて、気が付いたら夜明けになつてしまつて恋のかけひきをする話ですわ。」

「おもしろそうね。今度貸してもらえたう。」

「え、どんな作品なの?」

「長い黒髪が美しいサツフォー・フォン・ミステイと金髪ツインテールが美しいエリカ・フォン・スペンサーという二人の貴族令嬢が同じ平民の男性セイジ・タキを好きになつてしまつて恋のかけひきをする話ですわ。」

「おもしろそうね。今度貸してもらえたう。」

「はい。喜んで。」

「あ、マリア、おはよう!」

「おはようございます。皆さん。」

授業が終わるとマリアさんがカタリナ様に話しかけている。

「昨日、魔法省に行きましたら、ラーナ様が今度はカタリナ様にもきてもらいたいとおつしやつっていました。」

どうやら進路の話のようだ、わたしとしてもカタリナ様の魔法省入りには賛成だ。にしろこのまま放つておくと、婚約を断る理由がないので、ジオルド様と結婚してしまう可能性がある。クラエス夫人とキース様は王族は務まらないと反対しているが決定的になりえない。それよりも王に次ぐ権力を握っている魔法省にはいればおいそれと結婚するのは難しくなる。そのためカタリナ様の心は動いてはいるものの、魔法省はエリート集団だ。学力も魔力もこころもとないからコネで入るのは……とだいぶ悩んでいるようだつた。

そんなことがあつてから数日後、今度はキース様が行方不明になつた。置手紙があつたというがなんかきな臭い気がした。最初にカタリナ様に同行すると言い始めたのはジオルド様だ。それからなぜか魔法省のラーナ様が「新人教育を兼ねて同行させてくれ」と名乗り出て、魔法省預かりの身分となつている闇の魔力保持者のソラさんとマリアさんも行くことになつた。ラーナ様はなにやらかぎつけているようだ。魔力を持つた人間を探すことができる魔法道具である「アレクサンダー」とかいうクマのぬいぐる

みも持つていくという話だつた。

キース様をさがすということで、カタリナ様とジオルド様は公休が許可され、魔法学園の入り口で魔法省からラーナ様とソラさんがやつてくるのを待つていた。

わたしとお兄様、アラン様、メアリ様は見送りだ。

「わたしだつてカタリナ様と一緒に行きたかったのに…。」

とメアリ様はさびしそうに言う。

「わたしも行きたいです。カタリナ様」

さびしいときやつらいときにほおの筋肉がつっぱり、目頭があつくなる。

「この忙しい時期に生徒会メンバーが一気にぬけるわけにいかないだろう。」

とお兄様がわたしを諭す。

「そうですよ。この卒業式前の忙しい時期に生徒会長が抜けるなんて信じられません。」

とメアリ様が眉をつりあげて厳しい視線でジオルド様に言うか、ジオルド様は「もう僕にできることは片付けてありますし、なにかあつたらニコルに協力してもらえるよう手配済みです。」と平然と言つてのける。

すると「す、すみません。わたしこそ副会長なのに大変な時に抜けてしまつて…。」

とマリアさんが恐縮して謝り始めたので

「マリアさんはいいんですよ。今後のお仕事にかかることだから。」

とメアリ様は必死にフォローし始める。

「カタリナは、僕がしつかり守りますから」

とジオルド様はカタリナ様にほほえみかけるがカタリナ様は、  
「は……はあ……。」

と何のことやらという感じだ。

(あーこれはキース様のことで頭がいっぱいなんだな)

ジオルド様ががっかりする一方、メアリ様はご機嫌だ。

不思議そうに聞くカタリナ様にメアリ様は

「たいしたことはないのですわ。カタリナ様はお気になさらないでください。」

「ふーん、そうなんだ。」

「カタリナ様、お久しぶりです。」

青みがかつた髪の好青年だ。誘拐事件以来である。

「ええ、ソラ、お久しぶりです。」

「待たせてすまない。そろそろ出発するぞ。」

そうしてラーナ様にひきつれられて、旅というかキース様捜索に出発された。

その後、わたしは、カタリナ様が心配でならなかつた。大好きなはずの本の世界に入り込めない。気が付くとため息をついている。

カタリナ様とは十歳でお茶会で出会つて以来の大のロマンス小説仲間。感想を分かちなえない日々は辛すぎる。わたしはジオルド様やマリアさんのように強く役立つほどの魔力はない。理性ではわかつていても気持ちが納得していない。マリアさんならともかくジオルド様はなにかと「危険」すぎる。ジオルド様は決して悪人ではないが腹黒いところがある。学園を卒業したらすぐに結婚しようとするだろう。そうなつたらカタリナ様を独占されてしまう。そんなのは嫌だ、受け入れられない。メアリ様やアラン様と組んでカタリナ様がジオルド様の気持ちに気が付かないように邪魔してきたが、先日の行方不明の際の出来事からついに気が付いてしまつた。それゆえジオルド様の猛アプローチが始まつたやさきにキース様の行方不明が重なつた。もしこの旅がきつかけでカタリナ様とジオルド様が親密になつたりして結婚まで進んだらもう今までのようになくなつてしまふ。

そんなの受け入れられない。わたしの望みはカタリナ様がお兄様と結婚し、わたしは、その義妹になることだ。そのためにはお兄様に頑張つてほしいのだが……、お兄様は魔性というべき笑みを持つ方で、ハンサムで成績優秀、しかも気遣いもできる方で魔法の力もトップクラスの方だし、お兄様の魅力であれば落とせない女性はいないはずなのだが、お兄様は常識人すぎていくらカタリナ様と結ばれるように促しても首を縊に振らない。お兄様は「ちゃんとした婚約者がいる。」というが正直カタリナ様はジオルド様の

女性除けの婚約と考えていて、しかも裏表のない優しく朗らかな性格から皆に好かれているのに本人には全くその自覚がない。

ロマンス小説は、ほぼ恋物語といつてもよいくらいで、カタリナ様は「小説の中の○○王子はすてきだつた、△×騎士はすてきだつた。」という感想をいいつつ「わたしには縁がない」という。なぜですかと聞けば「だつて私はしよせん悪役令嬢だから」と意味不明なことをおっしゃる。捜索中はキース様のことで頭いっぽいであることが考えられるけど、ほんの小さなきつかけでジオルド様の気持ちに気が付いたことを思い出すかもしれない。そうなつたらと思うと、私ソフィアは、じつとしていることができず部屋の中をうろうろしてしまう。

## 第14話 卒業式

メアリ様のいうとおり、ジオルド様はいざとなれば手が早いだろう。わたしはこれまで読んできた小説のせいでいろいろな妄想がうかんでしまう。王女と護衛騎士の禁断のラブロマンスがある。王女のそばになにくれとさりげなく護衛する騎士、街中で王女と知らずからむ醉っ払いや盜賊などさまざまな輩から王女を守る騎士。旅が終わると一緒にいられない二人。王女は旅が終わりに近づいたある晩に騎士のもとへいく。

わたしはおもわず「ダメ！」と叫んでしまう。すると「なにがダメなんだ。寮の中で大声をだすな。」とお兄様にそのたびにたしなめられててしまう。

「生徒会から頼まれた仕事をもつてきただ。お前は、いくら呼んでも返事はないし、気が付かない。いいかげんその空想に入る癖を治せ。」

「ごめんなさい。」

わたしはシュンとなつてうなだれる。たしかに空想に入つて周りが見えなくなつたり、その結果なにも聞こえなくなることがある。

「それでお前はなぜ部屋の中をぐるぐる回つているんだ？」  
とたずねられる。

「カタリナ様がおられないのととても寂しいです。ジオルド様ともつと親しくなるところから帰つたら結婚してしまうと思うととても不安です。」

お兄様は、「カタリナがいなくて寂しいのは分かるが、ジオルドとカタリナは婚約者なのだから仲が良くなるのはいいことだろう。」と正論をいつてくるが、顔に浮かぶ表情はつらそうだ。生まれてこの方妹をやつてているわたしは「まかせない。

「本当はお兄様も心配なくせに。意地を張つて。もつと素直になればいいのに。」と言いい返す。

「何を言つてるんだか。」と反論するが、その顔はやはりつらそうだ。

そのとき来訪者がいらつしやる。

「こんにちは。」と挨拶するのはメアリ様。

「カタリナ様からの手紙ですわ。」

「どれどれ

「旅が楽しい?」

「ジオルド様との仲が進展したこととうかがわせるようなことは書いていないようですね。」

わたしはほつと息をはいてお兄様をみつめる。

お兄様はなにか安心しているように見えた。お兄様素直じゃないなあと感じた。

そしてキース様が無事に保護され、お屋敷で目を覚まされたという報告を受けたので、クラエス邸へ行くことにした。

クラエス邸には先客がいた。ジオルド様だ。メアリ様やキース様と口論になつている。

「キース、何勝手に告白しているんですか。カタリナは僕のモノですよ。」

「ジオルド様、なにをおっしゃつてるんですか？ カタリナ様はあなたのものではあります。」

わたしも思わず叫ぶ。

「そのとおりです。カタリナ様はだれのものでもありません。カタリナ様お見舞いにおすすめの小説を持つてきましたわ。」

「ソフィア、具合が悪いのは、カタリナではなくキースだぞ。お見舞いの品の選び方がおかしくないか？」

「わたしは喜んでいただけるようにお菓子をもつてきました。」

ジオルド様はカタリナ様の枕元に近づいて耳元で何やらささやいている。  
カタリナ様はほおを赤く染められている。

キース様はカタリナ様をひきよせる。

「ダメです。ジオルド様に義姉をお渡しするわけにはいきません。」

「へえ、言うようになりましたね。キース」

「わたしは自分に正直になろうと思つただけです。」

そのときあの不思議な少女の声とうれしそうな表情が脳裏に浮かんだ気がした。  
それはどうやらカタリナ様へ向けて語られた言葉と思われた。

(キース・クラエスの攻略おめでとう。)

わたし佐々木敦子は、カタリナとソフィアの脳裏に語りかける。

(ついにキース・クラエスも攻略したね。おめでとう。)

と。

さて魔法学園のわたしたちの卒業式だ。ジオルド様が卒業生代表、生徒会長としてあ  
いさつをしている。7割近くの女生徒たちは、頬を染めて見つめている。

卒業式はわりとあつさりだつたが、例によつて卒業パーティの盛り上がりはすごい。  
ジオルド様なんかどこにいるかわからない感じだが圧倒的な女子生徒のひとだかりが  
目印になつてゐる。アラン様の場合、2割ほど男性が混じるがその周囲から漏れてくる  
話の内容はその演奏をたたえる声が多く聞こえてくるのが大きな違いだ。メアリ様、マ  
リアさんの周りのにも多くの生徒たちが取り囲んで卒業を名残惜しむ会話が聞こえて  
くる。わたしとメアリ様は、男女半々くらいだがマリアさんのまわりは、男性3：女性  
1という感じだ。わたしをはじめ前生徒会メンバーは人気で、その周囲には多くの後輩

やクラスメートがあつまつてきていて会話を楽しんでいた。

「読書家でいらっしゃるので尊敬していました。」「知識と教養が深くいらっしゃるので尊敬していました。」「なんでの難しい詩をご存じなのですか？」

「ダンジョンの魔石探索試験での詩をお読みになられるなんてすごいです。」「○○のロマンス小説面白いですよね。わたしも読んでいます。」

後輩の男の子や女の子に尊敬のまなざしで見つめられて恥ずかしい感じだ。とにかくしさ倍増だ。

そんなときにどうやらカタリナ様と次期会長のフレイ嬢と副会長のジンジャー嬢が話している。ジンジャーにフレイのドレスが本人のプロポーションが良すぎて着れないとかいう会話の後、

「わたしのドレスをかしてあげるわよ。」

というカタリナ様の声が耳に飛び込んできた。

「え、カタリナ様の??」

「ジンジャーなら私のサイズで問題なく入りそうだし……」

「パーティが終わったらドレスを合わせましよう。」

どこから聞きつけたのかメアリ様が

「カタリナ様、今ドレスを貸すという話が聞こえたのですが……」

3人のもとへ息を切らしながら走つていく。

「わたしにも、わたしにもドレスを貸してくださいませ。」

うわあ……これは……わたしもお借りしたい、という気持ちが頭をもたげる。  
気が付いたら私も息をきらして

「メアリ様ばかりするいですわ。わたしもお借りしたいです。」

思わず叫んでしまつていた。するとほかの女生徒たちも

わたしもわたしもと言い出しパニック状態になつてもみくちやの状態になつた。

それを見たのかキース様、ジオルド様、アラン様、ニコル様がいらつしやる。後輩の  
フレイ嬢もいる。

「どうか皆さん落ち着いてください。」

「メアリ、落ち着け。」

「ソフィア、落ち着いてくれ。」

「どうか皆さん冷静になつてください。」

「皆さん、わたしはパーティに来ていくドレスがないんです。すみません。」

「ジンジャーは努力して生徒会副会長になつたんです。マリア先輩と同じです。」

フレイもなだめる側に加わる。

「それにわたしのが合わないので…  
恥ずかしそうにうつむいた。  
」

## 第15話

## 卒業パーティ

「パーティは今晚ですし、今からカンパしても間に合いません。もしカンパしてくださいっても皆さんもご実家に『そんなお金なににつかうの?』ってきかれたら説明が難しいと思います。ジンジャーさんのご実家の面目や事情もありますので、僕の婚約者のカタリナが後輩がパーティに出られるよう何とかしようと考えた結論なのです、どうかここは僕に免じてどうか目をつぶってください。」

ジオルド様が頭をさげる。

「わたしとすることが……とりみだしてすみません。」

メリ様がそうそつしやつてわたしも冷静になつて謝罪した。

なんとか騒ぎはおちついた。わたしとしたことが恥ずかしい。

しかし今晚は待ちに待つたお城でカタリナ様、メリ様、マリアさんとのパジャマでのお泊り会だ。はやる気持ちが抑えきれない。

さてお城でジオルド様とアラン様の卒業記念パーティだ。

カタリナ様、メリ様が一番似合うと言つてくれたかわいいドレスを着ていく。メリ様がカタリナ様のところへ来て何やら話し込んでいる。

「お兄様、行きましょう。」

お兄様を引っ張るようにして一人の輪に加わる。

「わたしもお気に入りのロマンス小説を持参してきましたわ。」

「ソフィア！」

「ごきげんようです。カタリナ様、メアリ様」

わたしはお二人に淑女の礼をする。

「わたし、今日のお泊り会がもう何日も前から楽しみで……。」

「お城の客室に留めていただくんだからあまりはしゃぎすぎるな、ソフィア」

お兄様にやんわりとたしなめられる。

「そういえばニコル様も泊まるんですね」

「ああ、ソフィアだけを外泊させるのはいろいろ心配だからな。」

「妹思いですわね。そういえばうちのキースも泊まることになりました。」

「そういうことは皆でお泊りつてことですね。お城に昨年度の生徒会メンバー勢ぞろいですね。」

わたしは、ほおがゆるんでしまう。

カタリナ様は男子会をすればといいだし、キース様がなにを言つてると嫌そうな顔をしている。

お兄様は

「男同士で語り明かすか……」

お兄様は何やら楽しそうだ。

わたしは、王子と敵国の王子の物語とかロマンス小説の題名が脳裏を駆け巡る。どんなお話をするんだろう……

「男性だけで朝まで語り明かす……新しいロマンス小説のようなことが実際に起ころるのですね。」とわたしは妄想してほおが染まってしまう。

そこへジンジャーとフレイがマリアさんを連れてやってくる。  
マリアさんはなにやら疲れた様子だ。

「男性たちに囲まれて困っていたマリア先輩を保護してお連れしました。」

「エスコート役がいないので男性たちがわれこそはとマリア先輩に迫つて、優しいマリア先輩は断り切れない様子でしたので……」

お兄様が思案顔になりマリアさんに謝る。

「なるほど……そういう事態は予測できたな。こちらでエスコート役を見繕つておくべきだつた。すまないマリア」

マリアさんは首を横に振る。

「エスコートの要らない会ということで軽く考えたわたしがいけなかつたんです。誰か

にお願いすべきだつたんですが……。よく知らない方に声をかけられたのでかたつぱしからお断りすることになつてしましました。」

「ジンジャーさんがお召しになつてているドレスはカタリナ様のものだつたんですね。わたしも着たかつたんです。」

マリアさんがそうおっしゃると

「わたしもです。」

メアリ様もおっしゃる。

マリアさんがドレスのプレゼントをもらい、そのサイズがぴったりだつたと聞いてカタリナ様の表情が変わる。なにやら番犬のように周囲ににらみを利かせ始めた。

公爵令嬢でいらっしゃるのになぜか平民のマリアさんの番犬のようだ。

「義姉さん、義姉さんてば……こつちの話聞いていないし……」

キース様がぼやく。

そうしているうちにカタリナ様は後ろのテーブルにぶつかつて、

あつという間にソースチューリンのソースがべつとりカタリナ様のドレスについてしまつた。キース様は大きなため息をつかれた。

「汚れ取りの方にふきとつていただいたほうがいいのでは？」

「そうするわ。ソフィア、ありがとう。キース、マリアの護衛をたのむわよ。ちやらいの

が近づいてきたら追い払つて。」

「義姉さん、それはいいけど、寄り道したりしないで、汚れとつたらすぐもどつてきて。」「わかつたつてば。」

カタリナ様は会場の外へ出られた。

かなり時間がたつてダンスの時間になつた。カタリナ様はジオルド様とそのつぎはキース様と踊つている。

そのつぎにはお兄様が「空いているなら俺と踊つてくれないか」と誘つた。  
お兄様、がんばれと思つてしまふ。

カタリナはいつもの通りよく食べている。サラダに肉。王子たちの卒業パーティだから出る料理も豪華だ。目移りしているんだろう。アランがカタリナの食べっぷりに爆笑している。今度はアランに肉を食べさせ、アランがもがもがいっている。

ゲームやアンソロにもなかつた場面で新鮮だ。そもそもカタリナは悪役だからこんな場面ないのだから……。

アラン様にカタリナ様がお肉を食べさせている。それを見咎めたのかメアリ様が

「力、カタリナ様、わたしにもそれをしてください。」

なぜか息をきらしているご様子だ。カタリナ様は料理をとつてこようとする。

「そうではなくて、アラン様にしたようにわたしにも、その……フォークで食べさせて

下さるのを……」

メアリ様を口マンス小説仲間にしたことはよかつたと思つてゐるが、唯一後悔しているのはこういう場面だ。わたしも食べさせていただきたい。

「するいですわ。メアリ様、わたしにも。」

「あれ? ソフィア、ニコル様はいつしょじやないの?」

「お兄様はさきほどお父様くらいのお年の紳士にお声をかけられ、テラスのほうへいきましたわ。」

カタリナ様はなにやら心配されている。わからなくはないがお兄様はもてすぎるのでかわす術もかなりお持ちだ。

「商談か何かだと思います。お兄様はいろいろと慣れていらつしやいますからだいじようぶですわ。」

メアリ様がアラン様と話している。使用人が待つていていたことだつた。

「メアリやソフィアはあいさつやダンスはいいの?」

「もう必要な相手とは終わりました。」

「わたしもです。」

「じゃあ二人もいつしょに食事しない? ちょっとづつシェアして。」

「よろしいですか?」

そこへ疲れたご様子のマリアさんがやつてくる。

「？マリアさん？」

「カタリナ様、メアリ様、ソフィア様」

「お疲れの様子ですわね。」

「はい、疲れました。」

「こつちで食べない？」

「はい。」

マリアさんは、解放感で笑顔になる。

わたしたちは楽しく食べ物をわけあつて食べて いたが、その間にもマリアさんへ向けられる視線があつて、カタリナ様はそれをみとがめて番犬状態になる。  
しばらくしてお兄様が戻ってきた。

# 第16話 パジヤマパーティー

お兄様はなにやらお疲れのご様子だ。

「だいじょうぶですか？お兄様」

「ああ…。」

力のない返事だ。わたしはほんの少し罪悪感を感じた。

さて今晚は、メアリ様のお部屋でパジヤマパーティーだ。

しかし、カタリナ様の姿が見えない。

廊下でぼうつとあるいていたところをメアリ様が声をかけられたようで全員そろうことことができた。

「どこか具合がお悪いのですか？」

「あ、いいえ、卒業式、パーティと続いたから少し疲れたみたい。」

「カタリナ様、お菓子ありますよ、召し上がりますか？」

マリアさんとわたしの声がはもる。

「お茶もジュースもありますよ。」

メアリ様が付け足す。

「ありがとう。」

「うん、おいしい！元気が出たわ。」

カタリナ様が元気になつてうれしい。

「確かに今日は予定びっしりでつかれましたわ。」  
わたしがそういうとみんな頷く。

マリアさんも

「そうですね。わたしはこのようなパーティは出たことがなかつたのでくたくたになりました。」

「あくそーか、マリアは学園以外のパーティは初めてだつたものね。」

「はい。皆様に教えてもらつたように気を付けてふるまつたつもりですたけど、たくさん失敗していたのかもと心配で…。」

そう顔を曇らせる。

「いえ、とても素晴らしい立ち居振る舞いでした。本当にパーティが初めてとは思えな  
いくらい完璧でしたわ。」

メアリ様がほめていた。

「そういつていただけると嬉しいです。思つたよりたくさんの方に声をかけていただいて、いっぱいいっぱいでしたので。」

「本当にすごい人数が声をかけてきましたね。」

マリアさんはうなづく。

「でも、どの方のお誘いもお受けにならなかつたのですよね。」

メアリ様がそういうと、カタリナ様が問い合わせ返す。

「え～そうなのマリア？」

「……はい、ちゃんと踊れる自信がなかつたので。」

マリアさんは恥ずかしそうに答える。

「え～私もダンスは苦手だけど相手がリードしてくれるからそれなりになるわよ。」

「カタリナ様のお相手はジオルド様やキース様で上手でいらっしゃるからですが、男性の方のリードにゆだねればそれなりに踊れますわよ。マリアさんも学園でのレッスンには参加なさつているはずですから。」

「はい、おっしゃることは確かなのですが……やはりよく知らない方に身をゆだねるのは……。」

「確かにそうですわね。わたしも面識のない方はお断りしますからわかりますわ。その気持ち。」

「でも、素敵なおなら一度くらい踊つてみてもよかつたのでは？そういう方はいらっしゃらなかつたのですか？」

わたしはマリアさんをみつめてしまう。ロマンス小説のような出会い、うつとりしてしまう。こんな素敵なマリアさんだ。だれかそれに釣り合うほどの方が声をかけてもおかしくない。

「素敵な方ですか……。」

マリアさんは考え込む。

カタリナ様が

「マリアはどういう人が好みなの?」

とお聞きになる。マリアさんは、

「好みの方ですか?」

と問い合わせてしばらく考えると

「いつも笑顔で太陽のよう明るい方がいいですね。それからわたしの作ったお菓子をおいしそうに食べてくださる方、でしようか。」

「そ、そうなの?」

「わたしも明るくて元気な方がいいですわ。髪は茶色で瞳は水色の方がいいです。」

メアリ様が便乗してそう答える。え……もしかしてカタリナ様?アラン様は??

「カタリナ様はどのような方がいいのですか?」

「わたしは……。うん、具体的に考えたことがなくて……。そうだ、ソフィアはどうな

の？」

「わたしですか？わたしはですね、失われた国の元王子様とか、ペガサスにのった金髪の騎士、たとえばこの小説のフェルディナンド様なんかすてきです。主人公の少女がローゼリッテって言つてわたしのように大の読書家なんですよ。それから……」  
わたしは夢中になつて話していた。

「最近、恋する振り子時計（オシスラトリ）の新刊がでましたわ。」

「どんなお話だつけ？」

「平民の少年ナオトー・タキを巡つてミステイ家の令嬢サツフオーレ・サガラ一家の令嬢マユが恋の駆け引きをする話です。マユの性格がよすぎるのでサツフオーレがマユのことも友人として好きになつてしまふんです。」

「へええ、おもしろそうね。」

このときわたしは小説の話をかなり力説していたようだ。

何冊かカタリナ様、メアリ様、ソフィア様、マリアさんにお貸しした。ロマンス小説を語る会が近いうちにできそうで楽しみだ。魔法学園に2年も通学するとその周囲の地理に詳しくなる。あそこのお菓子屋さんは、そうそう、あのお菓子がおいしい、あの雑貨屋さんは、イアリングが、ヘアピンが、ブレスレットが、ネットクレスが……という話になつてもりあがる。

しかしみんな話疲れてくる。

「そろそろ眠くなつたわね。」

「そうですわね。」

そしてメリ様の部屋で寝てしまつた。

わたしは、夢を見た。かなり後になつて知つたのだが、どうやらカタリナ様と同じ夢をみたようだ。

薄いピンク色の壁。黒いテーブル、金属製と思われるパイプを組み合わせたベッドがあつて水色のカバーがかかつてゐる。ベッドの上に青いクッション。

そこには、あの茶色い長髪の少女。

「あの子が最後にやつていたゲームの続きだからクリアしたら報告に行かなきやな」

知らない言葉で話しているのにわたしにはその意味がなぜかわかる。

目の前には長方形の板のようなものがあり、マス目が交互にあつて文字のような記号のようなものがマス目の上に書かれている。その道具は、円盤のようなものを横から入れると動き出す。

魔法の道具みたいだ。

ウイーンという音がしてヒューヒューと風のような音がする。その円盤を読み取つてゐるようだ。

長方形の板の表面には絵が表示される。そこにはなぜかよく知っている人物が映し出される。

これってジオルド様？キース様……メアリ様、それに私？マリアさんもいる。クラエスゴ夫妻やうちの両親……これはいつたい何だろう？

見たことのない文字、Fortune Lover IIと長方形の板に表示される。

え？これはラファエルさん、それにキースさん救出に協力してくれたソラさん、それから見たこともない壮年の男性と少年。

再びFortune Lover IIの文字と「魔法省の恋」という文字が映し出される。

わたしには、初めての文字で読めないはずなのに、それがまさしく魔法省での恋物語であることが瞬時に分かつた。長方形の板の上に↓のようなものが動いている。

# 第17話 Fortune Lover II

長方形の板には、茶色のソーセージのようなものが縦に複数表示される。

茶色の髪の少女は、橢円形のものを→で卵のようなものをさわってカチカチと動かしてそのたびに、長方形の板に表示される絵が切り替わっていく。

見知らぬ男性は、サイラス・ランチエスターというらしい。少年のほうは、デューイというらしい。どうやらマリアさんが恋をする物語を魔法で動く紙芝居であらわしているように思われた。その紙芝居は、ソーセージ状のもの（選択肢）の選び方によつて場面が変わるようだつた。

しかしあるとき黒いフードをかぶつた陰気そうな女があらわれる。名前と思われる部分には「??」と書かれている。

「あ～またこの悪役が出てきた。名前隠されていたけど、これ「ワン」に出てきたジオルドの婚約者カタリナだよね。」と少女がつぶやく。

「「ワン」で完全にやつつけたのにまた戻ってきて悪事を働くなんて本当に懲りない女だな。」

とぼやいていた。

「今度は国外追放よりももつと重い刑罰になるんだろうな。」

カタリナ様が刑罰？ なにを悪いことをしたんだろう。どうやらこの紙芝居では、カタリナ様が悪役でマリアさんの恋をじやまをするらしい。

カタリナ様がそんなことをするはずがない。

あんなにマリアさんのことの大切にしているのに、そしてあんなにお優しい方なのに……

「そう、今のカタリナはこんな女じやない。助けないと。」あの少女の声が聞こえて、その瞬間夢がとぎれ、わたしの意識もふつと消えた。

わたし佐々木敦子はソフィアの身体を借りて、Fortune Lover IIについて日本語で書き綴つていく。前世では自動書記と呼ばれる現象なのだろう。

わたしは親友内野さんの転生した姿であるカタリナを救うために彼女の佐々木敦子のフラクトライトとしてカタリナの夢の中で語りかけるだけでなくソフィアを使つてこのように自動書記を行う。

Fortune Lover IIについて書き綴つていく。

平民で主人公であるマリアが魔法学園を卒業後魔法省に就職する、生真面目な上司、くせのある同僚、一筋縄ではいかない魔法省の仕事の数々、新たな恋の物語がはじまる、登場人物、新たな攻略対象サイラス・ランチエスター、デューカ・パーシー、ソラ……

前回からの攻略キヤラには、それぞれのライバルキヤラがかわり、その子たちとうまく付き合うか、認めてもらつて恋が進展していく。今回の3人の攻略キヤラをクリアするには、謎の女のいやがらせをどう乗り越えるかがキーとなる。

謎の女の正体は、国外追放されたカタリナ・クラエスであることがのちに判明するが、今回のカタリナは、禁忌とされた闇の魔力を手に入れて国内、しかも魔法省に潜入して主人公マリアへの復讐を企てる。カタリナの嫌がらせを攻略対象の男性と協力して克服し、その正体をつきとめて役人に突き出して監獄に投獄させられればハッピーエンド、役人に突き出せない場合には、カタリナと相打ちになり、攻略対象は闇の魔力で廃人となってしまう、

そういうことを書き連ねた。そしてソフィアがカタリナに貸した本に挟み込んだ。  
そしてソフィアの身体をベッドに戻した。

後で聞いたことだがこのときカタリナがわたしのフラクトライトが語った夢のせいでもうなされて、ソフィアが貸した本をお城の廊下に忘れたということだが、じつはわたしがこのメモを入れるために廊下へ移動したせいもある。カタリナごめんなさい。

「退場でいいでしょ~~~~~」

カタリナ様が悪い夢でもみたようで絶叫している。

「カ、カタリナ様、大丈夫ですか？」

眠い目をこすりながらおそるおそるたずねる。

「だ、大丈夫よ、ちょっと怖い夢を見て……それより騒いで起こしてしまつてごめんね。」

「いいえ、もうすぐ起床する時間でしたから、ちょうどよかつたです。」

わたしはほほえんだ。

「きっと疲れて怖い夢でも見たんですよ。昨日はいろいろ忙しかつたですし……」

「カタリナ様、魔法省の入省日までは、まだ数日あります。いつたん入省したら忙しいですから今のうちに休まれてください。」

わたしたち4人は、ジオルド様とアラン様に会いに行き、「自宅に戻ります。お城に泊めていただきありがとうございました」とあいさつをする。

なぜかジオルド様は不機嫌な感じで、キース様はげつそりしていた。

さてカタリナ様とマリアさんの入省式の日になつた。わたしとメアリ様も、それぞれお父様にお願いして社会勉強ということで魔法省のパート勤務をすることになつたが、初日なのにカタリナ様が新人研修の省内案内で気絶されたという。心配になつてメアリ様とお見舞いへ行つた。どうやら生物研究室のサルが引き抜いた新種の植物の声を聞いておどろいて気絶されたらしい。

さて、カタリナの入省式がおわつて、サイラスとデューアと出会つたようだ。

わたし佐々木敦子のフラクトライトは、カタリナの脳裏に前世のわたしの思い出を語りかける。

「なかなかすすまないな。」

わたしがゲームを操作してたる場面だ。このときは好感度にあまりいい数値がでずに苦戦していた。

「うん、気分転換にスチルでも見るか。」

わたしは、スチルがストックされているファイルを開く

サイラス・ランチエスターと見つめあうシーン、デューカ・パーシーを抱きしめるシーン、ソラに壁ドンされているシーンなどをひらいていく。スチルには、メアリとソフィアが映りこんでいるが、気が付いたろうか。

「さてと。」

わたしは飲み物をとろうとする。

「Fortune Lover II」のパンフにライバル、友人キャラとしてメアリとソフィアが描かれている。

「こうしてみると、「ワン」ででたキャラもだいたい出しているんだよね。」

「もしかして、追放されたはずのカタリナも出てくるのかな？仲間はずれにしちゃ悪いと思つたのかな。」

「それにしてもカタリナは出すぎよね。どの攻略対象でもちよいちよい邪魔しに出てくるんだから。」

「実は制作スタッフが気に入つてたりして。」

「でもその割にはどのルートも最後が悲惨だしな」

カタリナ様が「詳しく教えて／＼／＼／＼／＼」

と絶叫して飛び起きた。

わたしソフィアは語りかける。

「力、カタリナ様、大丈夫ですか？」

「ここはどこなの？」

「魔法省の医務室です。カタリナ様は、サルが引き抜いた新種の植物の声をきいて氣絶させていたのです。」メアリ様が答えた。

# 第18話 力タリナ様の初出張

今この医務室には、お兄様とジオルド様、アラン様もいらっしゃっているが、わたしたちと同じような理由で研修として来ているらしい。

しばらくして勤務時間も閉院時間になつたので、カタリナ様はキース様につきそわれてご自宅へ帰られた。

魔法省での二日目、カタリナ様とマリアさん、ソラさんは、新人の部署配置の試験もかねて明日から主張で狸退治にいくとのことで、三日目に支所へ出張されていった。

数日後、カタリナ様とマリアさんがその出張から帰ってきた。

無事に狸退治を終えたということだが、ただ狸退治だけでは済まなかつたらしく洞窟にいかねばならなくなつてたいへんなことがあつたらしい。

「けがなどありませんでしたか？」

「もしものことがあつたらと思つて薬箱を持参しましたわ。」

わたしとメリ様が口々に申し上げる。

「大丈夫よ、かすり傷ひとつないわ。」

カタリナ様はスカートまでたくしあげようとする。

それを見て驚いたキース様とアラン様が怒つてたしなめる。  
カタリナ様はしゅんとして二人に謝る。

ジオルド様が

「まあ、けががなくて何よりです。しかし、はじめから泊りがけの任務とはたいへんでしたね。どんな任務だつたんですか？」

「狸退治からのドラゴン退治です。」

わたしは絶句したが皆さんも同じようだ。

お兄様が

「狸はともかく…… ドラゴンと言うのは強大なトカゲに翼が付いたような…… 例の伝説上の動物か？」

とたずねる。

「あゝはい、そうです。でかいトカゲと言うか大昔の恐竜に翼がはえたようなそれです。」

皆きよどんとした感じだ。

「? もしかしてあんまりいなものですか？」

カタリナ様は不思議そうな顔をして尋ねる。

「いないも何も…… ほんとうにそんなものいたのかよ……。」

「さつきも言つたが伝説上のもので実在するとは驚きだ。」

アラン様とお兄様はそう答える。わたしもドラゴンが実在するのは驚きだというのは同感だ。

「で、義姉さん、どうやつてそのドラゴンを倒したの？」

「あ、うん、それはね。ポチが大きくなつて、えい、やあ、がぶりつてドラゴンを倒したのよ。」

カタリナ様はここぞとばかり使い魔の犬のポチちゃんが巨大化してドラゴンを倒したと身振りを手振りでポチちゃんの活躍を熱弁する。

「えへと、カタリナ、ポチと言うのは君の影に棲みついている闇の使い魔のことだよね、それが大きくなつたつてどういうことですか？」

ジオルド様がやや固い表情で尋ねる。

「こういう虫眼鏡みたいな魔法道具を借りていつたの。そうしたらその道具が熱くなつてポチがドラゴンくらい巨大化したのよ。」

「……まあ、なんとなくわかりました。なんとなくですが……」

ジオルド様が何かあきらめたような表情で話される。

「じゃあ、そのドラゴンはポチが倒したんだから義姉さんは危険なことはなかつたんだよね？」

キース様が確認するように言うとカタリナ様は

「もちろんよ」と言うが同時にマリアさんが「とても危なかつたんです。」と話されその声が被る。

「カタリナ様は、わたしたちを守るために石を投げて、自分のほうに引き寄せて下さったのです。偶然ポチちゃんが大きくなつてドラゴンを倒したので助かりましたが、本当に危なかつたのです。わたしたちのせいでカタリナ様がと思うと…」

マリアさんはその時のことをおもいだしたのか泣き出しそうになつていて。マリアさんの気持ちはそのままわたしとメリ様にうつしていく。親友の命が危なかつたと思うとたまらない気持ちになる。

「マリアさん、その時の状況をくわしく話してください。」

「カタリナ様は石をドラゴンに投げつけてお逃げになつたのですがドラゴンが大股にあらいてすぐに追いついてしまつたようでした。そのときカタリナ様の影がうねつてポチちゃんが巨大なオオカミのようになつたのです。ドラゴンが前脚をあげるとポチちゃんががぶりと噛みつき、今度はドラゴンがポチちゃんにかみつこうとします。

ポチちゃんはそれをかわしますが、あの巨大なしつぽにたたきつけられてしまいます。ポチちゃんが倒れかかっているところをドラゴンが迫つてくるので、カタリナ様が石や枝をなげてドラゴンの気を引きます。そのすきに、ポチちゃんが立ち上がりつてドラ

ゴンの首筋にかみついてドラゴンを倒したのです。結果としては、それで無事に戻れて猩退治をして終ったのですが、とても危なかつたんです。」

わたしも皆さんも心配な気持ちで表情が険しくなっている。

「マリアたちが危なかつたからとつさにね。無事に帰れたんだからいいでしよう。」  
とおつしやる。

キース様が口火を切つた。

「義姉さん、あれだけ言ったのに……」

「カタリナ様、もつとご自分を大切になさつてください。」

「本の感動を分かち合うカタリナ様がいなくなつたらわたしはつらいです。」

「カタリナ、僕はあなたをうしないたくないのです。」

「演奏会にお前がいないと思うとつらいんだ。もつと気を付けてくれ。」

「カタリナ、無茶はしないでくれ。」

カタリナ様は、「はい……」と力ない返事をしてキース様と一緒に自宅へ帰られた。  
翌朝、わたしはお兄様の用があるので一緒に魔法省に出勤した。講堂でカタリナ様やマリアさんの職場発表があるはずだ。

わたしが荷物を運んでいるとカタリナ様をみかけたので声をかける。

「カタリナ様、おはようございます。」

「おはよう、ソフィア。今日もお手伝いする日なの？」

と聞かれた。

「はい。お兄様も用があるので来たのですが、こうして一日続けてカタリナ様にお会い  
できてうれしいです。」

「学園ではほとんど毎日会っていたのにね。働き始めてからなかなか会えなくなつてさ  
びしいわ。」

「わたしもです。ぜひ休みの日には遊びにいらしてください。またえりすぐりの小説を  
用意しておきますから。」

「ありがとうございます。」

カタリナ様はなにやらカバンを「そぞろ」としている。なにか私にすぐ話したいことが  
ありそうな感じだ。カタリナ様は、ようやくみつかつたと安堵の表情になると一枚の紙  
を取り出して、

「あ、あのね。ソフィアに聞きたいことがあるんだけど……。」

「何ですか？」

「ソフィアに借りた小説の中にこんな紙がはさまっていたんだけど……。なんだかわか  
る？」

その紙には見慣れない文字のようなものが書かれていた。

# 第19話 契約の書（前編）

「あの、これは文字なのですか？」  
「え？」

「異国の文字ですか？」

わたしは首をかしげてしまう。その様子を見てどうやらカタリナ様は、何かに気が付いたようだ。かなり後できがついたのだが卒業パーティの後マリア様の部屋に泊まつた時に不思議な夢を見て、その文字を見ていたのだがこのときのわたしはすっかり忘れていた。

カタリナ様はなにやら固まっている様子だ。わたしは心配になつて  
「あの？ カタリナ様？」  
と声をかける。

「あ、ちよつと混乱していく……ほんとうにソフィアはこのようなメモは見たことない  
んだ……。」

「はい、初めて見ました。」

ソフィアは全く覚えていないのはしかたない。全部わたし佐々木敦子がしたことだ

から。カタリナを内野さんを何とか助けたかった。カタリナの中の内野さんに刻まれているわたしのフラクトライトを増幅させわたしの生前の記憶を注ぎ込む。そしてソフィアを動かしてあのメモを書かせた。ソフィアに記憶が残らない状態で。

講堂からマリアさんとソラさんが

「カタリナ様、もう皆そろっていますよ。」

と呼びに来た。

「ソフィア、お休みの日にはぜひ遊びに行かせてね。」

「はい。お待ちしています。」

マリアさんとソラさんは一礼してカタリナ様をつれて講堂のほうへ行つた。

わたしソフィアは魔法省で主に医務室で手伝いをしている。

カタリナ様は魔法道具研究室に無事に配属が決まつたことをお聞きしていたが、ある日カタリナ様は、体調を崩して運びこまれてきた。

さてわたし佐々木敦子は、ソフィアがカタリナを看病するという絶好の機会にめぐり合わせた。Fortune Lover IIのカタリナは、闇の魔法を持ちマリアと攻略対象を攻撃するが内野さんの転生したカタリナはそうではない。わたしは内野さんの転生したカタリナの心に存在する私のフラクトライトに前世でのFortune Lover IIの知識を注ぎ込む。

カタリナが夢を見る。

わたしの部屋が彼女の夢に映し出される。パイプベットに水色のカバー、ベットの上の青いクツショーン、薄いピンク色の壁、黒いテーブル。ゲーム画面が映し出される。

IIの攻略対象、サイラス・ランチエスターが少々困った顔で映し出される。

画面の下にサイラスのセリフが表示される。

『マリア、君があえて危険な目にあう必要はない。どうか私に守らせててくれ。』

画面のなかのサイラスの表情は憂いを含み、いつそうイケメン顔が引き立つている。しばらくするとサイラスのセリフが消え、マリアのセリフが表示される。

『わたしだつてサイラス様を危険な目にあわせたくありません。だから私も戦います。守られるだけなのはいやなのです。』

サイラスはマリアに手を差し伸べる、

『そうか…わかっただけで一緒にいこう。』

画面が切り替わる。

画面に現れたのはローブを深くかぶった謎の女。悪役令嬢カタリナ・クラエスだ。

『くくく、ようやくあの忌々しい女に復讐できる。だつてわたしはこの力を手に入れたのだから。』

カタリナは不気味な笑い声をあげた。その手には黒い本。そして巨大で黒いオオカ

ミのような影。

カタリナ・クラエスは、マリアやサイラスと戦うのだ。  
わたしのフラクトライトへの增幅はそこで力尽きた。

同時にカタリナが目覚めたようだ。

がばつとカタリナ様が起きた音がする。

カーテンを開けるとカタリナ様が起き上がりつていた。

「あつ、カタリナ様、お目覚めになられたのですね。」

「ソフィア、ここはどこ？」

「ここは魔法省の医務室です。カタリナ様は、魔法省の敷地にある岩の近くで体調を崩して倒れてしまつたんです。だからここへ運びこまれてきました。」

「義姉さん大丈夫？」「カタリナ嬢大丈夫か？」「カタリナ様、大丈夫ですか？」

キース様、ラーナ様、マリアさんが心配そうな顔をのぞかせる。その後ろにはやはり心配そうな顔をしたサイラス様、ソラさん、デューエイくんがいる。

「あれ？みんなもう失われた魔法は手に入つたの？」

とカタリナ様がおっしゃるとマリアさんが

「はい。おかげさまで無事に失われた光の魔法を得ることができました。それで戻つてきいたらカタリナ様が岩の反対側で倒れておられたんです。あの、；本当に大丈夫ですか

？」

「あの、なんで私は倒れていたの？」

「キヤンベルさんが消えた後にクラエス様は岩を観察したいと部署長たちとしばらく岩の周りを回っていたんですが、声が途絶えたと同時に姿が消えて、あわてて周囲を探しているうちに再び岩の近くに現れたとおもつたらそのまま倒れてしまつたんです。」

「カタリナ様、お顔が真っ青です。大丈夫ですか？」

マリアさんの表情からは心から心配している様子がにじみ出ている。

「すこしだけ気分が悪くなつてしまつて……だけどもう大丈夫。あの。わたし本を持つていなかつた？」

「あ、はい。それでしたらこの本でしようか？ 倒れた時もかかえていたということです。」

わたしはその本をさしだした。

今度はラーナ様がカタリナ様に話しかける。

「カタリナ嬢、マリア嬢はあの白い空間で失われた光の魔法を手に入れた。それはマリアが昨日手に入れた光の魔法の契約の書に書かれている。ただし光の魔力を発動しないと見えないので。マリア嬢すこしやつてみてくれ。」

マリアさんは少し戸惑っている様子だったが、「はい。」と返事をして

カバンから本を取り出し、魔力を発動させた。すると本が光り輝いた。カタリナ様はマリアさんの本をのぞきこむ。

「わたしには、光の文字が浮き上がつて見えるのですが、ほかの方には見えないようなんです。」

「なるほど……ほんとうに魔法の本なのね。」

とカタリナ様がマリアさんの本をみつめる。今度はラーナ様が

「では、カタリナ嬢。あの闇の使い魔を出してくれないか？」

とおっしゃり、カタリナ様はとまどいながら

「どうしてですか？」

とぽかんとした印象で問い返す。

「マリア嬢の話を聞いていただろう。本に魔法の文字が現れるかどうかは魔力を発動しないとわからないのだ。だから君の持つている闇の契約の書も魔力を発動してみないと書かれているかどうかわからないということなのだ。」

「え？・あ？・なんでこの本が??」

「ああ、なぜ君が持つていてる本が闇の契約の書とわかつたのかということとか。まずその契約の書がマリアの契約書に似て古字で書かれた基礎魔法の本だったということ、マリア嬢があの巨石に埋め込まれた白い石に触つて消えたようにその裏側には黒い石が

あつたのだ。覚えているか?』とラーナ様はカタリナ様に尋ねられた。

## 第20話 契約の書（後編）

「いえ、それは気が付きました。」

「うむ。カタリナ嬢、君の姿も消えてしまつたのだ。おそらくその黒い石に触れてしまつたからだろう。その消えた後に闇の魔法を得たのではないか考えたのだが……。カタリナ嬢、その推測は正しいと思うか？」

ラーナ様が小首をかしげて回答をうながした。カタリナ様は腑に落ちないが何にやら納得したようなあきらめたような表情でお答えになる。

「黒い石には気が付きませんでしたが、おそらくその通りだと思います……。昨日あの岩の裏側に耳をあててみたらポチが出てきたんです。そしていつの間にかわたしは真っ黒な空間にいました。そこにはマリアと一緒の空間のように空中に球があつたのですが、光り輝く球ではなくどす黒い球が浮かんでいて一方的に話しかけられました。その黒い球はわたしが契約の書を持つているというんです。それが偶然倉庫から持つてきました本だつたのです。本は鞄からふわふわ浮きあがつて、本をめがけて黒い矢のように文字が降り注ぎました。わたしは、まがまがしい文字が容赦なく降り注ぐので頭がくらくらし吐き気をもよおし意識をうしなつたのです……でも、あまりにも現実味がないの

で夢だつたのではないかと思つていたところです。」

カタリナ様はそうお答えになり、

「やつぱりそう考えていたのか。だからこの本を倉庫に戻しておしまいにしようと考  
ているんじゃないのか？」

と改めてラーナ様がおたずねになると、カタリナ様は、いかにも図星ですと驚いてい  
る様子だつた。

「カタリナ、君は顔に出ているからわかりやすい。だが、ただの夢ならともかく、そうで  
ないなら今後の魔法省のためにその本を役立てたい。試してくれないか？」

「はい、わかりました。ポチ、出てきて」

ポチちゃんが現れ、「ワン」と吠えると、本に黒い霞がかかつた。カタリナ様は、驚き

と恐怖の入り混じつたような表情になる。

「その顔は文字が見えたようだな。」

「はい……」

「よし、それが分かつたのなら今日はここまでだ。」ラーナ様は、カタリナ様の本を閉じ  
た。

「マリア嬢とカタリナ嬢は、失われた魔法を直接受け取つた立場にあるからか身体に負  
担がかかっているようだな。カタリナの顔色もよくないが、マリア、君の顔色もいいと

「はいえないな。」

「契約の書が逃げることはないだろうから、その解析は休み明けからでいいだろう。二人とも今日は帰つたらしつかり休むようだ。」

カタリナ様はキース様とソラさんにつきそわれ、自宅へ戻る帰り支度をはじめる。魔法省の寮に戻るマリアさんは、デユイくんとサイラス様に付き添われていった。

ソラとキースに小言をいわれつつ、「失われた魔法が見つかたんだからいいじやない」と言つていてるカタリナを背後から刺すような冷たい視線があるのをわたし佐々木敦子は感じた。カタリナも腕に鳥肌がたつているようすがうかがわれ、おそらくその不気味な視線を感じていると思われた。

わたしはキース様にカタリナ様が倒れたことを伝え、お見舞をもつてくるならお屋敷で確認するから待つていてくれと言っていたのをお兄様に伝えていた。

クラエス邸の茂みに隠れて様子をみているとカタリナ様とキース様はいい雰囲気になつていて。

「キース様、義弟という特権を利用しすぎです。」とぼそりとつぶやくとお兄様が

「カタリナがどんな様子か確認してくるから待つていてくれていいと言つたキースに敬意を表して、もうすこし待つべきだ。」

「うつ、少し悔しいですがここはお兄様の言うどおりにいたします。」

「もう十分待つたでしよう。このままにしておくつもりはありません。僕は行きますよ。」

「ジオルド様、お一人で団体行動を乱さないでください。それにここについたのはわしが最初ですからわたしが一番に行きます。」

「到着に大した差はなかつたじやないですか。それに僕はカタリナの婚約者ですので。「婚約者」といつても形だけですわよね。わたしは、親友ですよ。この間はお城で一緒に部屋で眠つた仲ですわ。」

「そんなことはありません。僕はカタリナを愛していますから。それに、あのときは、せつかくの僕たちの時間を全力で邪魔していただいて。」

「あら。あの程度のことをお気になさるとは。度量の狭い男はきらわれますわ。」「ちよつとジオルドもメアリも落ち着け。こんなとこでもめるなよ。うわ……。」アラン様がバランスをくずして茂みからでてきてしまう。

「アラン様?」

カタリナ様にみとがめられる。

「……あく、よう、カタリナ」

気まずそうにあたまをかきながら返事をされていた。

「アラン様、先にずるいです。」

「アラン、兄をさしあいて何先に行つてゐるんですか」

「いや、どう考へてもお前らがあんなせまいところで身を乗り出してもめていたせいだろ。なんで俺が怒られるんだ。」

隠れていても仕方ないので私も姿を現し、お兄様もそれに続く。

「カタリナ様、こんにちわ。ごきげんいかがですか？」

「カタリナ、大丈夫か？」

キース様がぼそりとつぶやく。「もう少しまつていってくれればいいのに」とおつしやつてるようと思えた。

「あの、なんで皆がここに？」

とカタリナ様がたずねるとキース様が皆がお見舞を持つてきてくれたんだと伝えている。

まずジオルド様がカタリナ様の手を取つて

「カタリナ、君は僕の婚約者ですからどんなことがあろうと僕は命尽きるまで君のそばにいますから」と笑顔で話しかけてくる。それをメアリ様が押しのけて

「私もです。カタリナ様。絶対に離れてなんか行きませんわ。もしカタリナ様が悪事に手をそめるようになつたら叱つて差し上げますわ。」

「叱るだけじゃなくて菓子をおあづけにすればさらに効果があるとおもうぞ。」

アラン様がいたずら小僧の様な笑みをうかべる。

わたしにとつてもつらい決断だがカタリナ様がもしそういうことになつたら更生してほしい。

だから

「わ、わたしも心を鬼にして小説をお貸ししないことにします。」

と吐き出すように宣言する。

「そういうことだ。ここにいる者は皆君がどんな風になろうと見捨てて離れて行つたりしない。そばで支え続ける。」

お兄様が魔性の伯爵ともいすべきとても優しい魅力的な笑みをうかべた。

カタリナ様は

「みんな、ありがとう。」

とお礼を言つてきた。その表情からは安心した様子がうかがえた。わたしたちは、カタリナ様としばらくおしゃべりした後夕方になつたのでそれぞれ帰つていつた。

## 第21話 お城での合宿講義

不思議な岩の近くで倒れた日の夜、カタリナ様からは、あの晩よく眠れたこと、闇の魔法の契約の書を解析しなければならないので大変だというお話をため息交じりにお聞きした。

さて、2年に一度のソルシェ王国を含む近隣5か国の会合の時期がやってきた。今年はソルシェ王国が主催国となる。ソルシェは治安が良く経済的にも豊かなので多くの国が参加する可能性がある。

さてカタリナ様がジオルド様からマナーや諸国の歴史などを集中的に学ぶ合宿講義をお城でなさるよう指示を受けたそうだ。わたしも行きたいとお兄様に話すとお兄様は同意してくれただけでなく

「キースからカタリナの部屋の場所を聞いたからその近くに部屋をとつてやろう。」  
と言つて部屋もとつてくださつた。

そうそう、カタリナ様とお泊りで楽しむための小説を二つそりもつていこうとトランクに詰めた。

お兄様といつしょに合宿講義を行う部屋につくとジオルド様だけでなくメアリ様や

アラン様もいらっしゃる。ジオルド様はなにやら不機嫌そうだ。

カタリナ様の馬車がついて、カタリナ様が少々驚いた表情で私たちの名前を呼ぶ。

メアリ様が「カタリナ様、お待ちしていました。」

と満面の笑みで出迎える。わたしもメアリ様についていく。

「会えたのはうれしいけど、どうしてここにいるの？」

「わたしたちもお城に泊まり込みでこの合宿に参加するからですわ。」

「メアリたちも参加するの？」

「社交界の華と呼ばれるメアリ嬢には今更講義など必要ないと 思いますけどね。」

ジオルド様はにこやかにおっしゃるが目が笑っていない。

「いえいえ私などまだまだですわ。ね、アラン様」

「ああ……」

アラン様がそつなく応える。その顔は明後日の方向を向いている。

「カタリナ様、わたし、お泊りのためにたくさん小説をもつてまいりましたわ。」

お兄様はそれをみとがめ、トランクを取り上げられる。

「何の荷物かと思つたら、合宿講義を受けるのに小説を読んでいる場合じやないだろ  
う。これは俺が預かつておく。」

わたしはショックでしょぼくれるしかない。

「ソフィアはこの通りやる気に欠けるようだがよろしく頼む。俺も仕事で城に泊まり込むことになっている。もし何かあつたら知らせてくれ。」

とカタリナ様に頭を下げる。

「いえいえわたしこそよろしくお願ひします。」

と返事をされた。するとジオルド様が

「もうあいさつはいいですね。カタリナ、さつそく僕がカタリナの部屋までご案内します。」

というとキース様が

「いえいえ義姉さんの部屋はこちらで手配しましたので大丈夫です。」

といつてカタリナ様をひきよせる。

「わたしたちもその部屋の隣りの棟に部屋をかりましたの。」

とメアリ様がおっしゃる。ジオルド様は暗い表情でなにやらぶつぶつぶやいている。その日は用意された部屋に泊まつた。翌日は、メアリ様とカタリナ様と一緒に合宿講義のオリエンテーションだ。

翌朝お兄様やキース様、お二人の王子様はお仕事に向かわれ、わたしたち女性3人は、オリエンテーションをする部屋へ行く。

その部屋には、わたしたちのほかにも貴族の令息令嬢たちがいくにんかいらつしやつ

た。

講師のおじいさんの説明によると朝から晩までみつちり講義をするようだつた。なにやらカタリナ様がぼうつとしている。

「カタリナ様？　だいじょうぶですか？」

「ご気分でも悪いのですか？」

わたしとメアリ様はおなじことを考えていたようでカタリナ様に声をかける。

「あ、本当にびつしり勉強するんだなあ。大変だあと思つて」

「確かにそうですね。でも一緒にがんばりましょう。」

「協力すれば大丈夫です。」

「ありがとうございます。がんばりましょう。」

「じゃあ部屋に戻つて身支度してから夕食に行きましょう。」

「そうですわね。」

わたしたちはいつたん自分の部屋に戻つてから3人で食堂へ向かう。

城のT字路になつている廊下でジオルド様にでくわした。

「やあ、カタリナ、ちょうどよかつたです。一緒に食事はいかがですか？」

「王族の方も一緒に食事をするんですか？」

「いえ、他の家族はその家族だけで食事をします。王族も同じですが、僕はカタリナと食

事をしたくてこちらで食べられるよう手配したのです。」

ジオルド様がカタリナ様をエスコートしようと手を伸ばす、しかしメリ様がすつとはいつてくる。

「ジオルド様、目に入つておられないようですがカタリナ様はわたくしたちと一緒に食事をしますのよ。」

「ああ、メリ、いらしたのですね。カタリナとは久しぶりですので今日は遠慮してください。よかつたらあなたは、うちの家族の食事に交じつて婚約者のアランと親交を深めてはいかがですか。席も空いていますし。」

「あら、わたしとアラン様は充分に親交を深めているのはご存じではないですか？それにはわたしたちもカタリナ様とは久しぶりなのです。ジオルド様こそ、女性同士の楽しい語らいの場ですので遠慮していただいて、ご家族の席にお戻り下さい。アラン様も寂しがつておいでですし、ご家族の方も本音では戻ってきてほしいとお考えですわ。」

ジオルド様とメリ様が黒い作り笑顔でお話しされている。そのときお兄様が廊下の先からこちらへ向かってくるのが見えた。

「あ、お兄様」

「ん、これから皆食事なのか？」

「はい。これから夕食へ向かうところです。」

「そうか。じゃあ皆で一緒に食べよう。」

お兄様ははにかみながらほかの人には見せないうれしそうな表情をみせる。妹を何年もやつていると表情が乏しく見えるお兄様がどれほどうれしく感じているのかじわりと感じられる。魔性の魅力のせいで男性も女性もめろめろになつてしまつたためにかえつて友人が少ないお兄様は。元生徒会メンバーのように子どものころから耐性のある親しい友人たちとの食事をとても楽しみにしているのだ。

お兄様の表情をみてジオルド様もメアリ様も何も言えなくなつてしまい。大きなテーブルを囲んで食事をすることになつた。そのときにキース様もいらつしやつてこの場にはアラン様と平民であるため会合に参加しないマリアさん以外の元生徒会メンバーが勢ぞろいすることになつた。

お兄様はとてもうれしそうでうきうきしている。これだけでもわたしは声をかけてよかつたとうれしくなつた。食事がすむとメアリ様とキース様が自室へ戻るカタリナ様についていつて危険だから鍵をかけるようにとかなり必死な表情で訴えかけてカタリナ様の部屋には厳重に鍵がかけられた。

言うまでもないジオルド様対策だ。

## 第22話 大浴場とダンスのレッスン

翌日はみつちり講義で夕食の後わたしはつかれて部屋へ戻る。メアリ様はカタリナ様を大浴場へお誘いしたようだが、カタリナ様もかなりお疲れでお断りしていたようだ。

さらにその翌日、午前の講義が終わるとカタリナ様とメアリ様と食事をしたあとカタリナ様がいなくなつた。

メアリ様が

「もうすぐ午後の講義が始まるのにカタリナ様がいない。どこにいらっしゃるかわかりますか？」

とおっしゃるので

「すみません。わたしもわかりません。」と答えてから探しに行かれてようやく居場所をみつけたらしい。カタリナ様は会合で使われる広間でピアノの練習をしているアラン様にお会いになつたようで、リクエストしたら気持ちよさそうに寝てしまつたそうだ。

「メアリ、ソフィア大浴場へ行かない？」

「いいですね。」

わたしは即答だ。しかし、メアリ様はとまどつたご様子だ。

「カ、カタリナ様のお誘い、心の準備が…。」

とおっしゃる。

「? メアリはダメそう?」

「いえ、お供いたします。」

とお返事された。

それぞれいつたん部屋に戻り支度して大浴場に向かう。

大浴場は、だいたい10人くらいの人がゆつたりはいれる感じの場所だった。

カタリナ様がながめていらつしやる。

「わたし、こういう大きなお風呂に入るのは初めてなんです。それにしてもおおきいし、内装もすばらしいですね。」

しばらくメアリ様を待つがなかなかやつてこない。

「メアリ様、ふだん遅刻なんかしてこないので遅いですね。」

「そうね、珍しい、何かあつたのかな」

メアリ様付きのメイドさんがやつてきた。

「すみません。メアリ様は体調を崩されたので本日はご一緒に出来なくて残念だとおつ

しゃつていました。」

「ええ！メアリ具合が悪いの??」

わたしは、カタリナ様のほうを向く。  
「メアリ様が体調悪いのに私たちだけでお風呂を楽しむのは、申し訳ないし、寂しいですね。」

「そうね。今日はお風呂はやめて、次の機会に入るとしてメアリの様子を見に行きましょうか？」

そんなことを話していると、メアリ様のメイドさんは首を横に振って見せる。

「いいえ、メアリ様は今たまたま具合が悪いので一晩お休みになれば回復します。ですからカタリナ様方はお風呂をお楽しみください。メアリ様もそれを望んでおられます。」

「わかりました。そうですか。じゃあメアリ（様）にはぐれぐれもお大事にとお伝えください。」

二人でそう伝えるとさつそく入ることにした。

「わあ、ほんとうに大きいですね。」

「泳げそうね。」

カタリナ様がそう口に出した途端、アンさんが顔をしかめて

「カタリナ様、くれぐれも泳がないでください。」  
という。

「アン、心配しないで。そのくらいはわきまえてるわ。」

カタリナ様はそうお答えになるが顔色はかすかに残念そうだ。  
わたしとカタリナ様はタオルを巻いて浴槽につかる。

「カタリナ様、お湯からいい香りがしませんか?」

「あ、本当ね。これバラの香りがするわね。」

「香油をお湯に入れているようですね。」

とアンさんが教えてくれる。

さすがお城のお風呂、わたしとカタリナ様はバラの香りのお風呂を楽しみ、お湯で身体を流すとつかれも洗い流されるような心地よさを味わつて浴場を満喫した。

わたし佐々木敦子もソフィアとしてお城の浴場を満喫した。この世界の泡立ちの良いボディシャンプーは最高に気持ちよかつた。メアリがこれなかつたのはつくづく残念だ。

3日目、メアリ様は合宿講義に元気な姿を見せたので一安心した。講義は午前のみで午後はダンスのレッスンだ。

ダンスのレッスンのフロアへ行く。なんとそこにはジオルド様がいた。

わたしは、ダンスのレッスンは講義を受けている者たちで行う予定なのになぜ当たり前のようないるのだろうと思つていたので少々驚いたが、カタリナ様も不思議に思つたようで、がなぜここにいらつしやるのか尋ねると、

カタリナ様のダンスの相手を務めるためだという。しかし踊つているうちにカタリナ様の身体を巧みに引き寄せる。なにかささやいているようだ。かなり密着して踊つている。カタリナ様がだんだん上気して顔が赤くなり、足が少々ふらつき気味になつてゐる。わたしはあせんとながめてしまつたが。

メリヤ様がみとがめて

「カタリナ様が困つてゐるわ。助けに行かなくては。」

とおつしやつたので二人で助けに行くことにした。

メリヤ様が「ジオルド様、曲が変わりますので今度はわたしのお相手をお願いできますか?」

「ああ、メリヤ嬢、僕たちは婚約者として久しぶりのダンスを楽しんでいるのですよ。遠慮していただけませんか。」

メリヤ様はにつこり微笑み、

「今はダンスの練習の時間ですので、たくさんの方と踊つてこそ意味がありますわ。」さすが社交界の華どうたわれるメリヤ様だ。流れるような優雅な動作でジオルド様

の手を取つてダンスの相手役になる。

「カタリナ様は、少しお疲れのようですから、ソフィアさん、あちらへお連れして下さる  
ようお願ひします。」

わたしは、カタリナ様をホールの隅に置かれた椅子のところまでお連れした。

そして飲み物をお渡しする。

飲み物で落ち着いたのか、赤くほてりぎみの顔色がもとにもどつていく。

「カタリナ様、大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとうございます。少し疲れただけよ。」とお返事が返つてくる。

「ならよかつたです。」とわたしは微笑んでみせる。

しかし「あのエロ王子め。あんなにベタベタと……許すまじ」と小声のつぶやきがも  
れてしまふ。

カタリナ様が

「え？ ソフィア？」

「なんでもありませんわ。」とわたしは再びにつこりと笑みをうかべてみせる。

再びカタリナ様は飲み物を口にし、

「メアリとジオルド様のダンスはやっぱり素敵ね。美男美女でお似合いだわ。」

とのんきに呟いている。

しかし、わたしは一見優雅にステップを踏む二人の足もとは、メアリ様がヒールでジオルド様の足を踏みつけようとしてジオルド様が巧みにかわすという攻防戦にしかみえない。

わたしも、恋愛ことはよくわからないが、カタリナ様の鈍さはわたし以上だ。  
ジオルド様やキース様の気持ちに気が付いたのは一人があからさまに告白したからで、お兄様の気持ちには全く気が付いていただけない。

お兄様は常識人過ぎるところがあるのでカタリナ様にご自分の気持をお伝えすることはないだろう。そうするとお兄様とカタリナ様が結ばれる可能性は限りなく低くなるということだ。

## 第23話 朝のお茶会（前編）

お兄様の長年の恋が報われることもないということは、わたしの義姉にもなつていただけないということだ。、

そう考えるとすごく悲しくなつてきた。お兄様はあんなに素敵な方なのに。あの王子よりも絶対に素敵なのに。ちょっと先に婚約したからといってジオルド様ばかりするい！と感じる。

今回のお城のお泊りも魔法省に入省してしまつてなかなか会えないカタリナ様と接するチャンスなのにお兄様ばかり会えていない。ジオルド様は本来来ないはずの夕食やダンスの練習に来たりとかして、キース様は義弟の特権で会う機会が多い。お兄様だけ会えないなんて不公平。

お兄様にもカタリナ様と親交を深めてほしいけど、お兄様の性格から自分から動くことを躊躇するだろう。ここは妹のわたしが一肌脱いであげなくては！

そう決心するとわたしは作戦を考えた。

夕食の後、カタリナ様の部屋をたずねる。

ドアをノックすると、カタリナ様が直接いらつしやつた。

「ソフィア？ さあ入つて」

「突然お伺いしてすみません。」

わたしはペコリと頭を下げる。

「別にいいのよ。ちょうどひまで本をめくっていたところなの。ところでソフィアは何の用事かしら。」

カタリナ様が微笑みながらたずねてくる。

「あ、はい。実はカタリナ様を朝のお茶会にお誘いしようと思いまして。」

「朝のお茶会？」

カタリナ様は小首をかしげて聞き返される。

「はい。実はお城に泊まらせていただいている部屋の近くにすごく素敵な場所をみつけたんです。朝日が差してくるとまわりの緑がきらきら光つてまるでおとぎ話の場所みたいなのです。なのでぜひカタリナ様にもおみせししたくて。朝のお茶会を楽しむにはぴったりだなあと思つたんです。」

「そうなの？ ジヤあぜひお願ひするわ。」

カタリナ様は微笑み、二つ返事で来て下さることになった。わたしはうれしくて「はい！ 準備はおまかせください。」

と元気にお答えする。翌朝が楽しみだ。お兄様にも来ていただこう。

翌朝わたしははやめにおきてうきうきとお茶会の準備をする。  
準備が終わつてまもなくドアをノックする音がする。

おそらくカタリナ様だ。

「どうぞ。」

「おはようございます、ドアを開く。

「おはようございます、カタリナ様、今日は朝のお茶会に来ていただきありがとうございます。」

わたしはドレスのすそをつまんで淑女の礼をする。

「お招きいただきありがとうございます。」

とカタリナ様も答礼される。

「こちらです。」とお招きする。歩調がうきうきしてしまった。

朝日が絶妙に差し込み、きらきら輝くようだ。遠くに羊かやぎのような動物が数頭たたずんでいる。何度見ても美しい。カタリナ様もほおお・：と見とれているようだつた。

お誘いして正解だった。

たぶん私の顔には（いつたとおりでしよう）という文字が書かれているんだろうなとおもいつつ微笑んでしまう。

「お茶会はここでしようと思います。」

テーブルの周りには椅子が3つある。わたしとカタリナ様、お兄様の席だ。

「お茶会のメンバーは3人なの？」

とカタリナ様がおたずねになる。わたしは少々小声になる。

「実は、お兄様をサプライズで招待しようと思っているのですけど、いいですか？」

カタリナ様はほほえんで

「いいわよ。なんか逆に兄妹水入らずをお邪魔するようで、それこそわたしがお邪魔していいの？」

「お邪魔だなんてとんでもないです。むしろカタリナ様がごいっしょならお兄様も喜びますわ。」

わたしは首を強く横に振る。これは6割がたお兄様をおさそいする作戦なのだ。

「ところでなんでサプライズなの？」

「お兄様は、会合が迫つてお忙しそうなので、気晴らしにこつそりと喜ばせて差し上げたいのです。」

お兄様の部屋へ行きノックして声をかける。

「お兄様、ソフィアです。」と呼びかけるがお返事がない。

「いつもなら起きている時間なのですが……。」

「お兄様」

「ああ…開いている。」

「ぱやつとしたお声だ。」

しかし承諾をいただいたと考え、カタリナ様を部屋へ引っ張り込んでしまう。

お兄様は寝間着をお召しになつてソファの上で背もたれにもたれている。目は閉じた状態でお休みになられているようだ。しかしいつもならこの時間お目覚めにならっているのに…

「お兄様いつもならもうしつかり起きている時間なのです。だいぶお疲れなのかしら。」

わたしは不安になつてお兄様の顔を覗き込む。

「う…まさかまだお休みになられているとは予想外です。せっかく中庭でカタリナ様と素敵なおタイムをと思ったのに…お兄様、起きてください。」

わたしは、お兄様に手を伸ばしかけてはつと気が付く。

「そうだー・カタリナ様、お兄様を起こしてあげてください。」

もともとは6割がたお兄様を喜ばせようと考へたことなのだ。本当に気が付いてよかつた。

「え? なんで?」

カタリナ様は問い合わせられる。わかつてはいたけど本当にぶい方だ。

「カタリナ様が起こしてくだされば、きっとお兄様も喜びますわ。お兄様はあまり朝が強くないのです。どうかお願ひします。」

わたしは、カタリナ様をお兄様の枕元まで引っ張っていく。  
カタリナ様はお兄様の顔をまじまじと見つめ、くすりと軽く笑みをうかべたが、やがて決心したように声をかける。

「二コル様、起きてください。」

カタリナ様は、腰をかがめてお兄様の肩へ手をかけて何度かゆすつた。

お兄様の瞼が持ち上がって、黒い瞳がぼんやりした感じだ。

「あの二コル様、ソフィアがお茶会を……」

カタリナ様がそう言いかけた時、お兄様の腕が伸びてきてカタリナ様の腕を引っ張る。

「ふえ？」

カタリナ様の身体がぐらりと傾き、カタリナ様とお兄様の顔が近づく。

「うひやあ」

カタリナ様は驚いている。お兄様の両手がカタリナ様の身体を横倒しでダンスするかのようにつかんでいる。お兄様はぼんやりした感じなのにカタリナ様のほおにふれた、とおもつたらやさしくなる。

カタリナ様の顔は上気してあかくなつていく。

「いい夢だな」

お兄様は独り言、といふかほんと寝言をつぶやく。カタリナ様は「ニコル様、私はカタリナです。カタリナ・クラエスです。」

と訴えかけるように話す。カタリナ様は、妹や好きな女性ではなくカタリナ様ご自身だとなのることによつてどうやら解放されると考えたようだ。カタリナ様はこういうところ本当に鈍い。お兄様は実のところ夢の中でカタリナ様と出会つたと考えているのだ。

## 第24話 朝のお茶会（後編）

お兄様の笑みはますます甘く幸せそうでかつ魔性のある笑みになっていく。

カタリナ様はたまらなくなつたようで、目を閉じる。お兄様はその耳元に「愛してる」とささやいた。

カタリナ様が力が抜けたようにお兄様によりかかっていく。

どうやらお兄様の魅力に意識がとんでもいかれたようだ。

そうしているうちにお兄様が本当に目を覚まされる。

ご自分がカタリナ様を抱きかかえているのにお気づきになるが、わたしはそれを呆然と眺めてかたまつてしまう。

ぼうつとしているカタリナ様をお兄様はソファに横たえて私に向き合つて質問してくれる。

「ソフィア、いったいこれはどういうことなのか説明してくれ。」

わたしは、その声がかかつたとき、はつとしてバツの悪い気持になるが言葉を紡ぐようにして事情を話し始める。

「お兄様、素敵な景色を見つけたので、カタリナ様と朝のお茶会をしたいと考え、お兄様

にも喜んでもらおうとサプライズで声をかけようとしたのです。そしたらお兄様は寝ていらしたのでカタリナ様に起こしていただければ、お兄様はうれしいかと考えたのです。」

「わかった。だけど寝ている男性の部屋に入つてくるのは淑女としてどうかと思うぞ。」

「……あの……お兄様が入つてよいとおっしゃられたので……」

お兄様は無言になられた。

「そうか……ソフィアとカタリナがそうして一緒に部屋に入つてきてカタリナが俺を起こしたつてことが……それからどうなったんだ？」

「あの……その……」

わたしは、つつかえながら目の前で起こつた出来事を詳細に話した。顔から湯気が出

そうな感じだがお兄様の恋が実つたような感覚で嬉しさとほてりと理由もないのになぜか恥ずかしい感じが全身をおおう。

今度はわたしの話を聞きながらお兄様がかたまつた。頭の良いお兄様には珍しく思考が停止している感じだ。しかししばらくして

「ソフィア」

と声をかけられた。

「はい。」

とわたしは背筋をのばす。顔がまだほてっているが不思議なことに何か失敗したような感覺が身体にじわじわとのしかかってくる。

「ソフィア、お茶会で俺を誘いに来たところでカタリナが貧血を起こして倒れてしまつた。だからソフィアの部屋で休ませることにした。そういうことだな？」

「え？ お兄様、それは……どういうことですか？」

わたしはおもわず意識してまばたきしてしまう。

「ここで起こつたことが知られると俺もそうだが、カタリナも経歴に傷がつくことになる。下手をすれば社交界から爪はじきになる可能性がある。」

「え、お兄様やカタリナ様の経歴に傷がついて爪はじきになつてしまふんですか？」

わたしの顔からすうっと血が引いていく。それは最悪だ。悲しい。お兄様は続ける。「そうだ。だから、今日はお前たちは俺の部屋の奥まではこなかつた。来る直前に貧血になつて休んでいた。もしカタリナが何か覚えていても夢だと言い張つてくれ。ソフィアと俺が言うならそれが正しいんだろうと素直な彼女は信じるだろうから。」

「はい、わかりました。」

お兄様と私は、カタリナ様の身体を自分の部屋へうつした。

さてわたし佐々木敦子は、内野さんの転生した姿であるカタリナを守るために、また二

コルの経歷に傷をつけないために、もう一人の私であるソフィアがそばにいることによりカタリナの中にあるわたしのフラクトライトを増幅させ前世の記憶を流し込む。カタリナはわたしの中に自分がいるような感覚になるだろう。

黒いテーブル、薄いピンク色の壁。パイプベッドには水色のカバーがかけられ、青いクツショングが置かれている。前世おなじみのわたしの高校時代の部屋だ。

『よし、続きをやろう』

ゲームのオープニングが流れる。

このときはジオルドルートの続きをしていた。Iのクリア履歴を保存しておきながらIIをダウンロードすると、Iのクリア履歴にシリアルナンバーがつけられ続きをプレイすることができるようになっている。

画面には茶色いソーセージ状のアイコンが複数表示される。

わたしが選択肢を選ぶと笑みをうかべたジオルドの顔が映し出される。

「困つたことがあつたらいつでも相談してください。」

画面の下には、

「なんだかいつもよりジオルド様が積極的な氣がする。私も同じお城に寝泊まりしていると思うと照れてしまう。」

とマリアのモノローグが流れる。

「ううん、でも今はまず近隣会合でのお仕事をしつかり頑張らなくちゃ」  
 マリアはジオルドの婚約者なので半ばプリンセスとして近隣会合に参加することになるのだ。

アイキヤツチのような大きな文字だ。

「近隣会合がいよいよはじまる」

と表示される。

カタリナ様は起き上がる

「どういうことなの？」

寝言のはずなのにかなり大きな声で叫んでいる。

「力、カタリナ様、大丈夫ですか？」

「あれ？ ソフィア？ ここはどこ？」

「カタリナ様を朝のお茶会におさそいしたのですが、お兄様をサプライズでお呼びしようとしましたが、お兄様の部屋の前まで来たら貧血を起こされて倒れてしまわれたのです。なのでアスカルト家の使用人にわたしの部屋まで運んでいただきました。」

「そうなの？ ありがとう。」

どうやらうまくいったようだ。わたし佐々木敦子の見せた夢が彼女にとつて重大すぎるがゆえに今朝起こつたことが完全に記憶から消えたようだ。

カタリナ様は貧血を起こしたということで、午前中は休まれた。

わたしはメアリ様と午後の講義へ行こうとする、遠くでカタリナ様とジオルド様が話しているのが見える。

ジオルド様は真剣そうな表情だつたが、やがて笑顔になりカタリナ様の頭をなでる。

「カタリナ様、そろそろ午後の講義の時間ですわ。」

「うん、ありがとう、メアリ、ソフィア」

そして3人で講座室へはいる。

さて、ソルシエ、エテエネル、ルーサブルなど近隣5か国会合はいよいよ今日から開幕だ。

昨日から各国の代表団が集まつてきていて、来賓の受付が行われている。

わたしとお兄様は宰相の息子と娘と言うことで参加している。

カタリナ様はキース様とご一緒だ。

ジオルド様とアラン様は王族であるため、近隣諸国の王族用の別室があつてそつちで対応している。

わたし佐々木敦子もソフィアの意識のかたすみで、近隣会合の様子を眺めていた。近隣諸国の代表の来ている衣裳は東南アジア風、日本風などさまざま。異国感あふれる風景だがゲームと同様言葉が同じなのには驚いた。

近隣会合がはじまつた。メアリ様とわたしはさかんに男性から声をかけられる。アルの恋愛にあまり関心のない私は複雑な気分だ、

リ

## 第25話

### 近隣5か国会合

近隣会合がたいへんな状況になつたのは会合の二日目だ。理由はお兄様に特定の相手がないことがわかつてきて、わたしのところに他国の女性たちがむらがるようにお兄様のことを聞きに来たのだ。

「お兄様の二コル様に婚約者がいらっしゃらないというのは本当ですか？」

「はい、ただ兄には心に決めた方がいるようです。」

「どのような方が好みなのですか？」

「明るく分け隔てない方です。」

「ご趣味はなんでしょうか？」

「どのようなものをお送りすれば喜んでいただけるでしょうか？」

お兄様の趣味や好みなどを聞かれる。次から次へといらっしゃつて、自分がどんな身分の者で結婚すればどのように有利になるかのアピールもわすれない。わたしは、同じことを応えなければならぬし、他国の方に失礼はできないから気疲れでへとへとなつた。

後でお聞きするとカタリナ様も同じように女性たちにキース様のことで質問攻めに

あつたようだ。メアリ様も

「昨日の会合は、お父上やパートナーもいらしたので大人しくさせていたのでしょうか。今日は女性ばかりの会合なのでタガがはずれてしまつたんでしょう。とくにキース様と二コル様は容姿、身分からいっても人気ありますし、実際お二人とも生徒会メンバーを務めた優秀な方ですから。」

とおっしゃる。女性同士は恋バナが好きなのは経験でなんとなくわかる。わたしは、ロマンス小説のほうがおもしろいのでそういう話になつてしまふが。

わたしはぐつたりしてしまつた。

向こうから同じように疲れた様子のカタリナ様がやつてくる。

どうやらキース様のことで質問攻めにあつたのだろう。

「ソフィア、大丈夫?」

それを言うのが精いっぱいのようだ。

「疲れました……」

わたしは笑みを浮かべてカタリナ様と握手して自分の部屋に戻る。

しかし、その翌日カタリナ様が行方不明になつた、なにか事件に巻き込まれたのではないかという話になつた。

「舞踏会で食事をしているところまでは見ているのですが……」

「どこへいったんだろうな。」

「カタリナ様が行方不明なのですか。」

「そうだ。」

「わたしたちも探しに行きたいのですが。」

わたしとメリ様はなんとかしたいと強く感じた。

「他国がらみかもしれない。あからさまにはできないが人身売買を行つて いる国もある。」

「人数がおおいほうが目が行き届くのではないか? わたしたちにも探しに行かせてください。」

わたしとメリ様はこんなかんじでくいさがる。

「不正がばれないよう屈強な用心棒を雇つて いる可能性もある。危険だから待つていてくれ。」

「じゃあ、せめていつしょに連れて行つていただけませんか。」

わたしとメリ様はダメ押しでくいさがる。

「いつも見張れるわけじゃないからな。」

「カタリナもほんの少しの時間で行方不明になつたのです。くやんでも悔やみきれないと。」

「このうえソフィアやメアリまで行方不明になつたら義姉さんが無事だつたら悲しむよ。」

「ソフィア、落ち着いて俺たちを信用して待つていてくれ。」「わかりました。」

後で聞いた話だが当日のうちに人身売買にかかわつてマリアさんをさらつたルーサブルの中級貴族の客室棟をつきとめてエテエネル国王子セザール様が皆に知らせて下さつたらしい。

ジオルド様とキース様が怒り狂つていたのをアラン様がおちつかせ、その貴族どもは氣絶させられニコル様も加わつてお城の一室に閉じ込められたらしい。

なので

「まあということで、カタリナはとにかく……無事だ。」

とお兄様に含みのある言い方をされた。なにやらうなじをかいている。

翌日で近隣会合は終りだ。

わたしとメリ様は、カタリナ様にお会いしようとクラエス邸に向かう。

門で使用人におとづれたことを知らせる。

メイドのアンさんがいらつしやつた。

「メリ様、ソフィア様、お越しいただきありがとうございます。」

「カタリナ様はいらっしゃいますか。」

「はい、こちらです。ご案内します。」

「カタリナ様、メアリ様とソフィア様がいらっしゃいました。」

「開けて、二人をお招きして。」

「はい。」

メアリ様が開口一番、「カタリナ様、もう大丈夫なのですか?」

「けがもないし、大丈夫よ。」

メアリ様はほつとした様子だ。

「昨日二コル様から大丈夫だとはお聞きしていたのですが」

と一言いうとわたしのほうに一瞬笑みを向ける。

「どうしてもちやんとお顔を拝見するまでは心配で心配で……。こんなに早くお伺いしては迷惑かもとは思つたのですが……。」

カタリナ様の顔には申し訳ないと書いてある。

「いっぱい心配かけでめんなさい。それからこんなに心配してくれてありがとう。」

カタリナ様は頭を下げられる。

「いいえ、私はなにもできなくてくやしいです。」

「私も探しに行くのはダメだと言わされて待つてているしかありませんでした。」

メアリ様はくやしそうだ。

「わたしは、二人が私のためにこんなに心配してくれただけでうれしいの。むしろ二人がわたしのために危険な目にあわないで済んでよかつたと思うと、探さないで正解よ。」カタリナ様はわたしとメアリ様の手を取つて

「私は本当に素敵な友達をもつて幸せよ。二人とも大好き。今日はわざわざ心配してきてくれてありがとう。」

わたしは思わずうなづく。てれと嬉しさでかおがほてつて、うれし涙が目にじむ。メアリ様もそんな感じなようで赤くなつていて、目に光るものがあり、うなづいている。「あの、それではお互い支度があるのでおいとまします。」

「ええ、ありがとうございます。」

「それでは、メアリ様、また会合で。」

「ええ、それではまた。」

わたしとメアリ様は軽く挨拶して領きあつて。それぞれの馬車に乗り込む。

最終日は、王族と高位の貴族だけがあつまつて挨拶をするので、ソルシエでは、伯爵

家は、宰相のアスカルト家だけで侯爵家以上だ。

翌々日は、クラエス邸で会合お疲れ様お茶会が行われる。わたしの世代の元生徒会メンバーが招待されている。

読書が解禁になつてわたしはおすすめの本をもつていく。

クラエス邸に着くとジオルド様、アラン様、メアリ様が先についていた。  
わたしはうれしくて、メアリ様のあいさつが終わるや否や

「お招きありがとうございます。カタリナ様。また新作の小説をもつてまいりました。  
このお話もとても素晴らしいです。」  
と話しかけた。

## 第26話 会合お疲れ様お茶会（前編）

お兄様は、そんな私に対しても

「ソフィア、少し落ち着け。本の話はお茶会がはじまつてからでいいだろう。」  
とおっしゃる。合宿講義でとめられていたのでうれしくて暴走気味になつているのは認めるけれど……

お兄様は微笑んで

「本日は招待ありがとうございます。」とおっしゃると、カタリナ様の様子が見とれている感じになる。

（お兄様の魅力はすごいんだから。カタリナ様、お兄様を選んでください）

心の中でつぶやく。

「カタリナ様、お招きありがとうございます。これ少し作つてきましたのでよかつたらどうぞ。」

マリアさんが自作のお菓子をお持ちになつた。カタリナ様はうれしいだろうし、マリアさんのお菓子は美味しいので楽しみが増えた。

「ありがとうございます。さつそくいただくな。」

「会合、お疲れ様でした。」

カタリナ様はカップを高く掲げる。

わたしは、不思議な懐かしさを感じる。後で聞いた話だがカタリナ様の前世の記憶でこのような習慣があつたという話だ。

ジオルド様とキース様は苦笑してカップを掲げる。アラン様は、なんだそれと怪訝な顔をされる。

メアリ様とマリアさんは微笑みながらカタリナ様に習い、お兄様も無表情でそれに習う。

わたしは、うれしくて皆よりも高くカップをかかげてしまった。

「いやーでも大したことなく会合が終わつてよかつたわ。」

とカタリナ様がお菓子をほおばりながらおっしゃる。

それを聞いた皆さん、マリアさん以外かたまる。

キース様があきれてぼやくよう

「義姉さん、最終日の帰りの馬車で僕がなんて言つたか覚えている？お母様に叱られたばかりでしょ。」

カタリナ様は顎に指をあて思い出すように

「ドレスを破つてまで木に登つたのはつていう話？」

「覚えてくれて何よりだよ。」

「カタリナにとつては、そうまでして誘拐犯のところへ一人で乗り込んだのは大したことではないんですね。僕らの見解と大きな隔たりを感じます。」

ジオルド様が遠い目をしている。

「ああ、そこは同意する。ドレスを破つてまで木に登つて誘拐犯のところへ一人で乗り込むのは充分大したことだからな。」

アラン様は大きく頷く。

た。

「その節はみんなにたくさん心配かけてごめんなさい。」

カタリナ様はいろいろ考えを巡らせていたようだが、やがてばつがわるい表情になつ

た。  
「わたしのせいでカタリナ様にまで危険にまきこんですみませんでした。」  
といつて深く頭をさげられた。

「マリアが、謝る必要なんてないわ」

カタリナ様は大きな声で否定する。そのとおりマリアさんは一方的な被害者だ。

「そうですよ、マリア。あなたは被害者なんですから謝る必要は全くありません。」

「そうだよ。マリア、君が気にする必要はないよ。義姉さんが勝手に暴走しただけだか

ら。」

「ああ、その通りだ。このバカは一人で勝手に暴走したんだから自業自得だ。気にしない  
くでいい。」

「その通りだ。」

ジオルド様、キース様、アラン様に続いてお兄様も同意する。  
(マリアさん、謝る必要ないですよ) という意味でわたしとメリ様はうなづく。  
カタリナ様もマリアさんに全く非がないという意味でみんなにあわせてうんうんと  
頷いている。

うつむき気味なマリアさんは、顔をあげて

「ありがとうございます。」

とてれと嬉しさのまじった笑顔をみせてくれる。

「マリア～大丈夫よ。また何かあつたらかならず助けに行くから。」

とカタリナ様がおっしゃると

「義姉さん、またそういうことを」

「もう危険なことはしないと言つたろう」

男性陣からブーイングだ。

わたしやメリ様は両手をにぎりしめて

「くれぐれも危険なことはしないでください。」  
と伝えた。

「それにしても合宿講義は、たいへんだつたけどみんなと一緒に過ごせたのは楽しかつたわ。」

「そうですわね。お勉強は大変でしたけど、一緒に過ごせたのは楽しかつたです。」

「ええ、久しぶりにずっとカタリナ様とご一緒にできてうれしかつたですわ。」

「学園の寮生活みたいで楽しかつたわね。」

「それはもう。」

「お城の大浴場にも入つたしね。楽しかつたわ。」

カタリナ様がそういうと、メアリ様がかたまる。

あ、これは言つてはダメなやつだつた。

「どうしたの、メアリ」

「いえ、ちょっとふがいない出来事を思い出してしまつて。」

その様子を「こらんになつて思うところあつたらしく、カタリナ様は今度はキース様に話をふつた。どうやら頭をなでてもらつたから頑張れたとおつしやつている。キース様は恥ずかしそうに首を振つてまた別の時にしてくれとおつしやる。

ジオルド様から黒くひんやりしたオーラが漂つているように感じるがおそらく気の

せいだろう。

カタリナ様は、今度は、アラン様の演奏を聞いて感動したので、リクエストしたら気持ちよくなつてねてしまつてすみませんと謝つていた。

アラン様は、「ああ、のことか、別に」とあつさりそっぽを向くが顔がやや赤くなつてゐる。メリ様がそんなアラン様をじつと見てゐる。ロマンス小説の挿絵なら左側に横を向いて顔を赤らめたアラン様を右側に正面を向いたメリ様が見つめるような構図だ。

カタリナ様はしょぎになくなつたという感じでわたしたち兄妹に話をふつてくる。「ソフィアには、お茶会に招待してもらつたのに結局倒れてしまつてごめんなさい。あんなに素敵な席を用意してもらつたのに。」

わたしは一瞬、どう答えていいかパニックになり、

「あの、いえ、あのときはすみません。」

と言つて頭を下げる。下手なことを言つたらお兄様とカタリナ様の経歴に傷がつく。皆さんとは気の置けない友人関係にあるわたしたち兄妹だが、ことカタリナ様に関してもは皆さんのが大好きだという一点においては用心しないわけにはいかない。

「え、なんでソフィアが謝るの？」

「あ、いえ……。それはその」

わたしはいいわけを考えるがお兄様が静かな声で

「ソフィアは体調が悪いのに気が付かずにひっぱりまわしてすまないと言つてるんだろ  
う。」

とおっしゃつたのでほつとして

「そ、そ、うなんです。」

と答え繰り返し頷いた。

「そ、う、な、ん、だ、でも、わ、た、し、も、体、調、が、悪、か、つ、た、なん、て、気、が、付、か、な、か、つ、た、し、気、に、し、な、い、で。  
む、し、ろ、元、気、だ、つ、た、と、思、う、ん、だ、け、ど、倒、れ、た、時、の、こ、と、も、よ、く、覚、え、て、い、な、い、し、私、二、コ、ル  
様、の、お、部、屋、に、は、い、つ、た、ん、で、し、た、つ、け、？」

「たしかに來たが開けた途端に倒れたんだ。だからあのときはびっくりした。合宿の疲  
れが意識しないうちにたまつていたんじやないか。だからソフィアの部屋に運んだん  
だ。」

お兄様がそうおっしゃるとカタリナ様は納得した様子だった。

## 第27話 会合お疲れ様お茶会（後編）、オセアンへの出張（前編）

「いろいろあつたけど久しぶりにみんなと過ごせて楽しかったわ。」

カタリナ様がそうおっしゃるように学園時代は毎日のように会えていたが、カタリナ様は魔法省、わたしたちはそれぞれの家の仕事で会う機会がぐつと減ってしまった。「でしたら今度王家の別荘へ泊りに来ませんか。自然豊かで素晴らしい場所ですよ。」「本当？ ジヤあぜひ行つてみたいです。」

「そうですね。義姉さん、ぜひここにいるみんなで別荘にお邪魔させてもらいましょう。」

「ええ、そうですわね。アラン様、ぜひみんなで行きましょ」

「あ、ああ、そうだな。」

「楽しみですね。」

「そうだな。」

「王家の別荘ですか。楽しみです。」

ふとみると提案したはずのジオルド様の目はわらつていないように思えた。

さて近隣会合の際に、魔法省で捜査を進めている田舎の男爵家の令嬢がさらわれた事件にからみ、マリアさんまでさらわれかけていたが、そのことでカタリナ様がエテエネルの王子セザール様とご一緒したためにソルシエでは禁じられている人身売買が行われていることが明らかになつた。そのため魔法省の任務としてさらなる情報収集と組織摘発のためオセアンという港町に潜入捜査する必要が出てきたという。これまでの捜査の過程で闇の魔力がからんでいるということで、闇の魔力の捜査に適しているカタリナ様、マリアさん、ソラさんがオセアンへ行つて町民にまぎれて潜入捜査をするとのことだ。要するに町民に身をやつしての情報収集で危険なことはないとのことだつた。

みおくりにはジオルド様、キース様、アラン様、メリ様、わたくしたち兄妹が参加した。

ジオルド様が余計なことに首を突つ込むなと言えば、キース様は、お菓子をくれるからとついていくなどといい、メリ様が護身用の薬瓶をすすめている。目つぶしと麻痺薬だという。

アラン様がかえつて危険だからととりあげる。

わたしは、最近のお気に入りのロマンス小説を何冊か持つてきた。  
「あの、カタリナ様、道中おひまだつたらこれを……」

するとお兄様が

「ソフィア、カタリナは遊びに行くんじゃないんだ、仕事に行くんだぞ。そんなものを読んでいる暇はない。それは家に持つて帰りなさい。」

とおつしやりとりあげる。カタリナ様は少々残念そうなお顔だつたが仕方なくわたしはあきらめた。

ソラさんが

「そろそろ馬車を出しますよ」と言つて顔を出す。

「くれぐれもカタリナを頼みますよ。どうかおかしなことにならないようお願ひします。」

ジオルド様の笑みが何となく黒く感じる。ソラさんは少し引き気味にうなづいて馬車を出した。

カタリナ様がオセアンへの出張の間、ジオルド様がいつしよではないこと、魔法学園時代のように毎日お会いできることにも慣れてきたので読書が手につかないことはなかつたが、それでもお会いしたい気持ちは心のどこかしらにある。不安な気持ちと楽しみな気持ちとが交錯する。風の魔法道具で遠くの声が聞こえたり、遠くと通話できたりする道具があるらしい。早く誰もが便利に使えるようになつてほしいものだ。わたし佐々木敦子は、転生した内野さんであるカタリナと話せないことが少々寂しく感じた。前の世界にはスマホがあり、LINEで気軽に話せたのに……魔法道具研究室

ではやく風の魔力によるケータイなりスマホを開発してもらいたいものだ。

さて一週間後、首を長くして待っていた。ようやくカタリナ様たちが帰つてくるとう。

カタリナ様たちの馬車が着くとさつそく魔法省の客間に来ていただく。「オセアンの港町では、レジーナさんのところの『港のレストラン』でウェイトレスをやつたのよ。

例の誘拐犯のアジトがわかつたけど、ちよつとつかまちやつて。でもポチやソラ、マリアの魔法で無事に誘拐犯のアジトから脱出して、誘拐犯たちはつかまつて事件は解決したからみんな安心して。」

わたしは、一瞬言葉がでなかつた。皆さんも多かれ少なかれそんな感じで複雑な顔をしている。

「ちよつと待つて義姉さん、情報収集するだけだから危険のない任務のはずじやなかつたの？なぜ敵につかまるようなことになつたの？」

キース様が眉を寄せて表情を険しくする。どうやらソラさんを追いかけていたら敵のアジトの前にい合わせることになつてしまつたらしい。ジオルド様は目をいからせている。キース様はなぜそんな危険なことをするのかと眉をあげる。

カタリナ様はメアリ様と私のほうへ顔をむける。その表情は、眉をさげ、たすけてくれと顔に書いてある。

「まさか。何かされたのですか？」

メアリ様は顔を青くする。

「なにもされてないわ。閉じ込められはしたけど。」

わたしはたまらず

「閉じ込められたって……大変なことじゃないですか。暗くて汚い牢屋にでも入れられたのですか？」

と申し上げると、

「広い部屋じやなかつたけど牢屋じやなかつたし、無事に何事もなく脱出できたんだから。」

カタリナ様は必死に弁明する。

「それで、どうやつて脱出したんだ？」

アラン様が不思議そうにたずねている。ポチちゃんやソラさんの活躍で脱出できたらしいが、それは結果的に無事に脱出できたといつても何事もなく脱出できたとは言わないだろう、とたしなめられていた。

「そんなに強引に逃げてきて、危険なことはけがはなかつたのですか？」

ジオルド様の表情は険しいまま。カタリナ様はけが一つもなかつたと腕を見せて弁解する。

「しかし、その言い方だと危険なことがあつたんじやないか？」

今まで黙つていたお兄様が口を開いた。お兄様に見つめられたカタリナ様は降参ですという感じで、逃げる途中に子どもたちをかばつてつかまつてしまつた、とおつしやる。

するとメアリ様がさらりと蒼くなり、

「あの、捕まつたつて……それで大丈夫だつたのですか？」

「うん、大丈夫。少し首を絞められたらくらいで……」

「つかまつて首を絞められたつて……すごく危なかつたんじやないか、義姉さん」

「首は、けがは大丈夫だつたんですか？」

「ほんの一瞬のことだつたから大丈夫よ。ほんとうにたいしたことなかつたんだから。ほら」

カタリナ様は首筋をおみせになつて、皆さんはほつと息をついて安堵したようだつた。

「カタリナ（様）、それで危険はなかつたとは言えないのでは？」

「ものすごく危険だつたんじやないか、義姉さん。」

皆さんはため息交じりな感じだつた。

## 第28話 オセアンへの出張（後編）

カタリナ様は弁明される。

「でもね。すぐに、マリアが魔法で助けてくれて、なんともなかつたのよ。マリアが『光の契約の書』で新しい魔法を覚えて、それがすごくて。」

とお話を変える。わたしは、マリアさんの魔法についてお聞きしたいとは思つたものの危険なことははなさらないのでくださいという気持ちも強くある。

「義姉さんのいう危険と僕たちが考える危険の間には大きな隔たりがあるね。」

「そうですね。カタリナのいう危険の度合いは、僕たちよりもだいぶ高い位置にあるようです。」

皆さんのが頷いている。ジオルド様が勝手に動き回れないよう閉じ込めたほうがいいと言い出し、キース様がそれに同意し、家族でどうにかしますとおつしやりはじめた。「そこ」は婚約者である僕が責任を持つて対処しますので。なんでしたらもうカタリナはお城へ連れていきましょうか？」

ああついに来たかという感じだ。

「義姉さんることは家族で何とかしますので。お城にはいかせませんので。」

「キース様、よろしければ私たちも協力しますわ。ねえ。アラン様。」「ああ。」

さすがメアリ様、そう、ジオルド様の思い通りにはさせない。

「なら、私たちも。ねえ、お兄様。」

「そうだな。」

「あなたたちは関係ないでしょう。これは僕とカタリナの結婚の話ですよ。」

「いえ、ジオルド様、そんなお話はしていませんから。」

カタリナ様は逃げようとするが、ドアを開けたところで

「義姉さん、まだ話は終わっていないよ。」

「カタリナ、どこへ行くつもりですか？」

そのときマリアさんが上司への報告から戻ってきた。

「カタリナ様、ラーナ様とサイラス様がお待ちです。」

カタリナ様はほつとしたように

「では、わたしも報告へ行つてきます。」

と部屋を出でていかれた。

「マリアさん、お帰りなさい。どうだつたのですか、詳しいお話を聞かせてください。」

マリアさんはうなづくとお話をはじめた。

「わたしは、カタリナ様の居場所や敵のアジトを知っているという男がお金を無心して、ラーナ様になかなかお話にならないので、試しに『光の契約の書』にかかる魔力リペント（悔い改め）を使つたら、アジトとカタリナ様たちの居場所をすらすらと話し始めたんです。」

「カタリナが、マリアの魔法がすごいって話してましたが、その魔法ですか。」「恐らくそういうことだと思います。よからぬことを考えている者の気持ちをただす魔法なので。」

「それはすごいですね。」

「でも効果は一時的でしばらくすると元に戻つてしまふのです。ただそのおかげで場所が分かつたのでそこへかけつけました。アジトの路地にはガラの悪い男たちいたので、ラーナ様とレジーナ様がそこにいる男のうち何人かを捕まえて白状させたところ、子どもをつれだそうとする男と女がいるのでそれをおさえておけと指示されているとのことでした。その特徴は青い髪に瞳、茶色の髪に水色の瞳と言うことでソラさんとカタリナ様がいるということが分かつたのですが、なにしろ人数が多いのでラーナ様とレジーナ様が魔法と護身術で倒してもきりがないという状態でした。わたしは、またリペントを使おうと強く想いをこめました。すると光の霧があたり一面にひろがり、男たちは大人しくなつたのです。そのわきをとおりすぎてカタリナ様を見つけました。とても安

心しました。」

「大人しくなつた男たちは、ラーナ様達が捕えました。そこへエテエネルの王子セザール様と部下の方たちが応援に来て下さり、すべて男たちは縛り上げられて連行されました。子どもたちも無事に保護されました。」

皆さんから安堵の息がもれる。

「ところがソラさんがアジトの建物の中に知り合いがいるので行かせてくださいとおつしやつたので、ラーナ様はすこしお考えになられた後、無茶をしないようにと条件をつけて許可されました。そのときカタリナ様が『わたしも行かせてください』とおつしやられ、ソラさんが待つてているようにおつしやられましたが、ソラさんのお知り合いのアルノーさんが心配だ、ポチちゃんもいるから大丈夫だとおつしやられたのでしぶしぶご承知され、カタリナ様もアジトへ行くことになり……」

「え、それって……」

わたしは複雑な気分になつたが、カタリナ様には危険にとびこんでほしくないという皆さんの気持もわかるし、わたし自身もそうだ。

「ただ、わたしも光の魔力があるので行かせてくださいと申し上げたのです。だからカタリナ様をお守りしたい、お守りできるということです……」

「でもカタリナ自身が自分で自分を守れないんだろう。」

「魔法省の方々やセザール様とその部下の方々もいましたので……。」

「マリアさんも義姉さんのことの大切に思つてくれるのはうれしいけど無茶しないで。」

「それからアルノーさんが敵を倒していたので、無事に連れ出すことができました。保護した子どもたちの中に男爵令嬢もいましたのでどうにか事件は解決しました。」

皆さんは顔を見合わせる。

「どうしましょうか。」

「出張はさせないようになりますか。」

「そうですね。ラーナ様にどうしても出張しなければならない場合は外へ出なくていいように考えてもらいましょう。」

「出張したらカタリナは余計なことに首を突っ込みたくなるような、お城へ来てもらつたほうがいいですね。」

「いいえ、それは家族の役割ですので。義姉さんにはお妃はつとまりませんから。」

それなりに具体的な行動制限案は出るもの、そのたびジオルド様とキース様の言い争いになつてえんえんと続く。

メリヤ様はそれとなくカタリナ様と一緒に居られる案を出しはじめ、わたしは、それとなくお兄様とカタリナ様をくつつけるような案を出す。

マリアさんはそれとなく職場がいつしよなのでわたしもカタリナ様と一緒にいるようになりますと言えば、義姉さんのまねしてマリアさんまで無茶しないで、とキース様にとめられるなど話はどうどうめぐりだ。

わたし、佐々木敦子は *fortune Lover II* にはあまり出てこなかつた闇の魔力が気になる。IIのカタリナは、謎の女ということでどうやつて闇の魔力を手に入れたのはほとんど明かされていない。

わたしは、人身売買組織の裏で暗躍する貴族、そしてサラという少女、カタリナを害そうとする闇の魔力をみはろうと考えた。

## 第29話 魔法省の休憩室でカタリナ様が叫ぶ

今日はメアリ様といつしょに魔法省のお手伝いをする日だ。「貴族令嬢としての見識をひろげ今後に役立てたい」ということで週に2日程度お手伝いに行っている。表向きの目的は、そういうことになつていて、確かにその通りだが、裏の目的としてカタリナ様やマリアさんに会えるという本音もある。メアリ様も口にはしないがおそらく同じことをお考えになつていて。

今日は、書類の整理だ。魔法省の事務仕事は膨大で、あの優秀な元生徒会長のラファエル様も魔法道具研究室の副部署長として忙しい日々を送つていてるくらいだ。半日ほどで仕事を片付けてメアリ様と廊下を歩いていると、マリアさんに会つた。

「マリアさん、こんにちは」

「こんにちわ。メアリ様、ソフィア様」

「マリアさん、カタリナ様はお元気にやつていますか?」

「いま古字で書かれた契約の書の解説に奮闘中なのですが、お疲れになつて休憩室でお休みになつています。」

「そうですか? おうかがいしても?」

「はい。お二人がお見えになつたらお喜びになると思います。ただお目覚めになるまでお待ちになるようですが」

「わかりました。おうかがいします。」

カタリナ様はお休みになつてゐるようでわたしもつられてうとうとしあじめた。

水色のカバーのかかつたパイプベッド、黒いテーブル。壁は薄いピンク色。ベッドの上には青いクッション。なぜか一度も行つたことのない場所なのに既視感がある。

長細い黒い箱から小さな引き出しのようなものがでている。少女が真ん中に1.5cmほどの穴を開いた丸い円盤のようなものを小さな引き出しにいれてしまうと「まな板」のような板に「F o r t u n e L o v e r II」の文字があらわれ、ウイーン、カチヤカチヤという音とともに聞きなれない楽器を使つた音楽が流れる。

まな板に映し出されるのは、ジオルド様、ソラさん、わたし、メアリ様、マリアさん、アラン様、魔法省のサイラス様やデューリー君などが映し差出される。どうやらマリアさんの立場から見た紙芝居のようにすすむ。この画面をみているのはあたかもわたし自身のような不思議な感覚。

『よし、もう少しで隠しキヤラも攻略成功だな』

なぜかわたし自身が話しているような不思議な感覚。

『マリア、俺がお前をまもつてやるよ』

そのセリフのまえには、「セザール・ダル」という文字が書かれ、その浅黒いイケメンは、あきらかにエテエネルの王子セザール様に間違いなかつた。以前カタリナ様から見せられた異国の文字によく似ていた。おそらく「セザール・ダル」と読むのだろう。

まな板に描かれた「画像」がつぎつぎに切り替わりマリアさんが

『ああ、おまえはそういうやつだな。わかつた。いざとなつたら共に戦おう。』

セザール様は、八重歯を見せてにつと笑つている。

やがて画像が薄暗くなつて、不穏な音楽が流れる。

『あら、ようやく見つけた。探したのよ』

と高慢そうな女性の口調。つぶやくのは黒いフード付きマントをまとつた女で名前は「??」となつてゐる。

『??あなたはいつたい……？』

まな板に映し出されたマリアさんとセザール様の顔がいぶかしげに変化する。

『お前は何者だ』

『あら、あなたはともかくそこの卑しい小娘とはなんども話したことがあるのに……卑しい小娘の分際でわたしの名前をお忘れとはいひご身分ですこと。』

何んとなく聞いたことがある。これはカタリナ様の声だ。しかしあざけるような口

調だつた。「画像」のマリアさんはややたじろいだ様子で問い合わせる。

『……あなたはどなたですか？』

と問い合わせる。

『あら、まだとぼける気？ひどいわね。わたしよ、わたし』

あざけるような口調でフードを外したら、細面で吊り上がった眼、「へ」の字を逆にしたような口元をした女の顔が現れる。「まがつた口」ということばそのもののようなあざけるような口元。好感がもてない悪役顔だ。

『力、カタリナ・クラエス様……？』

『お久しぶりね、マリア・キャンベル』

『クラエス様は国外に行かれたとお聞きしていましたが……』

『そう、たしかにあなたのせいでの国外追放になつた。でも戻ってきたのよ。あなたに復讐するためには』

目を吊り上げ口元もつりあげてにやりとせせら笑う。

『悪かつたな。こいつはおれのだ。傷一つ付けさせんぞ。』

セザール様がマリアさんをかぼうように前へ出る。

『ふん、あなたのようなよそ者が闇の力を持つあたしに勝てるとももつてゐるの？さあケルベロス！』

カタリナ様のような女のかげから。ポチちゃんのような子犬が現れるがその表情は邪悪な獣そのもので、みるみる巨大化していく。もとの30倍になつただろうか。ロマンス小説に出てくるドラゴン課と思われるくらいに巨大化し、ウオオオオオオオオオオと遠吠えする。牙をむき出しにしてマリアさんとセザール様をにらみつける。

この夢はわたし佐々木敦子がカタリナとソフィアに見せた夢だ。ソフィアは起きたら忘れている可能性が大きいが、内野さんにみせるためだからそれでもかまわない。そのときわたしソフィア・アスカルトはカタリナ様の叫び声でわれに返る。

『……名前、ケルベロスって何？』

カタリナ様はがばつと起き上がる。わたしもなぜかうたたねしていたようだ。驚きを含んだ心配顔でマリアさんがカタリナ様に話しかける。

「カタリナ様、あの、大丈夫ですか？」

「あ、うん、大丈夫、大丈夫」

カタリナ様は気恥ずかしそうだ。

わたしはさすがにとまどつて

と話しかける。

「ケルベロスって聞こえた気がしたのですが……」

メアリ様が不思議そうな顔をなさる。

「あ～ちよつと変な夢を見てなんかよくわからない寝言を口走ったみたい。あ～そのあまり深い意味はないのよ… あははははは…」

間をおいて気を取り直したカタリナ様がこんどはお尋ねになる。

「それはそうと、どうして一人はここにいるの? 一人に会えるのはうれしいけど…」「今日はメアリ様と魔法省のお手伝いをする日だつたんです。カタリナ様とお会いしたいですねと話していたら、ちょうど運よくマリアさんに会えて、こちらにいらっしゃることのことでしたので…。」

「それでこちらに来たのですが、カタリナ様がお疲れでお休みになられているということでしたのでお目覚めになるまで待っていたのですわ。」

メアリ様がつけたした。

## 第30話 アラン様の演奏会の準備

カタリナ様が私たちにお返事なさる。

「あ～そうだつたんだ。お手伝いに来てくれる日だつたのね。せつかく来てくれたのに寝ててごめんなさい。」

「いえいえ、久しぶりにカタリナ様の寝顔を拝見できて、お得なくらいでしたわ。」

メアリ様は微笑みながらそうおっしゃり、わたしも同感なのでうなづきながらも笑みがもれてしまう。

「二人の今日のお手伝いはもう終わつたの？」

「ええ、それほど難しくない書類整理でしたので……これでおいとまはするのですが……むしろラファエル様をはじめ皆さんは大変だなあと感じました。」

「そうですわね。頼まれた分は終わつたのですが、あの量を拝見すると申し訳なく感じました。」

「たしかに忙しいから……それにしても学園時代は、ずっと一緒だつたのに最近はあまり会えないね。……ちょっと寂しいな。」

するとメアリ様の瞳孔がかつとおおきくなり、上半身をカタリナ様へむかって乗り出

される。

「わたし、カタリナ様のお仕事が終わるまでおまちしますわ。そうでなくとも仕事の内容がわかる範囲でお手伝いして、なんでしたらそのままお泊りします。」

わたし佐々木敦子は感じる。これじゃあ前世の省庁の話のようだ。魔法省なにげにプラック？と脳裏によぎる。

わたしソフィアはカタリナ様が引いておらっしゃるのを見て  
 「メアリ様、落ち着いてください。カタリナ様が引いていらっしゃいます。それからメアリ様はこれから用事があるとおつしやっていたではないですか？」

わたしはメアリ様の上半身をひっぱってソファの隣にすわっていただく。

メアリ様がだんだん冷静になる一方では、ほおをふくらませてつぶやく。

「うう・： そうでしたわ。カタリナ様のこと比べたら大した用ではないのに・：・」

「わたしたちも魔法省にお伺いするときに会える時間が減つてさびしいですねとお話ししていたのです。さすがに今日はこれでおいとますのですが、同じ日に休日がとれるようでしたらご一緒させていただきたいです。」

「そうね。一緒に過ごしたいわ。」

「あ、皆さん、まだいらしたのですね。」

タイミングよくマリアさんがいらつしやつた。

わたし声をかける。

「次の休日どうしようかお話ししていたのです。」

マリアさんも目を輝かせる。

「あの、新しいレシピのお菓子か、とびきりのお菓子お持ちします。」

次にメリヤ様が目を輝かせ

「いいですわね。ちょうどいい茶葉が用意できそうです。お茶会にしませんか？」

「おいしいお茶においしいお菓子。楽しみです。」

「次の休日はお茶会で決まりね。」

「それから連休がとれるようでしたらお泊り会もいいですね。」

「そうですわ。またパジヤマパーティをしませんか。」

「賛成です。つて、メリヤ様、こんな時間。大丈夫ですか？」

休憩室の時計の針が時間が迫っていることを示していた。

「メリヤの用つて何なの？」

「アラン様の演奏会の準備です。」

「大したことではないのですが…。」

「え、それは大したことだよ。メリヤ。行つてあげないと。」

カタリナ様はそうおっしゃるもの、メリヤ様は名残惜しそうだ。

「メリ様、わたしもお手伝いしますから。」

「そう、いってメリ様をなだめる。」

わたしたちは、カタリナ様に挨拶して演奏会場へ向かう。

廊下でラーナ様とサイラス様とすれ違う。

「アスカルト嬢にハント嬢か。今日はどうもありがとうございます。」

「どういたしまして。ラーナ部署長、サイラス部署長。でも皆さんお忙しそうでちよつと申し訳ないです。」

「いやいや、きまりきつたああいう書類をやつていただくだけでもすぐ助かる。次もよろしくたのむ。」

「はい、お役に立てればうれしいです。」

わたしたちはそれぞれの馬車に乗り込んだ。

演奏会場へ着くとアラン様の侍従の方々、メリ様の侍従の方々などもいらっしゃて準備をしている。

「ああ、メリ、ソフィア来ててくれたのか。ありがとうございます。」

「はい。重いものは運べませんがお手伝いいたします。」

「ああ、さつそく演奏用の風魔法用具の点検頼む。」

演奏会場には、音がきれいによく響くように風魔法用具が会場に設置されている、楽

器の運搬や機器の設置などは侍従たちの仕事だが、風魔法用具の点検は魔法学園卒業者もしくは貴族の仕事だ。演奏会の成功は、風魔法用具の調子が影響するので魔法学園でも音楽の単元で授業時間が割り振られている。

メアリ様が点検し、風魔法をもつわたし가調整する。

「ソフィア様、これちよつと調子悪いようですね。」

「わかりました。」

「このくらいでいいでしょうか。」

繰り返し耳をあてる。

「そうね、大丈夫でしょう」

そんなふうに話しながら風魔法用具の点検をして調整する。

「点検、準備終わりました。」

「じゃあ二人は受付に回つてくれ。」

来客は、貴族の方々が多いので、わたしとメアリ様は必然的に裏方を早々外され受付へ回される。お客様がちらほらいらっしゃる。

「お久し振りです。」

「お久しぶり。今日は何の曲なの?」

メアリ様が曲目を説明する、わたしもロマンス小説と関連のある曲であれば詳しく説

明する。そうこうしていると魔法学園時代のなつかしい顔や先輩方、後輩たちの姿もあらわれる。

「メアリ様、ソフィア様」

「あくシンジャ一さんにフレイさんですね。ご機嫌いかがですか。」

「はい。アラン様が卒業して久々の演奏会でしたので今日は生徒会をはやめにきりあげてきたのです。」

「ありがとうございます。こちらのお席です。」

「ありがとうございます。」

「やあハント嬢にアスカルト嬢か。お疲れさん。」

「ジエフリー様@@」

「うん、かわいい弟のアランの演奏会だからな。兄として行かないわけにいかないだろう。」

「ありがとうございます…？　スザンナ様は？」

「ああ、今日は仕事でこれないそうだ。マリア嬢とカタリナ嬢の…」

「マリアさんとカタリナ様がどうかしたのですか？」

「うおっほん。いや失敬。なんか別のことが思い浮かんだようだ。気にしないでくれ。さて僕の席はどこかな。」

「ジェフリー様の席はあちらです。第一王子でお兄様でいらっしゃるので特別席を用意しました。」

「そうか、そうか、ありがたい。ではまた。」

「う。 演奏会がはじまつた。アラン様の演奏が一曲終わることに拍手と黄色い声が飛び交

う。 今日は5曲演奏した。

「メアリ様、ソフィア様お疲れさまでした。片付けはやりますので。」「お願ひします。」

夜遅くなつていたが充実した1日だつた。わたしとメアリ様はあいさつしてそれぞれの馬車に乗り込んだ、わたしは馬車の中でうとうとしあじめた。

翌朝ベッドの中で目を覚ました。気恥ずかしくなつた。

「お兄様？」

「ああ、よく寝ていたからな。」

「ありがとうございます。／＼＼＼＼。」

「お兄様はほほえんだ。」

# 第31話 孤児院に野菜を届けに（前編）馬車の中のガールズトーク

とある日の魔法省の食堂。わたしとメアリ様は、ランチを食べていたが、横からこんな声が聞こえてくる。

「マリア、今度の休日、サイラス様の野菜を孤児院に届けようと思つてはいるんだけど行かない？」

「そうなんですか？ 行きます。」

「あの、カタリナ様？」

「メアリにソフィア？」

「聞こえてしまったのですが、孤児院に野菜を届けに行くんですか？」

「あ、そうなの……。」

「お二人だけでぬけがけはいけませんわ。」

「そういうつもりじゃなかつたんだけど……。今日は二人はお手伝いの日だつたのね。」

「はい、そうです。」

「でも魔法省の職員だけでおしのびで商人の格好をして孤児院に野菜を届ける話だから

あまり楽しくないと思うけど二人はそれでいいの？」

「カタリナ様と一緒できるのなら喜んでおうかがいいたしますわ。」

「わたしもです。」

「それに貧しい子どもたちに野菜をとどけるなんてすばらしいではないですか。わたしの母も貧しい平民でハント侯爵に見初められなかつたらわたしも生まれてなかつたのです。」

「そう、わかつたわ。じゃあ一緒に行きましょう。」

（お兄様もおさそいしましようか、カタリナ様と同じ時間をすごせるチャンスですから。）

魔法省の仕事が終わつて自宅へもどるとお兄様にさつそく話す。

「カタリナ様がサイラス・ランチャスター様やマリアさんと一緒に孤児院などの実態は知つておるそうです。お兄様もいらっしゃいませんか。」

「そう……だな。将来宰相として政治を行うことになると孤児院などの実態は知つておく必要がある。いい機会だから俺も行く。ソフィアありがとう。」

（お兄様、うそではないですが、カタリナ様に会える正当な理由ができたからとうれしそうな笑みが隠せてないです。）

「貴族の格好ではまずいので商人の格好で行くそうです。」

「うん、そのほうがいい。飾らない状態がわかるからな。」

そして当日、なぜかわたくしたち兄妹とメアリ様、マリアさんだけかと思つたらジオルド様とアラン様も来ている。キース様はわかるのだが、なぜジオルド様とアラン様まで……

あんのじょうサイラス様はカタリナ様に抗議している。

「カタリナ・クラエス、これはどういうことなんだ？」

「えつとこれはですね……まず出かける話をキースにしたら、心配だからついていくということになつて……」

「うむ……君の義弟がついてくるというのは想定内だつたが……」

「そうなんですか。それでサイラス様のためにマリアをさそつたんですけど……」

「なんで俺のためなんだ？」

「いや、サイラス様は女性に慣れていただかないといけないし、親交を深められるかな」と……」

「そんな気遣いは不要だ。まあ事情はわかつた。しかしほかのメンバーはどういうことだ。なぜ王子や宰相の息子までいるんだ。」

「実はマリアをさそつたときにたまたまメアリとソフィアにもあつて次の休日は一緒に過ごそうという約束だったので、孤児院に野菜を届けるだけで楽しくないかもしれない

けどいいかと尋ねたらそれでもいいということで……そうしたらいつのまにか他の皆も……」

サイラス様は頭をかかえて

「わかった。こうなつた以上追い返すわけにもいかない。しかし商人に化けていいるとはいえ身分が高すぎるだろう。」と話した後

「まあ行く先は治安が悪いわけじゃないから……なんとかなるからかまわないか……。」と何か確認するようにぼそりとつぶやく。ぬ

「カタリナ嬢、一つ確認しておきたいがこの野菜を育てた者についてはどう説明しているんだ？」

「ああ、それはある人の野菜があまつてサイラス様が届けに行くと話してあります。」

「そうか……」

とサイラス様は遠い目をしてつぶやく。

キース様が義姉のことは自分が見てるから心配するなどジオルド様にいえば義弟とはいえ婚約者を他の男にまかせられないとジオルド様が返す。

メアリ様がジオルド様に話していないのになぜといつたら

アランがわかりやすい性格をしているからとジオルド様が返す。

いつも通りだ。

私とお兄様とマリアさんは、お兄様の作つたお弁当箱を囲んでいる。  
カタリナ様が

「えっ、もしかしてそれお弁当箱？」

「はいそうです。お兄様はすごく楽しみにされていて夜から準備されていたのです。」「でもまさかニコル様がお弁当をおつくりになるなんて。」

「料理人に頼んだものを少し手伝つただけだ。よけるばマリアも少し味見してみてく  
れ。」

「いいんですか？光栄です。」

カタリナ様が呼びかける。

「みんな、そろそろ出発するつて～」

するとジオルド様がカタリナ様の手を取ろうとする。

しかしカタリナ様はさりげなく断りマリアさんに声をかける。

どうやらマリアさんをエスコートしようとしている。

キース様が義姉さんなにをしようとしているの？と小声で聞いているように見える。  
なにかささやいて、キース様は納得したようだ。

カタリナ様は、サイラス様にたずねる。

「なぜちやっかり御者の隣の席に座つていらつしやるのですか？」

「ああ、孤児院までの道は私が詳しいから案内しようと思つてな。」

「それは素晴らしいですが、せつかくの道中なんですからマリアと同じ馬車で楽しくおしゃべりすればいいじゃないですか？」

わたしは、ああなるほどと納得した。どうやらカタリナ様はサイラス様の「恋路」を応援するつもりなのだ。しかし

「カタリナ嬢、馬車という狭い空間でみんなに可憐で美しいマリアといつしょに過ごすことができると思うか？無理だ、のぼせ上つて倒れてしまう。勘弁してくれ。」

結局馬車は、男子組と女子組に分かれて乗ることになった。

「あの、カタリナ様これ作つてきたお菓子です。」

マリアさんはにかみながらも微笑みを浮かべお菓子を差し出してくる。

するとメリヤ様も

「カタリナ様、うちの庭で育てた茶葉から今朝紅茶をつくりました。どうぞ。」

紅茶をすすめる。

わたしはお兄様に見つからないよう巧妙に隠してきましたかばんを取り出す。

「カタリナ様、最近のおすすめのロマンス小説をもつてきました。ぜひお持ち帰りください。」

「ありがとうございます。じゃあみんなでお茶とお菓子をいただきましょ。」

「おいしーいい。」

「このお茶もお菓子にあつておいしい。」

「わたしも使用人と一緒に研究してきたのです。マリアさんのお菓子をよりおいしくひきたたせるとともにお茶自身の味もすつきりさわやかな味になるよう茶葉の選別と淹れ方を工夫しましたの。」

「ほんとにおいしいわ。シリウス会長に負けないかも。」

「そこまでほめていただけるとうれしいですわ。」

「メリ様、ありがとうございます。感動です。」

馬車の中でわいわいとガールズトークが続く。

## 第32話 孤児院に野菜を届けに（後編）お手伝い

「… 久しぶりにカタリナ様に会えると思ってお兄様つたら使用人の方々と協力して移動中のお弁当まで作つたのです。これ女子分です。よかつたらどうぞ。」

「本当にニコル様が作つたのですか。素晴らしいですね。」

「わたしも味見したのですが、おいしくて… お兄様にこんな才能があるとは実は驚きました。」

「ニコル様は魔法、勉強は素晴らしい、剣術もたしなんでおられます。このお弁当… 本当に多才でいらっしゃるのですね。」

「はい、お兄様はすごいんですよ。わたしも改めてお兄様を見直しました。」

「ソフィアは本当にニコル様が大好きなのね？」

「もちろんです。あ、でもカタリナ様のことも大好きですから。」

「あら、ありがとう。」

「ソフィア様、抜け駆けはいけませんわ。わたしもカタリナ様のことは大好きですか  
ら。」

「ありがとうございます、メアリ」

「あ、あの、わたしもです。わたしもカタリナ様が大好きです。」

マリアさんがほおを赤らめもじもじしながら話す感じは女性のわたしからみてもかわいらしく感じる。

一力タリナさま~~~~~

「わつ、メアリこんなところ抱き着いたら危ないよ」

はつ、私としたことがつい

まあ、お菓子もお弁当も無事だし、さあ、みんなでいだときましよう。

「そうで（すわ）ね。」

そのような感じでガールズトークを楽しんで数時間。

「皆様、つきました。」

御者の方の報告を受けて馬車を降りる。

素敵なお庭の奥にそれなりの規模の建物が見える。たくさんの子どもが寝泊まりするからそれなりに大きい建物だ。

ようこそいらっしゃいました。いつもありがとうございます。」初老の女性が現れ、サイラス様に話しかけてきた。

「マギー院長、わざわざのお出迎えありがとうございます。こちらが先日お話ししてい

た知人たちです。今日はともに手伝いたいということで同行しました。」

「あらあら聞いていたより大勢の方にいらしていただき感謝です。わたしが院長のマギーです。では早速野菜の搬入からお願ひします。」

野菜の搬入は大勢参加したおかげで大した時間もかからずに終つた。

「さあ、お手伝いいただけるということで、子どもたちにお勉強、お裁縫、お料理など教えていただけますか？」

「サイラス様？」

カタリナ様がなにやら尋ね顔になる。

「ああ、ソルシェの孤児院は、ここから学校へ通えるようにはなつてているが、勉強や裁縫、料理といった家事まで教える要員まで確保しているわけではない。だからこうして人が訪れた時には、家事や勉強を教えたりしている。わたしも毎回来るたびに勉強を見ている。子どもたちの将来のためにな。」

「なるほど、そういうことですか。」

カタリナ様は納得顔になつた。

「貴族の身分だとそんなことができないしな。ということで若手商人見習い諸君、君たちはどうする？」

「俺は勉強を教えることにする。裁縫や料理はそんなに得意ではないしな。」

お兄様が口火を切つてこたえる。わたしは手を挙げて  
 「わたし、お裁縫なら少しお教えできます。」

するとメアリ様も

「では、わたしはお裁縫をお教えすることにします。それなりにはできますので。」

「あの、ではわたしはお料理を。たいしたものは作れませんが。」

「マリアさん、メアリ様……ご謙遜なさらないでください。わたしが恥ずかしいじやないですか。」

二人は苦笑する。

「ジオルド、キース、二人とも勉強ができるだけじゃなく教えるのも得意じゃないか。勉強をみてあげないか？」

「はい。」「そうですね。」

「よし、じゃあわたしもマリアと一緒に料理を……。」

カタリナ様がいいかけると皆顔を見合させる。

「ちょっと義姉さん……。」

「カタリナ、こここの厨房を壊すわけには……。」

ジオルド様とキース様が顔を青くしてカタリナ様を押しとどめようとする。わたしたち女子3人は苦笑するしかない。

「マギー院長、勉強も裁縫も料理も得意ではないのですが、掃除とか洗濯とかできることはないでしょうか？」

カタリナ様は困り顔で院長にたずねる。

貴族令嬢が掃除や洗濯って……って思ったが土いじりや農業が気にならないカタリナ様だ。いやがらないでやるだろうが、掃除や洗濯は毎日のことだからだれかがやつてのではと思つたらそのとおりだつた。マギー院長は思案顔になる。

「ううん 掃除や洗濯は係の者がいますので……」

としばらくうなつてから何か思いついたようにポンと手を打つ。

「あ、そうだ！」

「子どもたちと遊んでいただけますか？」

マギー院長は年少の子どもたちをカタリナ様に紹介する。

カタリナ様は渋るアラン様を説得する。これでカタリナ様とアラン様のお手伝いは子どもたちと遊ぶことに決定したが、横で聞いていたジオルド様、キース様、マリアさんの目の色が変わつて。

「え？ 遊ぶんですか？」

と声に出してしまつ。わたしとメアリ様はそれを見てまた苦笑する。

「あの、遊び要員はそんなにいりませんので。」

マギー院長が苦笑しつつおさえこみにかかつてようやくあきらめた。  
さて、勉強を教えるお兄様だが、子どもたちがお兄様に見とれて勉強にならない。女  
の子はもちろん、男の子もちらちら見て いるありさまだ。

さすがにマギー院長も気が付いて

「ニコルさん、すみませんが、魅力がすごすぎて子どもたちが集中できません。今日は長  
旅でお疲れでしようから外でお休みになつてください。」

と言われてしまう。またかと思うかこればつかりは仕方がない。

お兄様は裏口のドアの階段のところへ行つたようだつた。

わたしは、裁縫を子どもたちに教え、

「じょうずだね。」「あ、気を付けて」

と声をかけて、たまに指に針を刺してしまう子もいたものの、たいしたことなくそれ  
ぞれ作品を完成させられたようで皆満足そ うだつた。

さてしばらくして香ばしい焼き菓子の香りがただよつてくる。

孤児院の職員の方が外で遊んでいる子どもたち、カタリナ様、アラン様を呼びに行く。

「おやつの時間です。」

「カタリナさん、アランさんもどうか召し上がつてください。」

「いただきま～す。」

明るい声がひびいた。

### 第33話 力タリナ様、再び孤児院へ

力タリナ様が

「？これはなじみのある味ですね。」

というと

「あら、よくわかりましたね。ここにいる子どもたちが、皆さんと一緒に来られたマリアさんと一緒につくつたものなんですよ。」と孤児院の職員の方が紹介する。

カタリナ様は自分が褒められたかのように微笑んでいる。やがて厨房から食堂にマリアさんが現れ、

「今日のお菓子はここにいる子どもたちとわたしで作りました。どうでしたか？」  
「とてもおいしかったです！」

という子どもたちの元気なお返事。マリアさんは、子どもたちをよく観察していく  
「この子は混ぜるのがとても上手で」「この子はとても手際が良くて」「この子は飾り付け  
がうまくて」「この子はよく気が付いてくれて」「この子はアイディアが面白くて」とそ  
れぞれ子どもたちをほめる。子どもたちの瞳はきらきらして誇らしげだ。

焼き菓子の形はさまざま動物や花の形などさまざまでドライフルーツチップも入

れられている。しかし基調は、しつこくない絶妙なマリアさんらしいふんわりとした優しい甘さだ。カタリナ様がおつしやるように何個食べても飽きないのはすごい。  
おやつを食べた子どもたちもお菓子を作った小さなお兄さんお姉さんをあこがれの視線でみつめる。

マリアさんが席に近づくとカタリナ様は、

「お菓子とててもおいしかつたし、子どもたちの顔をキラキラしている。そんな表情を子どもたちから引き出せるなんてマリア、本当にすごいね。」

マリアさんは首を横に振つて

「すごいのは子どもたちです。皆がとても熱心につくつていたからです。」

マリアさんが料理の話を、カタリナ様は遊んだ話をしていて、子どもたちの夕食をつくるために買い出しに行こうという話になつた。

カタリナ様はサイラス様に声をかけて説得したようだ。

こんどこそわたしはご一緒したいと思つた。

メアリ様と顔を見合わせ、うなづくと、

「わたしたちも買い出しにいきたいのですが?」

と伝える。ジオルド様やキース様も買出しを手伝わせてくださいという。  
するとマギー院長が今度は、

「買出しにそんな人数は必要ありません。皆さんはごゆっくりなさつてください。」

ときつぱりした口調でおっしゃったので、あきらめざるをえなかつた。

裁縫を教え、子ども向け物語を子どもたちに話してしているうちに、買出しに行つていたサイラス様、カタリナ様、マリアさんが帰つてきた。どうやら孤児院を抜け出したリアム君を連れ帰つたようだつた。

子ども向け物語は、前世の「おやゆび姫」「一寸法師」「赤ずきん」「鼠草子」「竹取物語」「シンデレラ」「人魚姫」「浦島太郎」「桃太郎」のような話があつてなかなか興味深いとわたし佐々木敦子は感じている。

夕食を孤児院でごちそうになつて、ジオルド様やキース様が勉強を教えて好評だつた話、わたしとメアリ様はお裁縫の話をした。わたしは妹だつたので「お姉ちゃん」と呼ばれたことは新鮮だつた。カタリナ様はアラン様とおにごつこなどをして、途中からお兄様も加わつて遊んだ話をされる。サイラス様はマリアさんと買い出しに行つたとき旅芸人が来ていて町が混んでいた話をされた。いつか見に行つてみたいと感じた。わたしとお兄様は迎えのアスカルト家の馬車で帰つた。

数日後、またサイラス様とカタリナ様はある孤児院にいつたらしい。ただジオルド様やキース様もついていつたらしい。その日に事件が起こつた。

後から聞いた話だけどまとめてみるとこういうことだつたらしい。

リアム君が孤児院をぬけだし、カタリナ様がそれを追いかけた。リアム君をつかまえてなぐさめて帰ろうとしたときだつた。フードを被つた女が「楽しそうね、」と声をかけてきた。

フードを被つた女はカタリナ様に近づき、フードを頭から外すと「久しぶりね。カタリナ・クラエス」と含み笑いをしながら再び声をかけてきた。カタリナ様はキース様の誘拐事件にもかかわったサラという闇の魔力を持つ危険な女であること悟り、リアム君をかばつて「何か用ですか?」と問い合わせた。

「そつちの子どもに用があつたんだけどね。」とリアム君を指したのですぐにリアム君に孤児院まで戻つてサイラス様を呼んでくるようにと小声で伝えて、リアム君を孤児院に向かわせた。

「そんな怖い顔をしなくてもあの子には何もしないわよ。」

「どういう意味?」

「あの子の目からよどみが消えたから。あなたのせいよ。それに『闇の契約の書』もあなたが横取りした。」

女は含み笑いをしながら目をつり上げる。

「なぜ『闇の契約の書』のことを知っているの?」

「あらわたしは何でも知つてゐるのよ。あなたが闇魔法の訓練をしていることもね。」

カタリナ様は危険をかんじて孤児院へ向かつて走り出す。

「あらあらまだお話の途中なのに。たくさん邪魔してくれたからお仕置きしなきやね。」

その女は闇を作り出してそれはだんだん広がつてカタリナ様をおいかけてくる。

道の向こうから見知った人物が2名「カタリナ」「義姉さん」と叫びながら走つてくる。

「わたしよ～」

そのとき耳元に「捕まえた。」と軽口のようなサラのささやきが聞こえて闇につつまれた。それから意識がなくなつたのだという。

一方、ジオルド様とキース様がかけつけたときは闇にカタリナ様が飲み込まれるようになされたといふ。最初声は聞こえたがそのうち返事がなくなつたとのことだつた。また、孤児院の町の近くにいたマリアさんに闇の魔法が絡んだ案件でカタリナ様が闇に飲み込まれたとの連絡が風の魔法道具の通話機で魔法省から連絡がいつた。

マリアさんがかけつけたがサイラス様、ジオルド様、キース様は苦りきつた顔で首をふるばかりだつた。

その日、カタリナ様は魔法省にも自宅にも帰つてこなかつたのだ。

## 第34話 異変

わたしはサラ。ついにカタリナをとらえた。闇の契約書をもつこの女を洗脳する。

魔法省のあの石のところへ行つた。あの空間にはいるには、闇の石にふれる必要があるが、闇の黒い球よりも上位の権威を使わないと闇の契約の書は手に入らない、もしくは闇の契約書の持ち主を従わせられないとのことだつた。

最初、あの孤児院の子どもリアムを犠牲にするつもりだつたが、仕方がない。指に傷をつけ、冥界の9神、アシエラ、アーリマン、アポリオン、ベルゼブブ、ラーヴアナ、死の神アープチ、いけにえの神ウイツロポチトリ、トヒール、そして闇の最高神テスカトリポ力を呼び出した。

「どうか、闇の契約書をわたしにおひきわたしください。」

「闇の契約書は継承者にしか使えぬ。あのカタリナ・クラエスを黒球が選んだのだからな。しかしわれわれは黒球にお前に闇の契約者を従わせることができる権威を与えよう。」

「カタリナ様まいりましようか」  
カタリナはうつろな目でうなづく。

魔法省の石碑の闇の石に触れて闇の空間に入る。

「黒球よ。」

「これはこれは、死の神アープチ様、いけにえの神ウイツロボチトリ様、闇の最高神テスカトリボカ様」

「闇の契約者カタリナ・クラエスをこの娘サラにひきわたせ。これは命令だ。」「わかりました。」

カタリナの青い目が青みがかつたどす黒い色に変わった。これでよい。

一週間ほどたつてカタリナ様がいきなり魔法省にあらわれた。黒いフードマントをまとっていた。しかし様子がおかしかつたという。魔法省の方々の話はこんなふうだつた。

「あらカタリナ嬢おかえりなさい。」

まずガイ・アンダースンさんが声をかけると

「ガイ・アンダースン先輩」

「どうしたの？わたしはローラって呼んでちようだいといつたじやない。」

するとカタリナ様はアンダースン先輩を見つめて、アンダースン先輩の様子が途端におかしくなつたという。ふだんから魔法省の職員からかすかにおかま、変人、キモイと思われている感覚を敏感にかんじとつていたのだろう。そこを闇の魔力で増幅された

のだ。キイイイイと奇声をあげ机やいすを持ち上げては投げ、魔法省の施設や道具を破壊し始めた。少女趣味の格好の怪力男が気が狂つたように暴れるさまは不気味だつたという。カタリナ様が自分の陰からとりだしたのは灰色のどくろがついた不気味な鎌だつた。その鎌を一回転させると、空中に穴が現れ大量の鼠が現れた。鼠は魔法省の職員に襲いかかる。職員にかみつくとアンダースン先輩のように狂つたような行動をし、鼠がかじつた道具も暴走しはじめて、魔法省の施設を破壊しはじめる。魔法省は大混乱におちいつた。

しかし魔法省も手をこまねいていたわけではない。魔法道具研究室の部署長ラーナ・スミス様、その正体はスザンナ・ランドール様だが、ジエフリー王子のところへ相談に行つた。

「ジエフリー」

「なんだ。スザンナ。ああ、今はラーナ・スミスといつたほうがいいのかな。」「いま魔法省は大混乱に陥つてていることは知つてはいるだろう。直接の原因はカタリナだが、カタリナが行方不明にある直前にあのサラという女によつて闇につつまれたという事件が起こつてゐる。」

「そうだ。」「ほうデーヴィッド・メイスンが前使つていた闇の魔力をもつ少女か。」

「実はな、あの少女のバツクには大貴族がついているらしい。」

「ああ知っている。」

「わかつっていたのか」

「わたしの情報網をなめてもらつては困るな。」

「しかし相手はザクセン侯とならぶ魔法省次官だ。いちおう君の上司ということになるが……。」

「いざとなつたら第一王子の婚約者という権限をつかわせてもらうさ、」

「それがそれじやすまないようなんだ。」

「ああ、それもなんとなくわかつている。」

「やつの裏にはボロンテイクという組織がありその九大企業のうち二大巨頭ピエドラ・フェールとロス・ニーニヨスという多国籍の政商が裏にいる。やつらはいくつもの会社をソルシエとルーサブル、エテエネルにおいている。やつらの汚れ仕事を請け負つている連中がエテエネルの国王の改革を妨げ、人身売買を行つて大儲けしている連中だ。」

「鉱山労働など資源を搾取し、森林を伐採して、あやしげな薬をつかつて大農場で作物を作つて売つてゐる連中もある。毒性の強い薬を使つて大農場を支えるには人身売買が必要。やつらの作る作物は全く虫が付かないそうだ」

「虫が食わない作物とは……。」

「要するに毒性が強い薬だからへんな病気になつて死ぬことが多いのさ。そのために安い給料で奴隸のように働かせるために人身売買を行う必要がある。犯罪でつかまつた者が売られてくることが多い。」

「そういえばソルシェも死刑囚が一定数いるが死体処理の話を聞かないな。」

「やつが握りつぶしているのさ。ピエドラ・フェールとロス・ニーニョスの人身売買組織に横流ししてね。それでやつは報酬をもらつている。」

「でもなんで魔法省の関係者に危害を加えるんだ？」

「魔法省が例の男爵令嬢とのかかわりで人身売買の事件にかかわつたろう。だから連中は魔法省に含むところがあるのさ。」

「とりあえずはカタリナをなんとかしないとな。」

「ああ、話が長くなつた。」

「実はカタリナ嬢だがほかの世界から来たのではない感じている。」

「ほう。」

「カタリナを救い出すのになにか方法がないかと聞いて回つたが、前回カタリナがシリウスの魔法で永遠の眠りにつかされたことがあつただろう。」

「ああ、あのディーケ家がらみの事件だな。」

「あの魔法をとくきつかけをつくつたのはソフィア・アスカルトだ。そのソフィアが不

思議な体験をしたと言つてな。」

「あのとき、ソフィア自身もよく覚えていないものの不思議な夢を見る頻度が多くなつたそうだ。そのときにカタリナの過去の姿を見た気がすると言つている。カタリナがずっと眠つて起きなかつたときに、異世界の少女と思われる不思議な服装をした少女の姿が自分の家の窓に映つたり、その少女の声を聴いたそうだ。言葉がわからないのにその意味がはつきり分かつたと言つている。」

「闇の魔力との関連があるのでないのか？」

「それがソフィアにはそういつたことがない。闇の魔力では説明がつかないんだ。」

「そうか…。」

ジエフリー様はあごに手を当てて何やら考え込んだ、

## 第35話 魔法省での騒動

一方魔法省では…

「カタリナ様、どうなさつたのですか？」

「マリア・キャンベルか」

「はい？ カタリナ様？」

「光の魔力を持つお前は目障りだ。わたしからジオルド、キース、アラン、ニコルを奪つた。わたしはあなたに復讐しにきたの。」

「カタリナ様、なにかの間違いでは？」

「だまれ！」

「カタリナ嬢、どうしたんだ？」

「サイラス・ランチエスターか。お前も始末してやる。」

カタリナは、自分の影から鎌を取り出す。ウガアといいながらガイ・アンダースンがおそいかかってくる。サイラスが護身術をつかおうとするが、ガイ・アンダースンはことごとくかわした。カタリナが鎌を振るつてくる。

マリアは願いをこめて祈った。光のかすみが二人をおおう。カタリナとガイ・アンダースンの動きが止まる。ガイ・アンダースンはサイラスに急所を打たれてうずくまり、カタリナは鎌を取り落としてそれが消える。

二人を縛りあげたものの、しばらくすると目を覚ましたように一人はうごきはじめ、恐るべき力でなわを引きちぎり、カタリナは再び自分の影から鎌をとりだす。

カタリナは鎌を一回転させると鼠が現れる。すると火の魔法が鼠をおそつて焼き尽くした。

「ジオルド様」

「間に合つてよかつた。カタリナは？」

「あんなかんじです。」

「そうですか。」

「ジオルド様、マリア・キャンベルがそれほど大切ですか？」

「カタリナ、正氣にもどつてください。」

「正氣？わたしはいつでも正氣ですよ。」

鎌を二回転させてその穴からおびただしい鼠が現れて襲つてくる。

マリアが再び祈ると鼠の動きがとまる。リペントはよからぬ考えを起こす者を改心させるだけでなく、魔力のかかった人間や生き物を止める効果があるようだつた。

ジオルドは鼠を焼き払うが、ふたたびリペントがきれると鎌を回して鼠が現れる。

「ジオルド、こつちはまかせろ」

「アラン、メアリ」

焼ききれずに生き残った鼠はアランとメアリの水魔法フロッドによつて溺死した。  
それをジオルドが焼却する。

「きりがないな。」

カタリナの鎌がのびてジオルドを襲う。

ジオルドは剣を抜く。

カキーン… カキーン… カキーン… カキーン

しばらく金属音が響き、カタリナの鎌もジオルドを襲うがそれを巧みに避ける。

「さすがジオルド王子」

カタリナの口元がゆがむ。

（これはカタリナではない…）

ジオルドは気つく。

鎌の動きが激しくなりジオルドの頬や身体に細かな傷がつきはじめる。

（僕の剣筋を読んでいるようだ。おそるべきスピードで習得している。）

「あつ…。」

カタリナはほくそえんだ。ジオルドの剣が鎌に薙ぎ払われた。

次の瞬間、カタリナの鎌が襲いかかる。

ヒュンと風を切る音がする。ジオルドは1回は避けたものの、胸に斜めに1mほどの切り傷をつくり鮮血が飛び散り、傷口から白い服がじわじわ赤黒く染まる。

「うぐ…。」

「ジオルド、どうした。」

アランが叫び、

「ジオルド様！」とマリアがあわてて駆け寄つて治癒魔法をかける。

そのマリアの背中をカタリナの鎌がおそいかかって1mほどの切り傷をつくった。

「きやああああ

鮮血がとびちる。さすがのマリアも激痛に悲鳴をあげる。ピンクのワンピースの背中が傷口からじわじわと赤黒くそまつっていく。

「マリアさん！」

メアリが叫ぶ。

そのすきにジオルドは剣をとろうとするが、鎌がひゅうと音をたて、剣を空中に投げ上げる。落ちてくるところを鎌で真つ二つにされた。そしてなんとジオルドの身体も薙ぎ払うようにつきとばした。

「カタリナ、正気に戻れ！」

アランが水をあびせようとし、ニコルが現れて目くばせする。二人の魔法が合わさつて水の竜巻トルネードがカタリナに襲いかかる。風音に水が混じり水の竜巻がカタリナに襲い掛かる。さすがのカタリナも水に溺れて気絶する。

しかし、いつ目をさましてあばれるかわからない。

一方、少女趣味の怪力男には、魔法省の職員がよつてたかつてサイレンスを唱える。ガイ・アンダースンには、ついにその動きをとめた。

その一晩だけはなんとか二人の動きをとめた。

翌日になつてまたカタリナとガイ・アンダースンは動き出す。

「メアリ、アラン様はわたしのもの。」

「カタリナ様、なにをおっしやるのですか？」

「向かつてくるなら殺すだけよ。」

カタリナは「ケルベロス」と叫んだ。

巨大なオオカミが現れた。メアリ、アラン、ニコルがトルネードをつかうが、ケルベロスは難なくすり抜けてメアリにかみつく。カタリナがニコルとアランに鎌を振るう。ヒュウと風を切る音がしてアラン、次にニコルの腹部に斜めに1mの切り傷をができ

る。鮮血が飛び散つた。倒れた二人を鎌でつぎつぎとつきとばした。

(なんて力だ……。)

しかし、アラン、ニコルを倒すと満足したようにカタリナはガイ・アンダースンと鼠にかまれた職員を引き連れていずこへ姿を消してしまつた。

ラーナ・スミス様がアスカルト家におどずれた。

わたしソフィアは驚いた。

「あのカタリナ様が皆さんを襲つたのですか。」

「ああ、ジオルド、アランのみならずお前の兄も大けがをしている。あのまま止めることができなければ、王子二人にけがをさせているから、カタリナは国家反逆罪になりかねない。アスカルト嬢は以前カタリナを救つたのだったな、なにか手がかりになるものや方法に心当たりがないか?」

「カタリナ様が永遠の眠りの魔法、エターナル・スリープをかけられたとき、わたしの心に見慣れないのになぜか懐かしく感じる黒髪の東洋風なのになぜか不思議な格好をした、水兵のえりのついた服をきた少女が窓や脳裏や瞼の裏にうかんでわたしに話しかけてくるのです。その少女のことを思い浮かべて祈つているとカタリナ様が目をさましたのです。」

「どうか、その少女のことを思い浮かべてくれないか。」

「はい。」

「じゃあ私は用があるから行く。たのむぞソフィア」  
「はい。」

ラーナ・スミス様はいざこかへ立ち去つた。

## 第36話 御前会議と魔法省での戦い

一方、王宮では急遽御前会議が開かれた。

「ザクセン侯、ヴラド公爵、このたびの魔法省での騒動、どう処置するか？」

「カタリナ・クラエスとガイ・アンダースンの処刑が適当かと。」

「ヴラド公、それは性急ではないか。カタリナをあやつった闇の魔力の少女がいるとうではないか。それをどうにかしないと第二第三のカタリナが生まれるのではないのか。」

「現に王の子息であるジオルド様、アラン様とその婚約者メアリ嬢、それに次期宰相との呼び声のあるアスカルト伯の長子のニコルが大けがをしている、議論の余地はないと思うが……。」

「??」

「ジオルド王子！」

ジオルドが従者に肩をもたれて、ずるずると連れられて御前会議の場に現れる。

「カタリナを処刑にしないでください。」

「ジオルド、いかにお前が王子といえこの場は御前会議だ。控えよ。」

「いえ、陛下、父上、カタリナはわたしの婚約者です。わたしの婚約者について発言する権利はあるはずです。わたしとカタリナ、ニコル、キース、ソフィア、メアリは約束しました。もし彼女が間違った道へいく場合は命がけでとめると。」

「しかし、お前もアランも現在重傷を負っているではないか。」

「でも陛下、父上、わたしは、彼女との約束を果たさねばなりません。幼馴染で生徒会でいつしょだつた友人たちも必死になつてカタリナをとめようとしています。どうか時間をください。」

「王子、そうはいつも騒動は止められない。もとを絶たねばならない。」

「そうですね。元をたたねばなりませんね。」

「ジエフリーア王子、スザンナ・ランドール侯爵令嬢！」

「この事件は闇の魔力が働いているのです。その魔力を發揮しているのはこのサラという少女。」

サラの肖像画が取り出される。

「この少女とその裏で動いている人間を捕まえるか、場合によつては処刑しなければ元をたつことはできぬいでしよう。陛下、調査のためにも時間をください。」

「闇の魔力だと……。ばかなことを。」

「現にラファエル・ウォルトがディーケ公爵夫人によつて実の母親の命が闇の魔力で奪

われ、カタリナの弟もこのサラという少女にあやつられた従兄によつて行方不明になつてゐる。調査の必要があるとおもいますば。」

「わかつた。カタリナとガイ・アンダーソンの件は、保留とし、そのサラという少女と闇の魔力の調査をすることにする。よいな。」

「陛下！そんな世迷いごとを信じるのですか？」

「ヴラド公爵、卿は、魔法省の次官でありながら、ディーク公爵夫人やキース・クラエスの誘拐事件をしらないのか？怠慢すぎないか？」

「それは、ディーク侯爵夫人の犯罪、キース・クラエスのものもただの誘拐事件で報告しているはずですが…。」

「ヴラド公爵、場合のよつては虚偽の報告ないしは公文書偽造になるぞ？」

「虚偽の報告をしているのはそつちじやないか！」

「さあ、どうかな。」

ジエフリーはほくそえむ。

翌日、魔力魔法研究室では…

「サイラス様」

「マリア・キヤンベルか？」

「光の契約の書の新しい魔法が解読できました。思い浮かんだものを紙に描くソートグ

ラフというものです。自分で見たものも紙に描くことができます。

「面白いな…： ラーナが聞いたらどう思うか…。しかし、今の事態を切り抜けるのに役に立つとは思えないな…。」

「サイラス」

「なんだ、 ラーナ・スマス。変人部署の部署長が何の用だ？」

「もうしわけない。聞こえてしまった。この風の魔法道具だ。遠くからの音をひろうといふことでテレフォンと名付けた。」

「いつのまに…。」

「そこにあるのはスピーカーという魔法道具で、その音をひろってこのテレフォンに流すんだ、」

「そんなもの置くな。」

「いいじゃないか。何事も実験だ。」

しばらく二人は言い争っていたが、マリアとデューアがとめる。

「こほん」

「じつはな、ソフィア・アスカルトが、カタリナをシリウス・ディークのかけた永遠の眠りから目覚めさせるきつかけを作ったのは知っているな。」

三人ともうなづく。

「そのときソフィアの脳裏、瞼の裏。そしてソフィアが自分の姿を映した窓に東洋人風の不思議な姿をした少女がうつったというんだ。その少女の姿をマリアの解読した魔法で紙に描いてカタリナにみせればなにか変化があるのでないかという気がするんだ。」

わたし佐々木敦子はおどろいた。その道具は、プッシュボタンはないもののなにかでみたカーテレフォンにそつくりだつたからだ。

「マリア、そのソートグラフをこの箱にかけてくれないか。本人がこの耳あてと額にこの箱を接触したとき思い浮かんだものがこの箱に入れた紙に描かれるようにしたいんだ。」

「はい。」

「よし。このフォト・オブスキュラをソフィアのところへもつていくぞ。デューアイ、マリアついてこい。」

「はい。」

「おいおい、ラーナ、二人の上司はこの俺だぞ。」

「わかつた。サイラスも来てくれ。あらためて二人に職務命令を出してくれ。」

「命令。マリア・キャンベル、デューアイ・パーシー、アスカルト伯爵家令嬢ソフィアのところへ行き、フォト・オブスキュラ使用の任務を命じる。」

「はい。」

二人は笑顔で答え、サイラスも微笑んだ。

一方、魔法省の敷地内では戦いが繰り広げられていた。カタリナ、ガイ・アンダースンと鼠にかまれた職員が舞い戻り、けがを押して出てきたジオルド、アラン、メアリ、ニコルと鼠にかまれていない職員とが魔法で戦っている。火、水の魔法の激しい応酬、アーセン・ゴーレム同士の戦い、キースもアーセン・ゴーレムを召喚して戦っている。アーセン・ゴーレムを出せるのがジオルド・キース勢に多いためになんとか戦えているものの、カタリナのケルベロスを三体のゴーレムでようやく抑えている状態で予断を許さない。鼠を出せるのがカタリナだけなので火属性の職員たちが待ち構え鼠を出すたびに焼き殺していくものの、何せ数が多いため、かまれる職員も続出して敵方に回り、形勢はじわじわと不利になりつつあつた。

## 第37話 黒幕の正体

お父様がやや慌てた様子で美しくもりりしい魔法省のガウンを着た女性、金髪のわたしと同じ歳くらいの女性というか、マリアさんに少年の3人を通す。

「ソフィア、お客様だ。魔法省魔法道具研究室のラーナ・スミスさんだ。」

「ラーナ様？ マリアさんに？」

「デューアイ・パーシーです。ソフィア様」

「はじめまして」

「まあ、挨拶はそれくらいにして、早速だがソフィア嬢、これに額をあててくれ。思い浮かべたものを紙に移す魔法道具だ。」

「はい。」

「これは…。」

そう、まさしく映し出されたのは、高校時代のわたし佐々木敦子の姿。

「ほんとうにみたことのない少女だな。」

ラーナ様はそうつぶやくとわたしに

「よし、これを魔法省へもつっていく。ソフィア嬢は思い出せる限りのものを念写してくれ

れ。」

「はい。」

少女の写真を持つてラーナ様はあわただしく出ていかれた。

魔法省の戦いでは、鼠にかまれた職員が次々に敵方にならっていく。  
「うぐつつ。」

けが人のジオルドがついに敵のアーセン・ゴーレムにつきとばされた。

「ジオルド、大丈夫か？」

「アラン、そんな…ひまは…ない…は、ず、だ。戦つて…く、れ。」

ジオルドは気を失い、首から力が抜け顔を横に向ける。メアリが一瞬心配顔になる。

「だいじょうぶ、気を失っているだけだ。」

アランがそういうと、メアリに黒い微笑が戻る。

「そうですわね。考えてみれば、あのジオルド様がこんなことくらいで死ぬわけがない  
ませんわ。」

「おいおい、かりにも王子で俺の兄だぞ。」

「それよりもあのゴーレムを抑えましょう。アラン様。」

「ああ。」

アランとメアリは敵のアーセン・ゴーレムを水流でおさえるが、その水流が敵の風魔

法でとばされる。アーセン・ゴーレムがアランをつきとばす。

「アラン様！」

メアリが叫ぶ。

「う……う……」

アランは、あおむけに倒れ、先日の傷口が開いて出血している。

あわてて従者たちが、止血して運び出した。

ケルベロスを抑えていたアーセン・ゴーレムがついに敵のゴーレムたちに倒される。ケルベロスが襲い掛かつてはや全滅かと思われた時、

「カタリナ・クラエス！こっちを見ろ！」

ラーナの声がひびきカタリナが東洋人風の少女の「写真」、フォト・オブスキュラでソフィアから念写されたこの世界で二番目の「写真」、わたし佐々木敦子の上半身の画像がプリントされたものをみせる。

「……あっちゃん……」

カタリナの潜在意識に訴える。

カタリナの動きが断続的になり、ガイ・アンダースンの動きと鼠にかまれた職員たちの動きもにぶくなっていく。しかし数の力はいかんともしがたく、魔法省に最後の時が近づいているように思われた。

そのとき光のかすみが一面にひろがる。マリアが祈りながらリペントを詠唱したのだ。

カタリナや敵の動きがますますにぶくなつていく。後ろから黒いローブの女が現れる。

「でてきたな、サラ」

「ラーナ・スミス、いやスザンナ・ランドール侯爵令嬢か。」

サラがほくそえむと周囲が闇になる。しかし、マリアが祈るとまた光のかすみがあたりにひろがり、光と闇が押し合いへし合いしている状態となる。

そのときだつた。マリアがふらつとしてあお向けにたおれる。

「マリアさん！」

マリアが悲鳴を上げる。ついに体力の限界が来たのだ。次の瞬間、アーセン・ゴーレムとキースが突き飛ばされる。

「ね、え、さ、ん…。」とつぶやくと首から力が抜けてうつぶせに倒れた。

メアリも疲れ切つていて、死んだ魚のようなうつろな目になり、呆然として座りこんでしまう。

「よく頑張ったがもう終わりだな。ソルシエの魔法省はわれわれのものだ。」  
ヴラド公爵が現れる。

「ヴラド、やはりお前か。」

「スザンナ・ランドール侯爵令嬢、上司になんという口の利き方だ。第一王子の婚約者ははいえこれで終わりだな。」

「ふん、のこと出てきおつて。殊勝なことだ。どちらが終わりかこれからわかるだろう。」

「カタリナ様！」

ソフィアがなにやら紙をもつてカタリナのそばへ寄ろうとする。

鎌がソフィアをおそった。

紙が空中にうかぶ。

「ソフィア嬢、あの紙には秘密があるんだな。」

「はい、わたしには読めませんがカタリナ様には読めるはずです。」

その紙が何なのか、わたし佐々木敦子は知っている。それは日本語で書かれたFor  
t u n e Lover IIの攻略メモだ。

「お兄様、あの紙をカタリナ様のところへ！」

「わかった。」

「なにをしている。」

サラがいぶかって叫ぶ。

カタリナの顔にその紙がかぶさる。

この世界で唯一の日本語でかかれた紙だ。

「…あつちゃん…。」

とつぶやきカタリナの動きが完全に止まつた。

ガイ・アンダースンとほかの職員たちの動きがにぶくなつていく。アーセン・ゴーレムが消えていく。同士討ちを始める者もではじめた。

「何が起こつたんだ。」

「さあな。」

「サラ、ヴラド公爵。お前たちを国家反逆罪で逮捕する。」

いつせいに数十人の職員がサイレンスをサラへ向けて詠唱する。

「うぐ…。」

「つかまえろ。」

サイレンスで束縛され、身体も束縛されたサラは連行されていく。

「ウオオオオオオオオウオオオオオ!!」

その時、ヴラド公爵が吠えて、その身体が黒々と変化してみるみるおおきくなつていく。そして70mというそびえたつ姿になつた。その姿は龍の身体を持つゴリラで胸

をドラミングする。

わたしソフィアは、さきほどまで呆けた感じであつたカタリナ様が魔法省の少女趣味の男の人と話しかけているのを見た。

「アンダースン先輩？」

「わたしのことはローラと呼びなさいと何度も・・・」

「あれ?? わたしたちどうかしていたんでしようか?」

「カタリナ様!」

「メアリ、ソフィア、何が起こっていたの? あ、あそこに倒れているのはマリア?」

「正気に戻られたのですね?」

「え? 正気って??」

「はい、実は・・・」

わたしたちは一部始終をカタリナ様に話す。

カタリナ様の顔が青くなつた。

「わたしがそんなひどいことを・・・ど、どうすれば・・・」

「幸いにもけが人は多いですが死者はでていません。主犯はサラというあの女です。」  
「それよりもあの化け物をなんとかしないと・・・」

「??」

「どうしたんですか？」

「??あの狸狩りをしたときの鏡があつくなつてゐる。」

カタリナ様が驚いた口調になつた。

カタリナ様の影が大きくうねるように動いた。

## 第38話 ポチの活躍再び

カタリナ様の影から、子犬が現れたかと思うとオオカミのようになる。

「ポチ！」

そしてさらに巨大化して雄たけびをあげた。

ウワオオオ～～ン

巨大化は70mに達するほどになつてとまる。

(ここは危険、はなれて)

ポチちゃんの声がわたしにも聞こえた。

ポチちゃんは、ドラゴン・ゴリラに向かつていく。

ドラゴン・ゴリラが口から火炎を吐こうとする。

魔法省の職員たちがいっせいに水魔法フロツドを詠唱する。

火炎がポチちゃんにむかうがフロツドは数十人にも及ぶ呪文であるため、なんとか抑えられている。

ドラゴン・ゴリラはいきりたつてその巨大な尾を職員たちへむけてむちのようにしならせる。

その尾が職員たちにおそいかかつてまめつぶをはじきとばすようになぎはらつた。そして返す刀とばかりにポチちゃんをなぎ倒す。

そうしてからまた火炎を吐こうとする。しかしそのすきはポチちゃんにとつて十分だつた。ポチちゃんは火炎を吐こうとするドラゴン・ゴリラの首筋にガブリとはげしくかみついて押し倒す。

身体を震わせて起き上がるうとするドラゴン・ゴリラ。

そのとき土属性の魔法が詠唱され、ドラゴン・ゴリラは地面に縛り付けられ数十体ものアーセン・ゴーレムがその足元におそいかかる。

水属性の職員たちは、氷の槍、アイスランサーを一斉にはなつ。

火属性の職員たちは、アイスランサーが攻撃しない場所にファイア・ボルテックスを投げつける。

火属性の職員と風属性の職員が同時に詠唱した。ファイアー・ホイールウインド、大規模火災のときにおこる火災旋風をドラゴン・ゴリラに浴びせようとする。

ポチちゃんはそれを察して絶妙なタイミングで口をはなした。

火災旋風がドラゴン・ゴリラを襲うがやけただれつとも地面上にしばられつつもドラゴン・ゴリラもがいでいる。

もう一度、ポチちゃんがドラゴン・ゴリラに立ち向かおうとする。

ドラゴン・ゴリラは尾をふつて再びポチちゃんを押し倒そうとするが、ポチちゃんはそれをよける。しかしドラゴン・ゴリラはよけたところへ尾を向けてポチちゃんを再び押し倒す。

とどめとばかりに火炎を吐こうとする。しかし、ポチちゃんは体制を立て直して吐かれた火炎をよけ、その首筋にかみつく。

ドラゴン・ゴリラは振り落とそうとするが深々と突き刺さった牙は抜けない。そのときドラゴン・ゴリラの顔に不気味な笑みがうかんだ。

その腹と背中のひれが光り始める。

「離れろ！ やつは、自爆するもつもりだ。」

ラーナ様が叫ぶ。

ポチちゃんは首筋にかみついて離れない。もし離したら自分をはじめ魔法省職員たちが焼き殺されることがみえるからだ。

「ポチ！ もういいから離して。」

カタリナ様が叫ぶ。

（離さないよ。離したら終わりになる。）

「でも、でもポチが焼かれてしまう。」

（ううん、大丈夫だよ。）

だんだんドラゴンゴリラを包む光はおおきくなつていく。

そして轟音が起こつて激しい閃光が周囲をつつむ。

太陽が落ちてきたかのような激しい光で何も見えない。

その場にいた半分以上が失明した。そしてもう半分が目に障害を負うことになった。

やがて閃光がなくなつてあたりは普通に風景がみえるが、そこにはポチちゃんの姿もドラゴン・ゴリラの姿もなかつた。

「ポチ……」

カタリナ様はがくっと頭をたれた。

どのくらい時間が経つたろうか。

「ワン、ワン」

子犬の吠え声がする。すると黒い子犬が吠えている。

「ポチ！」

カタリナ様は歓喜に包まれる。

「ぶじに帰つてきたのね。」

「クルルル……」

ポチちゃんはカタリナ様に甘える。

よかつた……

「どうやら解決したようだな。」

「ラーナ様がつぶやく。」

今度はつかまつても氣丈にふるまつていたサラががくつと首をたれる。

「ヴラード様……」

押し殺したようにつぶやいて連行されていった。

「力、カタリナ、さま？」

マリアさんが起き上がる。

「マリア、ごめんなさい」

カタリナ様は泣いてマリアさんをだきしめて何度も謝った。

「いえ、カタリナ様、正気に戻られたのですね。」

今度はマリアさんがうれし泣きをしてカタリナ様を抱きしめる腕に力が入る。

「わ、わたしの処分はどうなるのでしょうか？」

カタリナ様が不安顔でたずねる。

「そうだな、御前会議で検討することになるだろう。」

ラーナ様がお答えになつた。

わたし佐々木敦子は思う。カタリナ、内野さんは破滅してしまうのだろうか……

前世の女子高生の時とほとんど変わらない年齢で…

しかし一方でそうならない気もしていた。

原因がはつきりしているからだ。

さて、御前会議が開かれ、カタリナ様は呼びだされたという。

「カタリナ・クラエス。ガイ・アンダースン、お前たちが魔法省で行つた行為は万死に値するものだ。しかしどうしてそうなつたかは原因がはつきりしている。犯罪者が使つたナイフは処刑されない。同じようにお前たちは意図してしたわけではないから有罪にしないことにする。さいわいが人は多いが死人は数人程度で原因は火、水、アーセンゴーレム、鼠がらみでカタリナ嬢の鎌で死者が出ているわけではない。しかし魔法省の損害は、十数億単位にのぼるものだ。お前たちを操つた者を処刑する必要がある。すなわち、あのサラという少女を処刑にしない限りお前たちを不問にするわけにいかない。」

サラの処刑は、闇の魔法という禁忌にからむこと、貴族社会の矛盾を暴露することになるため、魔法省の敷地内で行われた。最初にトゲのついた鞭を39回打つてから石打にされた。ヴラド公爵への忠義については称賛され、彼女は満足した笑みを浮かべたとう。ヴラド公爵の財産は没収され、けがを負つた魔法省職員や死亡した職員の遺族へ慰問金、そして魔法省の施設道具の修繕料に充てられた。ヴラド公爵家は取り潰され、

親族は庶民に落とされた。

カタリナ様は魔法省に無事戻ることになつたが、クラエス家からも数千万の弁償金が払われた。

さて、事件が落着すると、ラーナ様がカタリナ様、マリアさん、そしてわたしソフィアを呼び出し、事情をお聞きになることになつた。

## 最終話 いつもそばにいるから

「しかし、この文字の書いてある紙が決め手になつたのか…。」

それは日本語で書かれたFortune Lover IIのメモである。

「文字は読めませんが、どうやら魔法省でマリアさんが恋をする物語が書かれているようなのです。先日フォト・オブスキュラで念写した画像をみせます。」

その画像はまさしくわたし佐々木敦子のゲーム用パソコンだつた。部屋の薄いピンク色の壁も映り込んでいる。

あの世界では、まな板のように見えるディスプレイとキーボードが写真になつている。

「このまな板のような部分に紙芝居のように絵が映し出されるのです。そしてこのソーセージ状のものの上で「矢印（※カーソルのこと）」で二回触ると絵が切り替わります。」

「サイラス、ソラ??これはデューアイ?これはエテエネルの王子セザールじやないか」

「そうです。わたしも驚きました。わたしたちの世界とそつくりなんです。」

「これは、カタリナ様です。ケルベロスを召喚し、鎌を振るつてゐる……」

「先日の姿とそつくりだな。」

「戦つてゐるのはサイラス様、ソラさん、デューアイくん、セザール様、ジオルド様、アラン様、お兄様、キース様とマリアさんです。」

「これは御前会議の場面だろうな、そつくりだが、カタリナが連行されて裁判になるところが違うな。」

「こちらは、闇の魔力をもつたカタリナ様が勝利してしまった場面です。」

「マリアさんが死んで、サイラス様、ソラさん、デューアイくん、セザール様、ジオルド様、アラン様、ニコル様、キース様が廃人のようになつてしまふ。」

「カタリナは知つていたのか?」

「いえ、魔法省にはいつてからしばらくして知りました。夢のお告げで……」

「カタリナ様、ラファエル様をディーア侯爵家の倉庫の隠し部屋で救つた時も同じことをおつしやつてましたね。」

「はい……思い切つて話すとわたしは別の世界からこの世界が描かれた電気信号による紙芝居のようなもの、それもソフィアが見せてくれた選択肢によつて話がかわるものを見

やつていました。あの世界では「乙女ゲーム」と呼ばれるもので、マリアが主人公だつたんです。」

「わ、わたしがですか？」

マリアさんが不思議そうな顔をする。

「うん、そうなの。」

「それでカタリナ様はわたしが思いを寄せる男性について繰り返しお聞きになつていたり、サイラス様とうまくいくようにしてましたんですね。」

「その別の世界の親友だったのが「あつちやん」なる人物でそれで闇の魔法が解けたというわけか。」

「そうみたいですね。」

「わかつた。興味深いな。転生前の記憶がよみがえれば闇魔法を解呪する力になると  
は： 今日のところはおそいからこれで事情聴取は終わりにする。カタリナはあした  
からまた闇の魔法の練習と闇の契約の書の解説の続きをやつてくれ。」

「わかりました。」

翌日、カタリナ様は魔法省に出勤して、いつものようにラファエル様に闇の魔法の練習をはじめた。

どくろのついた黒いステッキを振る。

「えいつ。」

「黒い豆のようなものが出たね。??」

「だんだん大きくなつていく?」

「そうだね。」

「な、なにこれ、引っ張られる」

「カタリナさん!」

それから急に黒い豆から強い力がかかるつてカタリナ様を吸い込んでいつてしまつた。カタリナ様をすいこむと消えた。

カラーン……と音をたててどくろのステッキが地面にころがつた。

ラファエル様はカタリナ様を捕まえる前に黒い豆にのみこまれたのをぼうぜんと見ていたという。

チュン、チュン、チュン……

わたしは、交通事故にあつた内野さんの病室にいた。一命をとりとめたものの意識不明の状態が続き、親御さんに希望して看病をしていた。

「う、ううん……。」

わたしは驚いた。一生植物状態が続くという話だつたが手を一晩中握り続けて、内野さんに語り続け、祈つていた。

「？あつちやん??ここはどこ?」

「病院だよ。あなたは事故にあつて、瀕死の重傷を負つて、10日以上意識不明だつたの。」

「あ、そういえば……ジオルドを攻略できなくて、朝起きて学校へ行こうとしたら何か硬いものにぶつかつてから記憶が……あのね、あつちやんわたし不思議な夢をみたの。」

「どんな夢？」

「わたしがカタリナに生まれ変わった夢。破滅すると思ったから必死に対策をしたの。ジオルドとも、メアリともアランともソフィアともなかよくなつてマリアちゃんととも仲良くなつたの。」

「カタリナなのに？」

「そうそう。マリアのお菓子つてとてもおいしいし、マリアつてとてもいい娘なんだ。」

「そして無事に魔法学園を卒業したら、魔法省に勤めることになつて……あつちやんが Fortune Lover II をプレイしていたのを見て、そのとおりやつたらしばらく上手くいつてた気がしてたんだけど……あれ??はつきり覚えていない……なにがあつたんだろう……。」

「Fortune Lover II つて…… Fortune Lover に続編が出るの？」

「うん、魔法省の新キャラがでるよ…あれ??誰だつけ??」

数日後

「内野さんの容体が?」

「どうしたの?」

「あの交通事故で打撲を受けていたので、複雑骨折が別の場所から起こつて内出血が…。」

わたしは急遽病院へ行つた。

内野さんは息もたえだえだつたが意識はしつかりしていた。

「あつちやん、今までありがとう。ようやくお礼が直接言えた…。」

「何言つてるのこれからじやない!」

「あの世界にもどるよ…わたし…。さようなら…。」

内野さんの手を強く握つた、しかし、だんだん皮膚から生気が抜けていった。内出血であちこちがエビ色ににじんでいた。

内野さんが言つた通りあれから1年後Fortune Lover IIが発売された。

近隣五か国会合の場面となり、ソフィアの部屋が映し出されたときに眠くなつた。わたしは、ソフィアの部屋にいてソフィア自身になつてているようだつた。そしてなぜ

かソフィアの身体をつかって衝動的に日本語で Fortune Lover II について書き綴っていた。

翌日目が覚めた時ふつうに自宅のベッドにいた。

わたしは、机の上にある内野さんと一緒に写っている写真に話しかける。「いっきます。」

それから着替えて朝食をとり歯を磨いて登校した。よく晴れた日だった。もし、生まれ変わることができるならもう一度あの子と友達になりたい……